

八合田遺跡 森の原遺跡第1・2次 今宿大谷地遺跡

発掘調査報告書

山形県埋蔵文化財センター調査報告書第213集



2014

公益財団法人 山形県埋蔵文化財センター



はち とう た 遺 跡
八 合 田
もり はら の 原 遺 跡 第 1・2 次
森
いま しゆく おお や ち 地 遺 跡
今 宿 大 谷

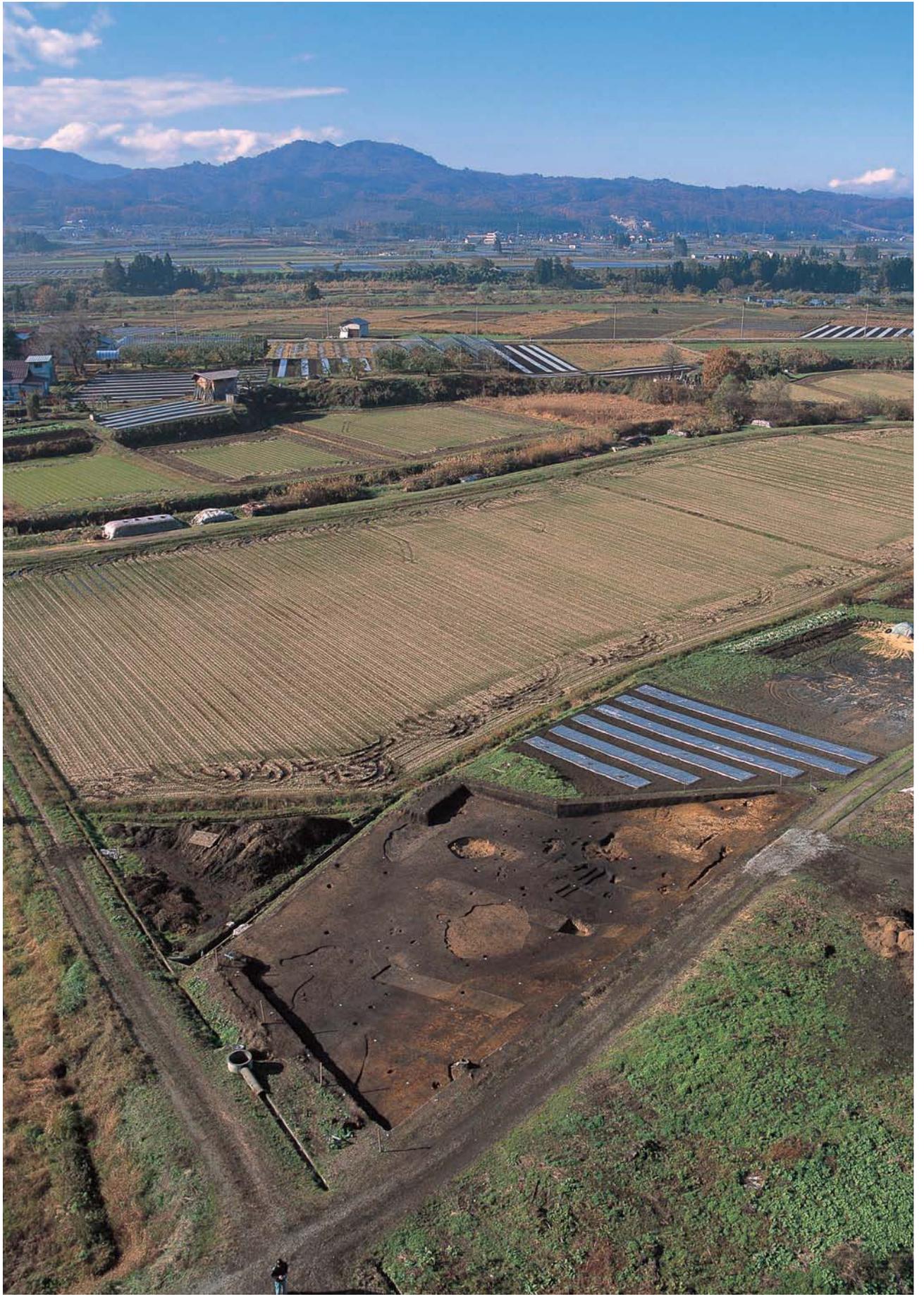
発掘調査報告書

山形県埋蔵文化財センター調査報告書第 213 集

平成 26 年

公益財団法人 山形県埋蔵文化財センター





八合田遺跡完掘全景（南東から）



森の原遺跡第1次調査 調査区全景（写真上が南東）



森の原遺跡第2次調査 調査区全景（写真上が南東）



今宿大谷地遺跡完掘全景（南から）



今宿大谷地遺跡出土土器

序

本書は、公益財団法人山形県埋蔵文化財センター（平成24年4月1日財団法人から移行）が発掘調査を実施した、八合田遺跡、森の原遺跡、今宿大谷地遺跡の調査成果をまとめたものです。

八合田遺跡と森の原遺跡は、山形県の内陸部に位置する村山市にあります。今宿大谷地遺跡は村山市の北側に位置する大石田町にあります。この度、東北中央自動車道（東根～尾花沢）建設事業に伴い、事前に工事予定地内に包蔵される、八合田遺跡、森の原遺跡、今宿大谷地遺跡の発掘調査を実施しました。

調査では各遺跡ともに縄文時代に属する遺物が出土しました。また、森の原遺跡では平安時代に帰属すると考えられる遺物も出土しています。今回調査した場所はいずれも集落の中心ではありませんでした。近辺に中心となる遺跡が存在していたと考えられます。また各遺跡とも近現代による土地の改変が見受けられました。近代以降土地の開発が進んだことも分かりました。

埋蔵文化財は、祖先が長い歴史の中で創造し、育んできた貴重な国民的財産といえます。この祖先から伝えられた文化財を大切に保護するとともに、祖先のつくり上げた歴史を学び、子孫へと伝えていくことが、私たちに課せられた重要な責務と考えます。その意味で本書が文化財保護活動の普及啓発や、学術研究、教育活動などの一助となれば幸いです。

最後になりますが、当遺跡を調査するに際し御支援、御協力いただいた関係者の皆様に心から感謝申し上げます。

平成26年3月

公益財団法人 山形県埋蔵文化財センター

理事長 菅野 滋

凡 例

- 1 本書は、東北中央自動車道（東根～尾花沢）建設に係る「八合田遺跡・森の原遺跡第1・2次・今宿大谷地遺跡」の発掘調査報告書である。
- 2 既刊の年報、速報会資料、調査説明会資料などの内容に優先し、本書をもって本報告とする。
- 3 調査は国土交通省東北地方整備局山形河川国道事務所の委託により、公益財団法人山形県埋蔵文化財センター（平成24年4月1日財団法人から移行）が実施した。
- 4 本書の執筆は、渡辺和行、伊藤大介、後藤枝里子、五十嵐萌が担当し、三浦秋夫、小笠原正道、黒坂雅人、斉藤敏行、伊藤邦弘、須賀井新人が監修した。
- 5 本書の執筆分担は下記の通りである。
 - 第Ⅰ章 渡辺和行
 - 第Ⅱ章 伊藤大介
 - 第Ⅲ章 第1・2節 渡辺和行
 - 第Ⅲ章 第3節 伊藤大介
 - 第Ⅳ章 第1・2節 五十嵐萌、渡辺和行
 - 第Ⅳ章 第3節 五十嵐萌、後藤枝里子
 - 第Ⅴ章 第1・2節 渡辺和行
 - 第Ⅴ章 第3節 後藤枝里子
 - 第Ⅵ章 第1節 パレオ・ラボ AMS年代測定グループ
 - 第Ⅵ章 第2節 パリノ・サーヴェイ株式会社
 - 第Ⅵ章 第3節 パレオ・ラボ AMS年代測定グループ
 - 第Ⅵ章 第4節 (株) 加速器分析研究所
 - 第Ⅵ章 第5節 パリノ・サーヴェイ株式会社
 - 第Ⅶ章 第1・3節 渡辺和行
 - 第Ⅶ章 第2節 五十嵐萌
- 6 遺構図に付す座標値は、平面直角座標系第X系（世界測地系）により、高さは海拔高で表す。方位は座標北を表す。
- 7 本書で使用した遺構・遺物の分類記号は下記のとおりである。

SK…土坑	SD…溝跡	SE…井戸跡	SP…ピット	SG…河川跡
SX…性格不明遺構	SL…炉跡	RP…登録土器	RQ…登録石器	
- 8 遺構・遺物実測図の縮尺・網点の用法は各図に示した。
- 9 遺物実測図の断面黒塗りは須恵器を表す。また、拓影断面図の配置は左から内面・断面・外面の順に掲載した。
- 10 基本層序および遺構覆土の色調記載については、2008年版農林水産省農林水産技術会議事務局監修の「新版標準土色帖」によった。
- 11 遺物観察表において、括弧内の数値は、図上復元による推定値、または残存値を示している。

調査要項

調査委託者	国土交通省東北地方整備局山形河川国道事務所		
調査受託者	財団法人山形県埋蔵文化財センター（平成22・23年度） 公益財団法人山形県埋蔵文化財センター（平成24・25年度）		
受託期間	平成22年4月1日～平成23年3月31日 平成23年4月1日～平成24年3月31日 平成24年4月6日～平成25年3月29日 平成25年4月1日～平成26年3月31日		
遺跡名	八合田遺跡 <small>はちごうた</small>		
遺跡番号	208 - 053		
所在地	山形県村山市大字土生田字八合田 <small>とちうだ</small>		
現地調査	平成22年9月8日～11月26日		
調査担当者	平成22年度	調査課長 調査研究員 調査研究員 調査員	阿部明彦 渡辺和行（調査主任） 池田透 渡部裕司
整理担当者	平成25年度	整理課長 調査研究員 調査研究員	黒坂雅人 渡辺和行（整理主任） 伊藤大介
遺跡名	森の原遺跡 <small>もり はら</small>		
遺跡番号	208-048		
所在地	山形県村山市大字土生田字鼠田 <small>ねずみだ</small>		
現地調査	平成22年10月4日～11月30日 平成23年5月17日～9月30日		
調査担当者	平成22年度	調査課長 主任調査研究員 調査員 調査員	阿部明彦 高橋敏（調査主任） 佐藤智幸 千田一志
	平成23年度	調査課長 主任調査研究員 調査研究員	安部実 高橋敏（調査主任） 向田明夫
整理担当者	平成24年度	整理課長 主任調査研究員 調査員	黒坂雅人 向田明夫（整理主任） 五十嵐萌
	平成25年度	整理課長	黒坂雅人

		調査研究員	渡辺和行（整理主任）				
		調査研究員	伊藤大介				
遺跡名	いましゆくおおやち 今宿大谷地遺跡						
遺跡番号	341-134						
所在地	山形県北村山郡大石田町大字今宿字大谷地						
現地調査	平成 23 年 10 月 18 日～ 11 月 17 日						
調査担当者	平成 23 年度	調査課長	安部実				
		調査研究員	渡辺和行（調査主任）				
		調査研究員	向田明夫				
		調査員	後藤枝里子				
整理担当者	平成 25 年度	整理課長	黒坂雅人				
		調査研究員	渡辺和行（整理主任）				
		調査研究員	伊藤大介				
調査指導	山形県教育庁文化財保護推進課（平成 22 ～平成 24 年度） 山形県教育庁文化財・生涯学習課（平成 25 年度）						
調査協力	東日本高速道路株式会社東北支社山形工事事務所 村山市教育委員会 大石田町教育委員会 山形県教育庁村山教育事務所						
業務委託	基準点測量業務 株式会社三和技術コンサルタント 株式会社成和技術 地形・遺構測量（俯瞰撮影）業務 株式会社三和技術コンサルタント 株式会社イビソク 理化学分析業務 パリノ・サーヴェイ株式会社 株式会社パレオ・ラボ 株式会社加速器 分析研究所						
発掘作業員	有路秀男 五十嵐美恵 伊藤仁子 伊藤憲子 井上正一 大沼寅松 大類彦一郎 奥山洋子 尾崎友恵 海藤キミヨ 海藤浄 柿崎繁 柿崎次男 小松薫 小松八十吉 齊藤敦子 齊藤喜美子 佐々木栄一 笹原幸一 笹原登 志賀昭夫 斯波九一郎 寺崎勝 永澤賢悦 縄正治 早坂富次 平山勝子 細矢智子 松坂英勝 村岡淳子 元木美佐子 元木實 森田栄一 八鍬正清 結城孝子 渡邊勲二（五十音順）						
整理作業員	日下部朋子 佐竹敬次 柴田敏夫 菅井ひろみ 長谷川公一 林真世 山口敦子 （五十音順）						

目 次

I 調査の経緯	
1 調査に至る経緯	1
2 発掘調査の経過と方法	1
3 整理作業の経過	2
II 遺跡の位置と環境	
1 地理的環境	6
2 歴史的環境	6
III 八合田遺跡	
1 遺跡の概要	11
2 遺構	11
3 遺物	12
IV 森の原遺跡第1・2次	
1 遺跡の概要	26
2 遺構	26
3 遺物	28
V 今宿大谷地遺跡	
1 遺跡の概要	53
2 遺構	54
3 遺物	55
VI 理化学分析	
1 森の原遺跡における放射性炭素年代測定	75
2 森の原遺跡の火山灰分析	77
3 今宿大谷地遺跡における放射性炭素年代測定(1)	81
4 今宿大谷地遺跡における放射性炭素年代測定(2)	82
5 今宿大谷地遺跡の火山灰分析	85
VII 総括	
1 八合田遺跡	88
2 森の原遺跡第1・2次	88
3 今宿大谷地遺跡	89
報告書抄録	巻末

表

表 1 遺跡地名表	10	表 11 森の原遺跡第 1・2 次 測定試料および処理	76
表 2 八合田遺跡 縄文土器・陶器・瓦質土器観察表	14	表 12 森の原遺跡第 1・2 次 放射性炭素年代測定および暦年較正の結果	76
表 3 八合田遺跡 石器観察表	14	表 13 森の原遺跡第 1・2 次 テフラ分析結果	78
表 4 森の原遺跡第 1・2 次 縄文土器観察表	30	表 14 今宿大谷地遺跡 測定試料および処理	81
表 5 森の原遺跡第 1・2 次 石器・石製品観察表	31	表 15 今宿大谷地遺跡 放射性炭素年代測定および暦年較正の結果	82
表 6 森の原遺跡第 1・2 次 土師器・須恵器観察表	31	表 16 今宿大谷地遺跡 測定試料および処理	84
表 7 森の原遺跡第 1・2 次 陶磁器観察表	31	表 17 今宿大谷地遺跡 放射性炭素年代測定および暦年較正の結果	84
表 8 森の原遺跡第 1・2 次 金属製品観察表	31		
表 9 今宿大谷地遺跡 縄文土器観察表	57		
表 10 今宿大谷地遺跡 石器・石製品観察表	58		

図 版

第 1 図 八合田遺跡概要図	3	第 26 図 森の原遺跡第 1・2 次 性格不明遺構 SX005、溝跡 SD39	41
第 2 図 森の原遺跡第 1・2 次概要図	4	第 27 図 森の原遺跡第 1・2 次 溝跡 SD239、井戸跡 SE137、土坑 SK247	42
第 3 図 今宿大谷地遺跡概要図	5	第 28 図 森の原遺跡第 1・2 次 性格不明遺構 SX1、ピット SP 2・14・23・28・29・31・34	43
第 4 図 地形分類図	8	第 29 図 森の原遺跡第 1・2 次 ピット SP35・43・49・51・172・174・175・176・188	44
第 5 図 遺跡位置図	9	第 30 図 森の原遺跡第 1・2 次 ピット SP193・194・195・221・225・230・249・262・278	45
第 6 図 八合田遺跡 遺構配置図の割付	15	第 31 図 森の原遺跡第 1・2 次 縄文土器 (1)	46
第 7 図 八合田遺跡 遺構配置図 (1)	16	第 32 図 森の原遺跡第 1・2 次 縄文土器 (2)	47
第 8 図 八合田遺跡 遺構配置図 (2)	17	第 33 図 森の原遺跡第 1・2 次 縄文土器 (3)	48
第 9 図 八合田遺跡 遺構配置図 (3)	18	第 34 図 森の原遺跡第 1・2 次 石器	49
第 10 図 八合田遺跡 遺構配置図 (4)	19	第 35 図 森の原遺跡第 1・2 次 石製品	50
第 11 図 八合田遺跡 調査区北壁土層断面	20	第 36 図 森の原遺跡第 1・2 次 土師器・須恵器	51
第 12 図 八合田遺跡 ピット・柱穴 SP 3・9・39・41・45・47・67	21	第 37 図 森の原遺跡第 1・2 次 陶磁器・銭貨	52
第 13 図 八合田遺跡 ピット・柱穴 SP71・73・84・106、土坑 SK17・32・85	22	第 38 図 今宿大谷地遺跡 遺構配置図の割付	59
第 14 図 八合田遺跡 溝跡 SD72、性格不明遺構 SX66	23	第 39 図 今宿大谷地遺跡 遺構配置図 (1)	60
第 15 図 八合田遺跡 縄文土器 (1)	24	第 40 図 今宿大谷地遺跡 遺構配置図 (2)	61
第 16 図 八合田遺跡 縄文土器 (2)、陶器、瓦質土器、石器	25	第 41 図 今宿大谷地遺跡 調査区西壁断面 (1)	62
第 17 図 森の原遺跡第 1・2 次 遺構全体図	32	第 42 図 今宿大谷地遺跡 調査区西壁断面 (2)、調査区東壁断面	63
第 18 図 森の原遺跡第 1・2 次 遺構配置図 (1)	33	第 43 図 今宿大谷地遺跡 柱穴 SP 2、土坑 SK 3	64
第 19 図 森の原遺跡第 1・2 次 遺構配置図 (2)	34	第 44 図 今宿大谷地遺跡 土坑 SK8、地床炉 SL19	65
第 20 図 森の原遺跡第 1・2 次 遺構配置図 (3)	35	第 45 図 今宿大谷地遺跡 第 50 図 1・2・3 接合遺物出土状況	66
第 21 図 森の原遺跡第 1・2 次 基本層序図	36	第 46 図 今宿大谷地遺跡 第 50 図 5 接合遺物出土状況	66
第 22 図 森の原遺跡第 1・2 次 性格不明遺構 SX001、土坑 SK203	37	第 47 図 今宿大谷地遺跡 第 50 図 4 接合遺物出土状況	67
第 23 図 森の原遺跡第 1・2 次 性格不明遺構 SX007	38	第 48 図 今宿大谷地遺跡 第 51 図 7 接合遺物出土状況	67
第 24 図 森の原遺跡第 1・2 次 性格不明遺構 SX008、溝跡 SD237	39		
第 25 図 森の原遺跡第 1・2 次 性格不明遺構 SX009	40		

第 49 図	今宿大谷地遺跡	第 51 図 8 接合遺物出土状況	67	第 57 図	森の原遺跡第 1・2 次 暦年較正結果	76
第 50 図	今宿大谷地遺跡	縄文土器 (1)	68	第 58 図	森の原遺跡第 1・2 次 火山ガラスの屈折率	79
第 51 図	今宿大谷地遺跡	縄文土器 (2)	69	第 59 図	森の原遺跡第 1・2 次 テフラ	80
第 52 図	今宿大谷地遺跡	縄文土器 (3)	70	第 60 図	今宿大谷地遺跡 暦年較正結果	82
第 53 図	今宿大谷地遺跡	縄文土器 (4)	71	第 61 図	今宿大谷地遺跡 暦年較正結果	84
第 54 図	今宿大谷地遺跡	石器	72	第 62 図	今宿大谷地遺跡 火山ガラスの屈折率	86
第 55 図	今宿大谷地遺跡	石製品	73	第 63 図	今宿大谷地遺跡 テフラ	87
第 56 図	今宿大谷地遺跡	礫	74			

写真図版

巻頭写真 1	八合田遺跡完掘全景	写真図版 15	性格不明遺構 SX008 完掘、SX009 調査状況
巻頭写真 2	森の原遺跡第 1 次調査 調査区全景、森の原遺跡 第 2 次調査 調査区全景	写真図版 16	溝跡 SD237、ピット SP14・172・174・175・ 176・221・249・278 断面
巻頭写真 3	今宿大谷地遺跡完掘全景	写真図版 17	縄文土器 (1)
巻頭写真 4	今宿大谷地遺跡出土土器	写真図版 18	縄文土器 (2)
八合田遺跡		写真図版 19	縄文土器 (3)
写真図版 1	ピット・柱穴 SP 3・9・39・41・45・47・67・ 71 断面	写真図版 20	縄文土器 (4)
写真図版 2	ピット・柱穴 SP84・106、土坑 SK17・32・85 断面	写真図版 21	石器、石製品
写真図版 3	土坑 SK43 遺物出土状況、グリッド 4803 - 2721 遺物出土状況	写真図版 22	土師器、須恵器
写真図版 4	溝跡 SD72 断面、性格不明遺構 SX66 断面	写真図版 23	陶磁器、銭貨
写真図版 5	縄文土器 (1)	今宿大谷地遺跡	
写真図版 6	縄文土器 (2)、陶器、瓦質土器、石器	写真図版 24	遺跡全景
森の原遺跡第 1・2 次		写真図版 25	調査区西壁断面、柱穴 SP 2 断面、 土坑 SK11 断面
写真図版 7	A、B 区完掘状況、C 区遺構検出状況	写真図版 26	土坑 SK3 検出及び遺物出土状況、土坑 SK3 断面
写真図版 8	溝跡 SD39、ピット SP2・23・28・29・31・34・ 35 断面	写真図版 27	土坑 SK3 遺物出土状況、土坑 SK3 完掘
写真図版 9	ピット SP43・49・51、性格不明遺構 SX1 断面、 A 区南部サブレンチ、石鏃出土状況、A、B 区 基本層序	写真図版 28	土坑 SK8 断面及び遺物出土状況、土坑 SK8 完掘、 地床炉 SL19 検出・断面・焼土検出
写真図版 10	C 区南部完掘状況、G4901 火山灰検出状況、 G3903 遺物出土状況	写真図版 29	遺物包含層と遺物出土状況
写真図版 11	土坑 SK247 断面、RQ008 出土状況、 溝跡 SD239 断面	写真図版 30	縄文土器 (1)
写真図版 12	井戸跡 SE137 完掘、ピット SP188・230 断面	写真図版 31	縄文土器 (2)
写真図版 13	性格不明遺構 SX001 完掘、土坑 SK203 遺物出土状況、 RP011 出土状況、ピット SP193・194・195 断面	写真図版 32	縄文土器 (3)
写真図版 14	性格不明遺構 SX005・SX007 完掘	写真図版 33	縄文土器 (4)、石器
		写真図版 34	石製品、礫

I 調査の経緯

1 調査に至る経緯

八合田遺跡、森の原遺跡第1・2次、今宿大谷地遺跡は、いずれも国土交通省東北地方整備局山形河川国道事務所による東北中央自動車道(東根～尾花沢)建設に伴って緊急発掘調査が実施された。

東北中央自動車道(東根～尾花沢)は、東根市羽入～尾花沢市尾花沢に至る高速道路で、平成14年に開通した上山～東根間と現在供用中の尾花沢新庄道路を接続し、並行する国道13号の渋滞緩和や信頼性の高いネットワークの充実を図るために建設が行われている。

その事業範囲には25遺跡が確認されており、そのうち19遺跡が調査対象となっている。

A 八合田遺跡

遺跡登録年度は平成11年度であり、平成22年度に発掘調査を行った。平成22年7月13、14日に山形県教育庁文化財保護推進課(現:文化財・生涯学習課)による試掘調査が行われ、その結果、事業区内の南西部分(第1図)について調査が必要との判断がなされた。それ以外の部分については重機によるキャタピラーなどの痕跡が多く見られ削平されたとみて調査区から除外された。

その後、調査結果をもとに国土交通省東北地方整備局山形河川国道事務所、山形県教育委員会などによって協議が進められ、同年9月8日～11月26日までの期間で調査を行うことが決定した。

調査に先だって「埋蔵文化財発掘調査の届出」を山形県教育委員会に同年8月5日付で提出、受理された後「埋蔵文化財の発掘調査について」の通知を同年8月26日に受け取った。

B 森の原遺跡第1・2次

遺跡は昔から縄文時代の土器や石器が出土する地として認知されていた。遺跡が所在する土生田地区の周辺では、縄文時代早期の土器が発見されるなど、村山市史で

もその存在が示されている。一方、遺跡地内も含めた近隣では道路拡張工事や大規模ほ場整備事業が行われている。なお、ほ場整備は昭和50年代から行われた。これらによって遺跡自体かなりの削平を受けているものと思われる。

調査は東北中央自動車道が遺跡を横断するため平成22年8月10日に山形県教育庁文化財保護推進課(現:文化財・生涯学習課)により試掘調査が行われ、その結果、複数の遺構・遺物の検出が認められたため、遺跡が調査を必要とする埋蔵文化財包蔵地として確認された。その後、調査結果をもとに国土交通省東北地方整備局山形河川国道事務所、山形県教育委員会などによって協議が進められた結果、山形県埋蔵文化財センターが委託を受け、記録保存を目的とした発掘調査が行われることとなった。

第1次調査は、平成22年9月2日に「埋蔵文化財発掘調査の届出」を行い、同年9月28日に「埋蔵文化財の発掘調査について」の通知を受け取った。

第2次調査は、平成23年4月4日に「埋蔵文化財発掘調査の届出」を行い、同年4月12日に「埋蔵文化財の発掘調査について」の通知を受け取った。

C 今宿大谷地遺跡

遺跡登録は平成23年度で調査年度も同年度である。

平成23年6月8日と7月1日に山形県教育庁文化財保護推進課(現:文化財・生涯学習課)による試掘調査が行われ、上記2遺跡と同様の経緯を経て同年8月18日付けで「埋蔵文化財発掘調査の届出」を提出、受理された後「埋蔵文化財の発掘調査について」の通知を同年9月7日に受け取り、平成23年10月18日～11月17日の期間で調査を行った。

2 発掘調査の経過と方法

八合田遺跡、森の原遺跡第1・2次、今宿大谷地遺跡のいずれも、まずは遺跡周辺の環境整備と調査区の縄張りを行った。その後遺構検出面を確認するための坪掘り

や線掘りを行い、そこで確認された検出面を基準として、重機による表土掘削を行った。表土掘削の完了後、遺構検出のためのジョレン掛けを行った。その作業と並行して測量を行う基準となる基準杭・グリッド杭の打設を行った。続いて遺構を検出し、併せて遺構の登録を行った。

その後、遺構の精査としてピットを検出面から一段下げのように掘った。柱穴かどうかの確認と、柱穴であった場合の柱痕確認のためである。柱穴であった場合は柱痕の位置を平面図に記録している。その後に半截、断面図作成と写真撮影後に完掘を行った。なお、一段下げた時点では柱痕に気付かず、半截の段階で柱穴だと確認出来た遺構については柱痕の位置を記録していない。

土坑や性格不明遺構は検出後、大きさに併せて十字にベルトを残すもの、半截するものに分けて遺構精査を行った。いずれも土層を図面と写真に記録し、遺物の出土があれば適宜記録した上で完掘した。

溝跡や河川跡はそれぞれの幅や長さに応じて適宜ベルトを設定し掘り下げを行った。土坑や性格不明遺構と同様に遺物が出土した際は適宜記録した。最後にベルトとして残っていた部分の断面を記録し掘り下げを行って完掘した。各遺構の精査はこのような手順を基本とし、その他に必要と考えられる記録は適宜行った。

全遺構を完掘した段階で遺跡全体の空中写真撮影及び空中写真測量を行った。なお全遺構を完掘する前段階であったとしても、発掘調査期間との兼ね合いで期間終盤に記録を行った場合もある。その後器材等の片付けをし、現場を撤収した。

調査期間は八合田遺跡が平成22年9月8日から11月26日、森の原遺跡第1次調査が平成22年10月4日から11月30日、同遺跡第2次調査が平成23年5月17日から9月30日、今宿大谷地遺跡が平成23年10月18日から11月17日である。なお、森の原遺跡の調査区は調査回数との兼ね合いからA・B・C区と分けている。

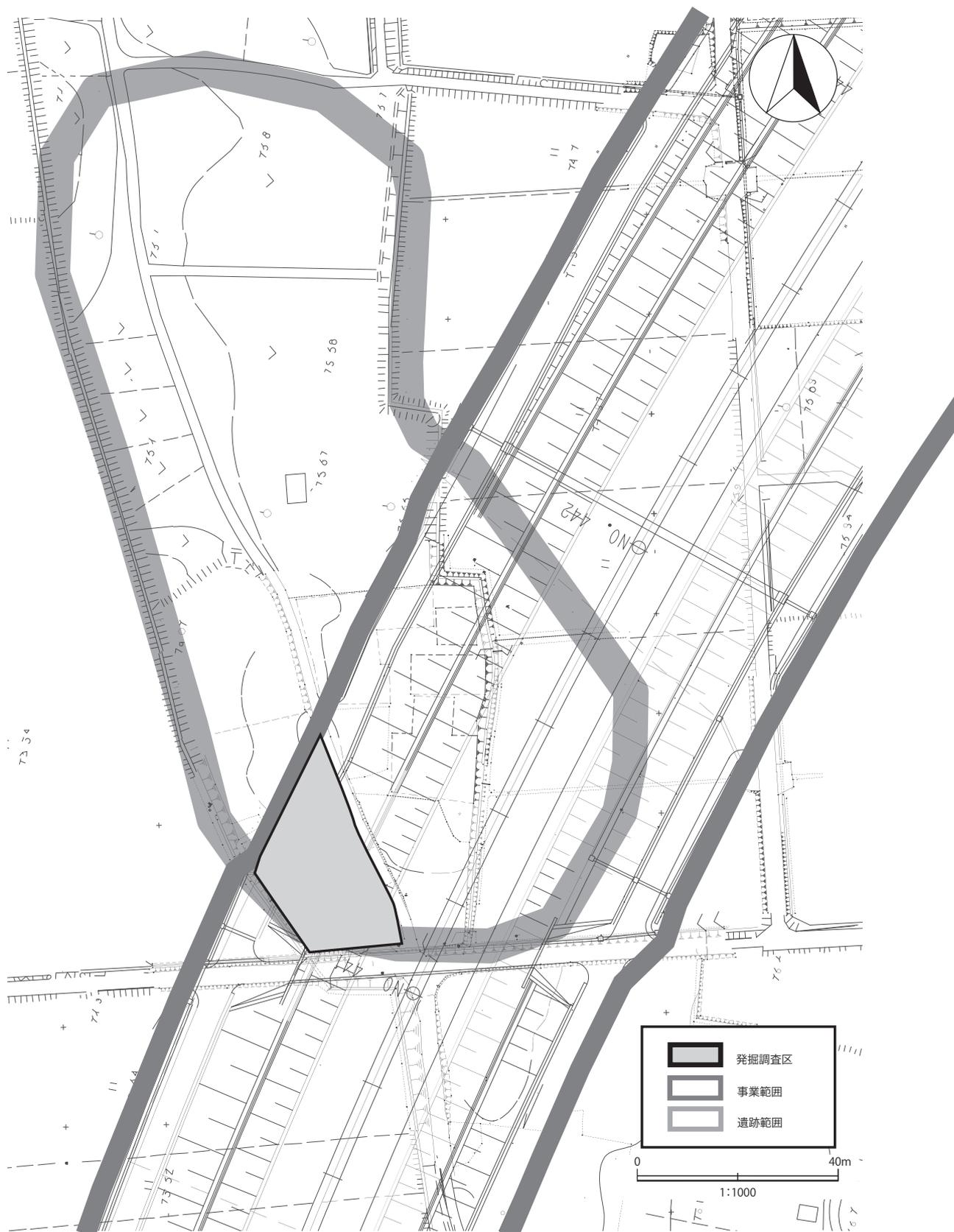
なお、図面作成の基準となるグリッドであるが山形県全域を囲むように南北をX軸、東西をY軸とし、1グリッドあたり40m四方の大グリッドとした。さらに大グリッド1つを南から北へ00～99、西から東へ00～99と400m四方の中グリッド、さらに中グリッド1つを4

m四方の小グリッドに分割した。そのため、グリッド番号を「大グリッド南北・東西、中グリッド南北・東西、小グリッド南北・東西」の順で、AA0000-0000の10桁のアルファベットと数字で示すこととした。その基準をもとに、グリッド名を8m間隔で打設した基準杭に付していった。グリッドの帰属は南西隅を基準とし、国土座標は平面直角座標系第X系： $X = -260000.000$ 、 $Y = -120000.000$ である。また本報告書では、大グリッドの表記を省略し、中小グリッドの数字のみ表記している。森の原遺跡に関しては小グリッドのみの表記となっている。

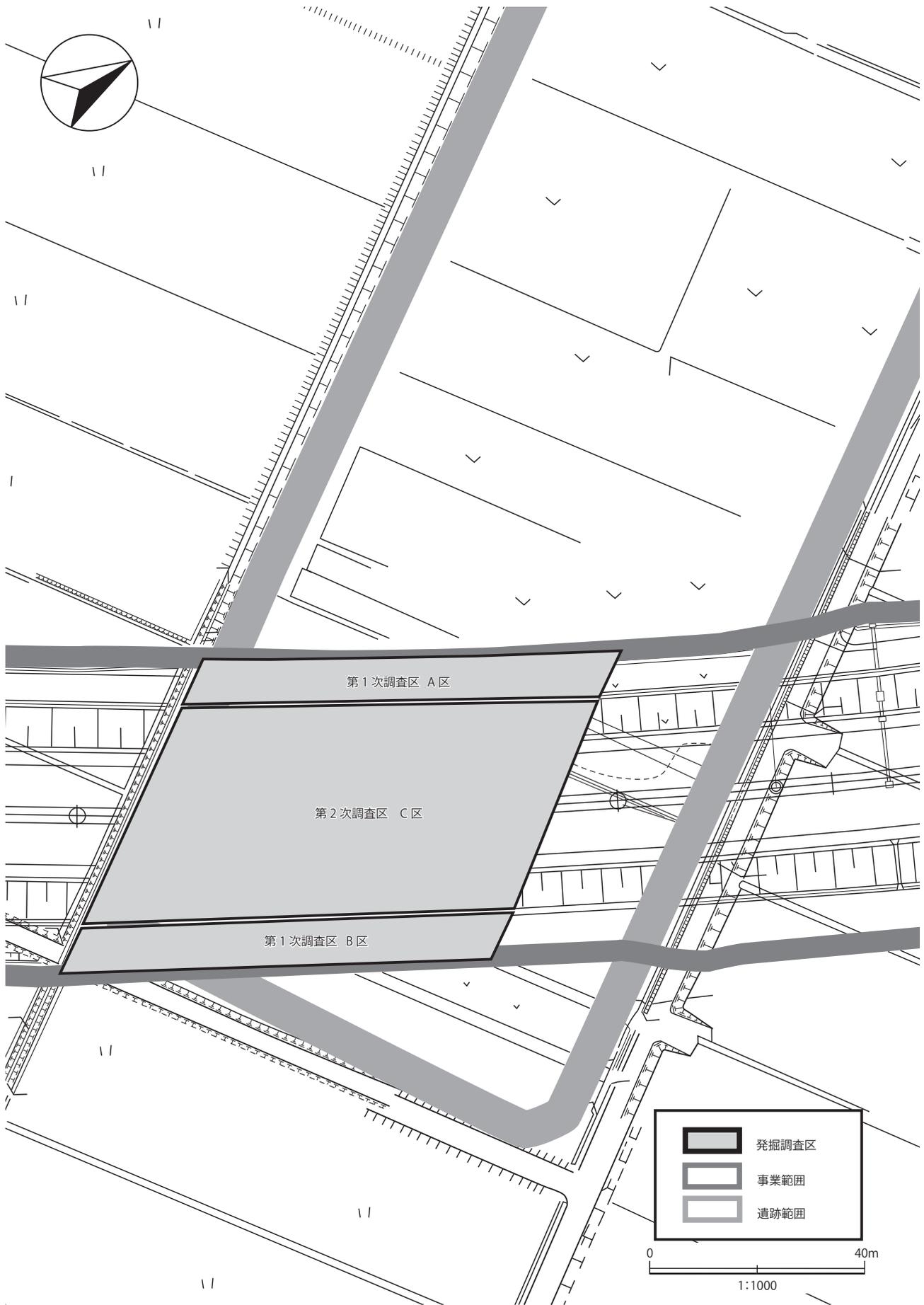
3 整理作業の経過

出土遺物は洗浄後、注記を行った。注記は遺跡名をそれぞれ「八合田」、「森の原1次」、「森の原2次」、「今宿大谷地」とし、出土遺構・層位・取得座標名の順に記載した。出土年月日は省略した。その後、接合、復元、抽出、実測、拓本、写真撮影を順に行いコンテナに収納した。遺物・遺構の図面共にデジタルトレースを行い修正や編集を行った上で写真と共に版組を行った。理化学分析として業務委託を行ったのは放射性炭素年代測定と火山灰分析で結果は第VI章に掲載した。

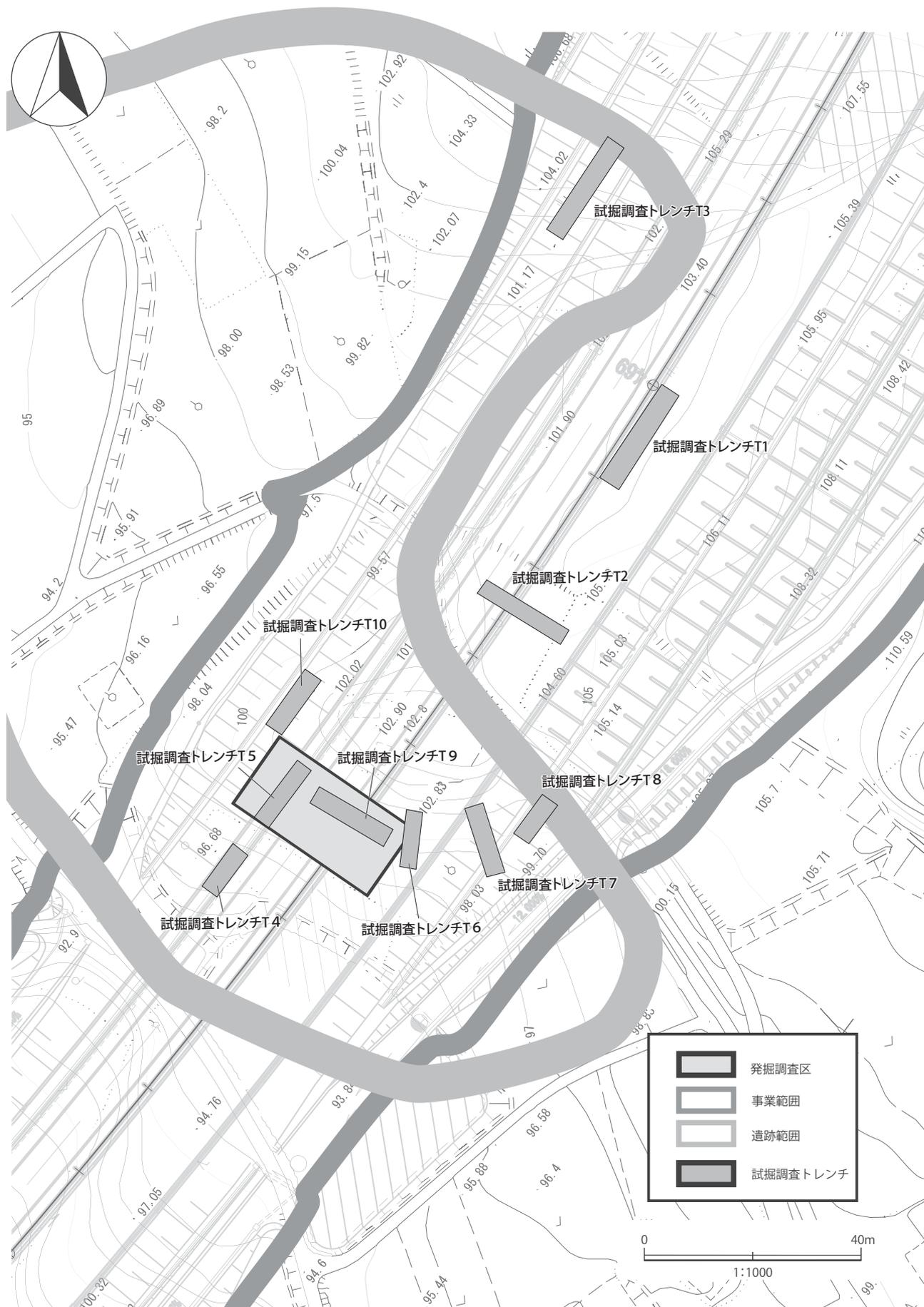
出土遺物は、報告書に掲載したものを別にして収納した。なお、報告書掲載遺物については図番号を注記に追加している。整理作業の期間は八合田遺跡が平成25年度、森の原遺跡第1・2次、今宿大谷地遺跡が平成24・25年度である。



第1図 八合田遺跡概要図



第2図 森の原遺跡第1・2次概要図



第3図 今宿大谷地遺跡概要図

II 遺跡の位置と環境

1 地理的環境

八合田遺跡・森の原遺跡

山形盆地は、山形県内陸部のほぼ中央に位置し、東側を奥羽山脈、西側を出羽山地に挟まれた南北約 40 km、東西約 20 km の船底形を呈する盆地である。県南部の吾妻山系に端を発して県内を貫流し、日本海に注ぐ最上川が盆地中央を北流しており、東西両側の山系から流れてくる中小の河川がこれに合流する。最上川の流域には旧河床が隆起して台地となった数段の河岸段丘が各所に形成されており、これら段丘の大半は更新世に形成されて完新世には殆ど安定した地形となっている。気候は内陸性の特徴を示しており、気温の日較差が大きく夏季の気温が高い。降水量・降雪量は、盆地中部から南部にかけては年を通して比較的少ないが、北部では例外的に冬季の降雪量が多くなっている。

八合田遺跡・森の原遺跡の所在する村山市は、出羽山地の葉山山系東側及び山形盆地の北部を占める。市街地を東西に二分する最上川は、盆地西縁部で葉山東方の丘陵を蛇行して切り込み、その東側には奥羽山脈を源流とする大沢川・大旦川より形成された楯岡扇状地・櫛山扇状地の 2 つの扇状地がみられる。

八合田遺跡・森の原遺跡は村山市北東部、山形盆地と尾花沢盆地との境界部に位置する村山市土生田地区に所在する。当該地は、最上川三難所として知られる碁点・三ヶ瀬・隼より約 4 km 下流の右岸に位置しており、河岸段丘及び氾濫原からなる袖崎低地上の立地となっている。八合田遺跡は JR 袖崎駅北西の低位段丘上に所在する。市内本飯田地区東方の山地から流れてくる沢の目川が遺跡のすぐ西側を北流し、北西約 1 km で最上川に合流する。森の原遺跡は八合田遺跡より約 1.3 km 北東の袖崎低地北部にあり、最上川右岸の後背湿地上に立地している。すぐ北には尾花沢段丘が位置し、東は甕岳山地が占める。

今宿大谷地遺跡

尾花沢盆地は東を奥羽山脈、西を出羽山地に挟まれ、

北は奥羽山脈からゆるやかに張り出した猿羽根山丘陵に占められている。南で山形盆地と隣接しており、その境界は明瞭ではないが、河島山丘陵・富並段丘・袖崎低地付近と考えられる。奥羽山脈に連なる御所山から流れてくる丹生川が、赤井川・牛房野川等を合わせながら盆地のほぼ中央を横切るように西流し、西部を北流する最上川に合流する。域内の地形的特徴は河岸段丘がよく発達していることであり、盆地の東部は丹生川に沿う段丘・低地からなり、西部は最上川に沿う段丘・低地によって占められている。前者の代表が玉野原段丘で後者の代表が尾花沢段丘である。気候の特徴は気温の日較差が大きいこと、冬季の降雪量が極めて多いことである。

今宿大谷地遺跡が所在する大石田町は、町域の東部を尾花沢盆地及び尾花沢段丘が占め、中部から西部を出羽山地に連なる大高根山等の山地で占められている。南側では大高根山を挟んで村山市と隣接している。最上川が町域南東部から北部中央付近にかけて蛇行しつつ北進しており、その兩岸に河岸段丘が形成されている。

今宿大谷地遺跡は大石田町今宿地区に所在しており、当該地は大石田町南東部を占める尾花沢段丘の南東端にある。村山市・尾花沢市との境界にごく近く、上記村山市の森の原遺跡から約 1.3 km 北東に位置しており、西を尾花沢段丘及び最上川、東を甕岳山地が占めている。

2 歴史的環境

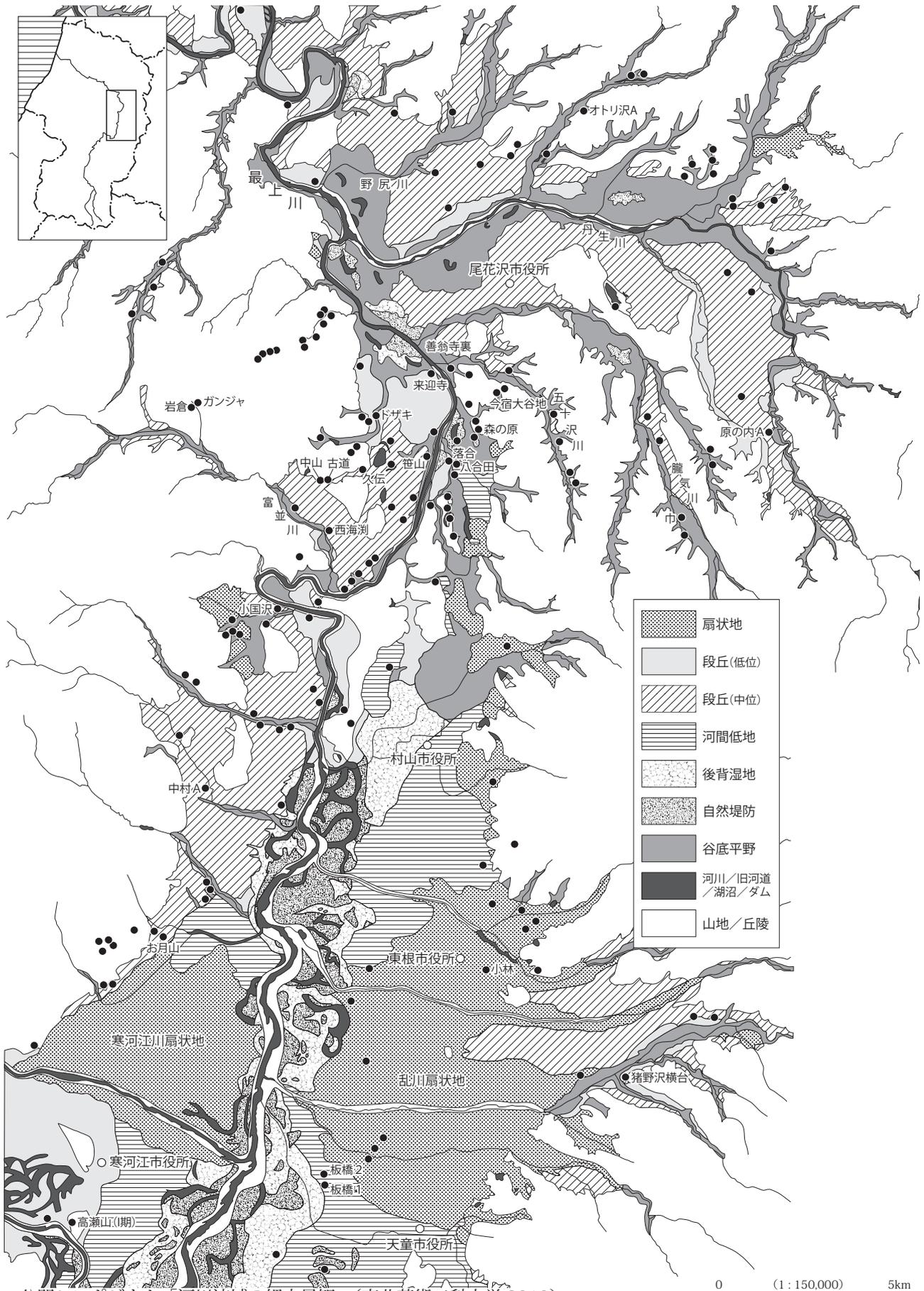
村山市・大石田町が立地する山形盆地北部から尾花沢盆地にかけての地域は、縄文時代の遺跡が多く確認されていることで知られている。村山市に所在する縄文時代の遺跡の多くは、最上川左岸の段丘・富並川左岸の段丘・大高根山南麓の山裾部に所在するもので、最上川に沿って集落跡が点々と分布する特徴的なあり方や、富並川をよりどころとして、規模の大きな拠点集落が地点を遷しながら連綿と形成されてきた様子などが注目される。また、大石田町に所在する縄文時代の遺跡は、最上川両岸の河岸段丘上及び最上川に注ぐ町域中部の黒滝沢川・北部の次年子川沿いに多く確認されている。

最上川からほど近い八合田遺跡・森の原遺跡・今宿大谷地遺跡の周辺においても、縄文時代の遺跡が数多く確認されており、特に最上川の河岸段丘面上での立地が顕著にみられる。早期・前期の遺跡としては、八合田遺跡の南西約 500 m、村山市赤石地区の最上川右岸段丘上に、尖底の深鉢形土器や貝殻腹縁^{ふくえん}圧痕文の土器群が出土した赤石遺跡が所在する。中期の遺跡では、八合田遺跡のすぐ西側に位置する村山市落合地区の沢の目川左岸、最上川右岸段丘上に 6 棟の竪穴住居跡や大型の貯蔵穴と考えられる土坑、また大木 7 b 式を主とした大量の土器群が見つかった落合遺跡がある。同じく中期の遺跡として今宿大谷地遺跡から約 2 km 北西、大石田町横山地区の最上川左岸段丘上に、住居跡 1 棟や大木 7 式期の土器が検出された来迎寺^{らいごうじ}遺跡が所在する。後期・晩期の遺跡としては、八合田遺跡から南へ約 1.5 km の村山市北原地区、沢の目川右岸の丘陵上に北原 2 遺跡が所在しており、後期から晩期の土器が出土した。その南の北原 4 遺跡からは早期から晩期までと幅広い年代の土器が出土している。

旧石器時代及び弥生時代以降の遺跡は、縄文時代の遺跡と比較すると確認されている数は少ないが、当該地域の歴史を明らかにする手がかりとなる遺跡が所在している。

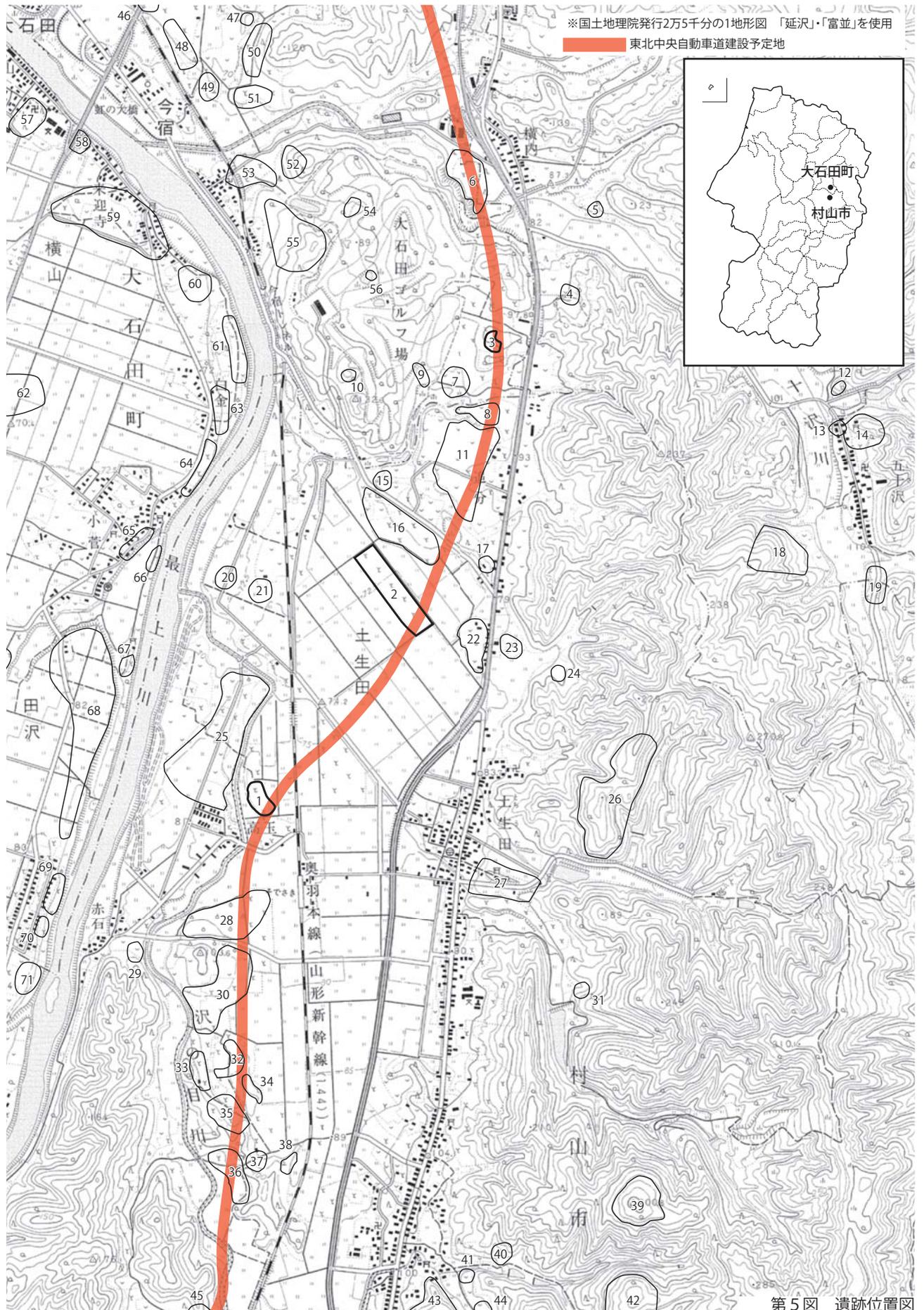
古代・中世の住居跡が検出された遺跡として、森の原遺跡の東側約 500m に北島遺跡がある。古代と中世の掘立柱建物跡がそれぞれ 2 棟ずつ検出されており、9 世紀代の須恵器・土師器、13 世紀代と推定される陶器が出土している。遺跡の立地が羽州街道に沿うことから、羽州街道及び周辺の社会環境成立過程を考察する手がかりとなる可能性がある。また今宿大谷地遺跡から北西約 8 km、最上川と野尻川の合流地点の河岸段丘上にある大石田町駒籠^{こまごめ}地区には『延喜式』^{えんぎしき}に記載されている古代の水駅「野後」^{すいえきのじり}駅の有力な推定地として、山形県教育委員会により調査が進められている駒籠橋跡がある。駒籠橋跡は中世の城館跡としても知られており、また、今宿大谷地遺跡から北西約 3 km に位置する最上川沿いの大石田市街地は、近世の最上川舟運において物資の中継地として栄えた河岸であったことから、当該地周辺が長期間にわたって交通の要衝として果たしてきた役割の大きさが伺える。

中世以降の館跡では、八合田遺跡から東南東に約 1 km の村山市内楯地区には、奥羽山脈から小さく張り出した舌状台地先端部の丘陵上に土生田楯遺跡が所在する。中世から近世初頭にかけて、当該地周辺は最上氏及びその一族によって領有されていたことは広く知られている。土生田楯については、築城年代は不明だが、最上義光家臣の安喰大和守光信^{あじきやまどのかみ}によって築かれ、居館としての機能を有していたが、元和 8 (1622) 年の最上氏改易によって廃城になったと伝えられる。村山市教育委員会によって昭和 63 (1988) 年に発掘調査が実施され、曲輪・虎口・土塁・堀跡等が確認され、16 世紀中ごろ以前のもと考えられる 9 点の板碑が出土した。なお、土生田楯遺跡から北東約 600 m の丘陵上にある土生田楯山遺跡が土生田楯領主の戦時用の山城、いわゆる「詰めの城」であったと伝わっており、今宿大谷地遺跡から北西に約 1 km の尾花沢段丘上にある小屋立^{こやたて}は、安喰大和守光信の晩年の隠居所として築かれたという伝承が残されている。



*公開シンポジウム「河川流域の縄文景観」(東北芸術工科大学 2010)
小林圭一氏論文中の図 15 に加筆・修正し掲載。

第4図 地形分類図



第5図 遺跡位置図

表1 遺跡地名表

番号	遺跡名	種別	時代	番号	遺跡名	種別	時代
1	八合田	散布地	縄文(中期)・弥生(後期)	37	壁山	集落	縄文
2	森の原	縄文集落	縄文	38	北原	生産	縄文・近世以前
3	今宿大谷地	集落	縄文	39	高館山	館	中世
4	古屋敷	集落	縄文	40	北沢	散布地	縄文
5	横内	集落	縄文	41	高来沢A	集落	縄文
6	家ノ廻り	集落	縄文	42	十字山	館	中世
7	今宿C	集落	弥生	43	飯田橋	館	中世
8	百枚2	散布地	縄文(後期)	44	高来沢B	集落	縄文
9	今宿B	散布地	縄文	45	大原口	集落	縄文
10	今宿A	散布地	縄文(中期)	46	鷺ノ原A	集落	縄文(前期)
11	百枚1	散布地	縄文(中期・後期・晩期)	47	鳥木沢	散布地	縄文
12	あし沢			48	鷺ノ原D	塚・板碑	中世
13	五十沢公園	集落	縄文	49	鷺ノ原B	集落	縄文
14	五十沢橋(稲葉山)館		中世	50	鷺ノ原E	集落	縄文
15	細田	集落	縄文	51	高山	散布地	縄文(前期)
16	道出	散布地	縄文(後期・晩期)	52	今宿羽黒山	信仰施設	中世
17	追分	集落	縄文	53	善翁寺裏	集落	縄文(中期)
18	金森橋	館	中世	54	今宿	集落	縄文(中期)
19	観音前	集落	縄文	55	小屋立	館・集落	中世
20	元木	集落	奈良・平安	56	今宿D	散布地	縄文
21	伴見	集落	縄文	57	横山小学校前	集落	平安
22	北島	集落	縄文・奈良・平安・中世	58	来迎寺館	館	中世
23	清水脇2	集落	縄文・平安	59	来迎寺	集落	縄文(中期・後期)・中世
24	清水脇	集落?	縄文	60	ヘグリA	集落	縄文
25	落合	集落	縄文(中期)・平安	61	ヘグリB	集落	縄文
26	土生田橋山	館	中世	62	沖	集落	縄文(前期)
27	土生田橋	館	中世	63	ヘグリ	集落	縄文・平安
28	沼田2	散布地	縄文(中期)・平安	64	白金	集落	縄文(早期・前期)・平安
29	赤石	集落	縄文(早期・前期・晩期)	65	小菅	集落	縄文
30	沼田	包蔵地	縄文(前期・中期・晩期)・平安	66	田前	集落	縄文(中期・晩期)
31	南沢	集落	縄文	67	馬坂	散布地	縄文(前期)
32	北原4	散布地	縄文(中期)・平安	68	小野原(笹山)	集落	旧石器・縄文(早期・前期・中期・晩期)・平安
33	壁山2	散布地	縄文(時期不明)	69	新山寺A	集落	縄文(前期)
34	北原3	散布地	縄文(時期不明)	70	新山寺B	集落	縄文(中期)
35	北原2	散布地	縄文(時期不明)・平安	71	新山寺C	散布地	不詳
36	沢田	散布地	縄文(時期不明)・平安				

Ⅲ 八合田遺跡

1 遺跡の概要

A 概要

遺跡は JR 袖崎駅の北西に位置し、西に沢の目川が流れる低位段丘上にある。周辺には水田やスイカ畑などが広がっている。当遺跡も調査前は畑地として利用されていた。標高は 76 m を測る。

遺物の年代から縄文時代早期および中期が主となる遺跡である。但し、出土した土器は水の浸食で磨滅しており、文様を明確に読み取れるものは少ない。

遺構検出面はその水の影響と思われるグライ化が見られた。

表土を掘削したところ調査区東側から西側にかけて遺構検出面及び地山が傾斜していることを確認出来た。標高差は遺構検出面を基準とし、東西で 1 m 20 cm ほどである。なお、調査区東側については表土下 30 cm で地山が検出された。表土から地山の間には漸移層^{ぜんい}などがなく攪乱層を挟んですぐに地山を検出したことから土地造成により掘削されている可能性が指摘出来る。また西側は地表面から 65 cm ほどで遺構検出面が確認されている。その検出面の標高は排水溝を挟んで西側に隣接する水田と同じ高さである。恐らく畑地として利用する過程で盛り土がなされ、調査前の状態となったことが考えられる。

今回、検出された遺構は検出面から遺構の底面までの深さが 30 cm に満たないものばかりであった。

B 基本層序

基本層序（第 11 図）は、大きくⅢ層に分けることが出来る。

I 層：現表土も含んだ、耕作土などの層（1～10 層）。

II 層：黒ボク層（11～16 層）。

III 層：漸移層や一部地山も含める遺構検出面とした層（17～21 層）。

である。I 層は畑地として利用するために盛り土がなされた層といえる。堆積土の中からは畑で使用されるビニー

ルの断片が出土した。また、植物の根による攪乱も見られた。この層自体が畑として利用されていたことが判断できる。

II 層は黒ボク層で I 層が形成される前まではこの層上面が地表面であった。III 層直上にあたる 16 層から遺物が出土している。

III 層は遺構検出面及び地山層にあたる。グライ化が見られ、粘性の高い層が形成されていた。21 層に関しては堆積土中に炭化物を含んでおり、地山に対する二次堆積の可能性が挙げられる。

2 遺構

全部で 99 基程あり、ピットや土坑、溝跡、さらに性格不明遺構などが検出された。全体的に掘り込みが浅く 30 cm に満たないものばかりである。以下に分層された遺構について記していく。なお、遺構覆土は黒ボク層由来の土を主として地山及び検出面の土を含む場合が多い。

ピット及び柱穴（第 12～13 図）

図示した遺構は 11 基である。いずれも 2 層以上に分かれるものである。その中で柱穴と考えられるものとピットと呼ばれる小穴に分類することが出来る。後者は柱穴であった可能性があるが、柱痕などの明確な痕跡を確認することが出来なかったためピットとしている。いずれも平面形は円形か楕円形で直径が約 20 cm～40 cm の範囲で収まっている。

なお、柱穴だと確認されたものとして SP 9、SP39、SP47、SP71、SP84、SP106 が挙げられ、そのうち SP9 と SP39 には柱抜取痕がみられた。しかし、これらで建物を組むには至らなかった。

土坑（第 13 図）

SK17、SK32、SK85 の 3 基を図示した。いずれも平面形は円形か楕円形である。SK85 は遺構上面に礫を伴っており、土のしまりは弱かった。個別図として図示はしていないが SK21 も同様に礫が検出されており、土質も似通っていた。両遺構の関連性が考えられる。

溝 跡 (第 14 図)

SD72 は調査区西側で検出された遺構で調査区内で完結している。長軸は 9 m 20 cm ほどで幅は広い場所で 2 m 40 cm を測る。床面からは第 15 図 6・7、第 16 図 8 が出土している。年代は縄文時代中期、大木 8 式期のものといえる。

遺構の帰属年代も同時期と考えられる。遺構の性格として形状から溝跡または溝状の窪地であったと考えられる。覆土は粘質土や粘土であり、水の影響が少なからずあったといえる。

性格不明遺構 (第 14 図)

図示したものは SX66 で、検出当初は竪穴建物を考慮し、調査を行った。長軸 3 m 70 cm、短軸 3 m 40 cm 程の長方形に近い不定形の遺構である。サブトレンチを入れ断面を観察したところ貼り床などの建物跡である痕跡は見られず、平面観察においても焼土や煙道などの痕跡を確認することは出来なかった。地形として調査区内の傾斜変換点に位置することから窪地が形成され、そこに土が堆積したのと考えられる。遺構覆土は SK85 に近い。

検出当初、竪穴建物と考えられた遺構がもう 1 基存在する。SX103 である。長軸約 5 m 90 cm、短軸約 4 m 30 cm の楕円形である。平面形から住居の可能性が高いと考え調査を開始したが検出面から 3 cm 下げた段階で床面に達し竪穴建物である根拠は得られなかった。なお、前後関係を判断できないが同遺構内から多くのピットが検出されている。遺物は第 16 図 17 が出土している。

遺物出土遺構

以下に個別には図示していない、遺物が出土した遺構について記述する。なお、SX103 については上述した通りである。

SP23 はグリッド 4803 - 3022 内に位置する。長軸 30 cm、短軸 20 cm を測る楕円形の遺構で検出面からの深さは約 10 cm を測る。

SP30 はグリッド 4803-3022 内に位置する。直径約 24 cm を測る円形の遺構で深さは 7 cm を計り、SK29 に切られる。

SK43 はグリッド 4803-3223 内に位置する。長軸約 65 cm、短軸約 50 cm を測る不定形の土坑である。深さは約 4 cm を測る。

SX54 は長軸約 2 m、短軸約 1 m を測る不定形の遺構で深さは約 13 cm を測る。落ち込みと考えられる。

また、遺構出土ではないがグリッド 4803 - 2721 において土器がまとまって出土している。第 15 図 2・3、第 16 図 11 もそのまとまりの周辺で出土した。周辺で土色の変化は認められず、遺構の存在は確認出来なかった。

出土した場所に隣接した西側には排水用のコンクリート製の枠を埋めるために掘削された現代の攪乱部分があり、遺物はその中にも含まれていた。但し、それら遺物は攪乱を受けて埋戻しを行った段階で混入したとも考えられる。もしくは沢の目川の氾濫の影響で流れ込んで来たとも考えられるが、いずれにせよこれら遺物がまとまって出土した理由を判別するには至らなかった。

なお、遺物の出土地点を遺構図中に掲載している。遺構図中に掲載している番号と遺物実測図に掲載している番号とはリンクしていない。遺物実測図に掲載したもので出土地点の座標を取得してあるものは遺物の観察表の遺構(出土地点)の項目に記載している。

3 遺 物

調査では縄文時代早期・前期・中期・晩期の土器が出土した。すべて縄文土器の小破片であり、復元して器形や文様の全体を把握できるものはなかった。また水の影響と考えられる磨滅が多くみられ、明確に年代を判断しうるものは少なかった。土器以外には近世以降の陶器と石鏃などの石器がそれぞれ少量出土した。

A 遺構出土の遺物

遺構から出土した遺物は、縄文土器 5 点・石器 3 点である。

SP 23 (第 16 図)

15 は石器製作の過程で剥片を加工する際に生じた破片と考えられる。頁岩製である。

SP 30 (第 16 図)

16 は 15 と同様、頁岩を加工した際の破片である。

SK 43 (第 15 図)

1 は深鉢体部の破片と考えられる。2 条の沈線が確認でき、その 2 条の沈線間の凸部が土器表面より一段低くなっている。胎土中に繊維の混入がみられる点と胎土の

質及び焼成の具合により、早期末から前期初頭のものとして推測される。

S X 54 (第 16 図)

9は深鉢の口縁部の可能性がある。薄手で、表面・裏面ともに磨滅しており、文様を正確に把握することはできないが、器厚と磨滅の具合から晩期の土器と推測した。

S D 72 (第 15・16 図)

6・7・8の3点の縄文土器が出土した。6は深鉢と推測した。体部から一部底部にかかる部位と考えられる。文様の全体像をとらえることはできないが、縄文は縦位に施文され、3条の並行沈線が縦方向及び斜めに施されている。中期後半の大木8式期に比定することができる。7と8は胎土・施文から同一の個体と考えられる。どちらも全面が磨滅しているが、一部縄文と沈線を観察することができ、特徴が6と同様であることから大木8式期と推測した。なお7は底部の破片であり、縦位の縄文及び縦方向の並行沈線が、表面下部まで施されている。

S X 103 (第 16 図)

17は15・16と同様の頁岩製の破片である。

B 遺構外出土の遺物

表土あるいは遺構検出中に出土した遺物は、縄文土器6点・近世以降の陶器2点・石器1点である。

縄文土器 (第 15・16 図)

縄文土器は、年代を推測できるものとしては早期・前期・晩期のものが出土した。縄文時代早期の土器は2・3の2点である。2は深鉢口縁部の破片の可能性がある。櫛状の工具による沈線文様が斜めに施されている。焼成が良く、内面に丁寧なミガキ調整がなされている。表面・破断面の観察からは胎土中への繊維の混入は確認できない。入っていたとしてもごく少量と考えられる。これらを考慮すれば、早期前葉の田戸下層式並行期の編年的位地が推測される。3は内外面ともに若干磨滅しているが、焼成の具合や内面のミガキ調整など、2と特徴を同じくするため同様の型式と考えられる。

前期の土器は4・5の2点である。4は半截竹管を用いた並行沈線とヘラ状刻みが施されている。5は半截竹管による縦方向への沈線の施文ののち、横や斜めの区画線が引かれている。この2点は半截竹管による並行沈線の施し方が共通しており、同一個体の可能性がある。い

ずれも深鉢の口縁部付近の破片と考えられ、薄手の作りである。前期末の大木6式期のものとして推測される。晩期の土器は10の1点である。S X 54出土の9と同様、器厚が薄手であること、また磨滅の具合から晩期と推測した。そのほか詳細不明の土器として11が出土した。11は今回の調査で出土した土器片を接合できたものの中では比較的大きく、部位は口縁部から体部にかけてと考えられる。しかし内外面ともに磨滅が著しく、文様等を確認することはできなかった。

近世以降の陶器 (第 16 図)

陶器は2点出土した。12は近世の肥前陶器である。器種は皿で見込み部分の破片である。13は瓦質土器である。器種の特定は難しいが鉢型となる器の体部と考えられる。近世から近代にかけてのものとして推測した。

石器 (第 16 図)

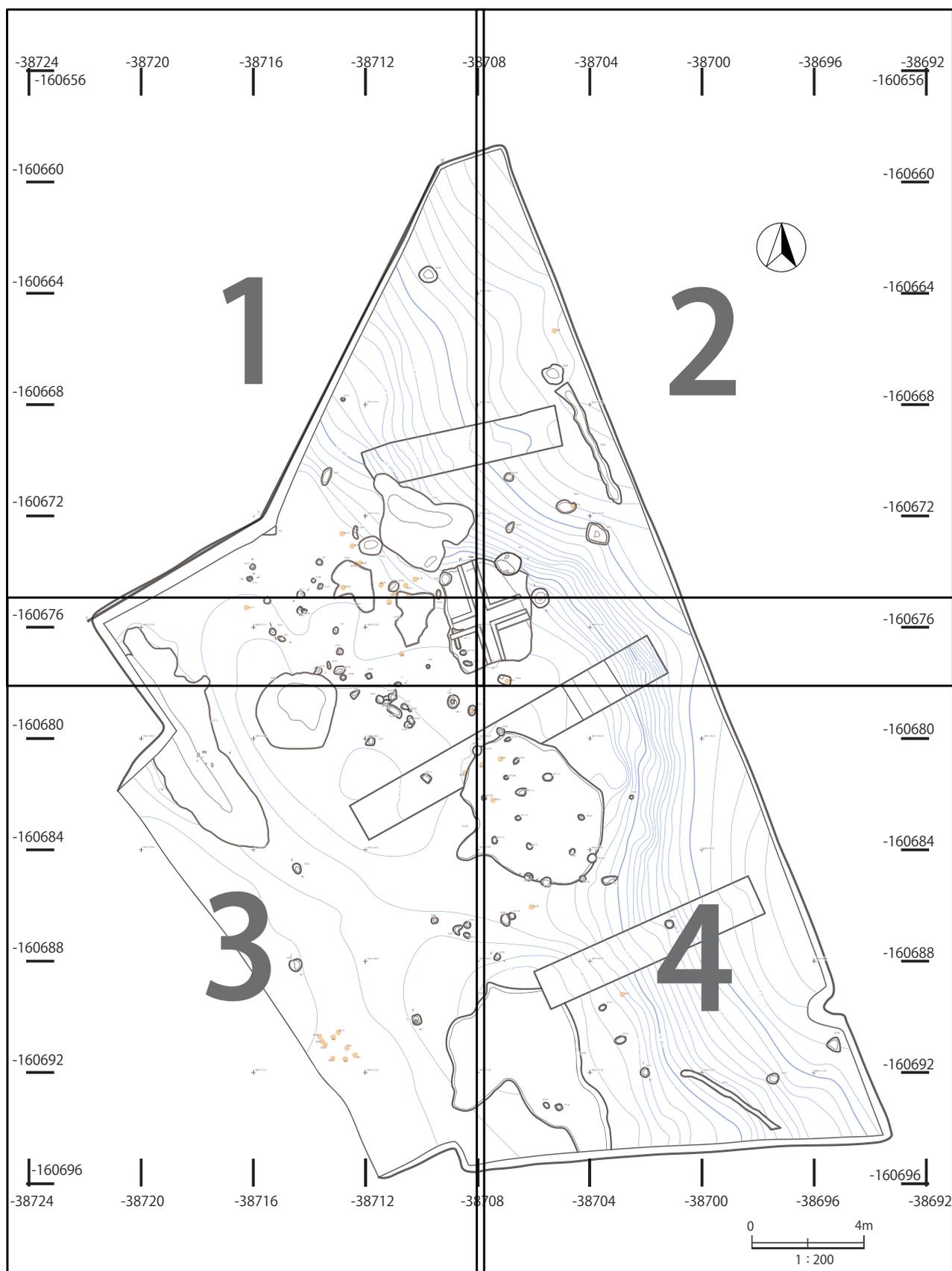
打製の定形石器が1点出土した。14は凹基無茎の石鏃である。頁岩製であり全面に調整加工が施されている。基部と比べて刃部が段差状にやや細くなっており、刃部を再生加工した可能性がある。

表2 八合田遺跡 縄文土器・陶器・瓦質土器観察表

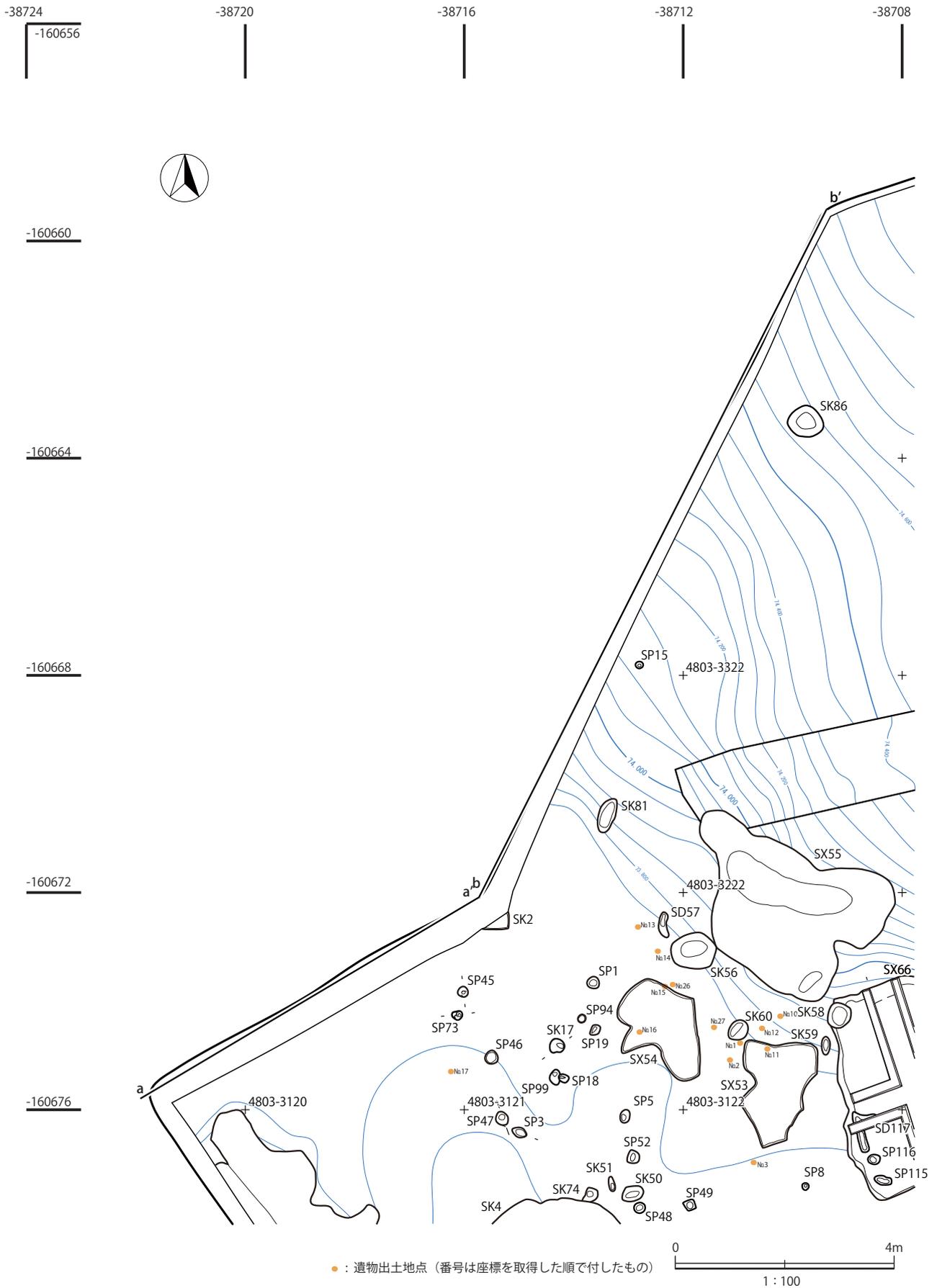
図版 番号	遺物 番号	遺構 (出土地点)	器種	計測値 (mm)					施文	地文	備考
				口径	最大径	底径	器高	器厚			
	1	SK43 (No. 34)	深鉢	—	—	—	(27.0)	9.5	沈線文		
	2	4803-2721	深鉢	—	—	—	(32.5)	9.0	沈線文		
	3	4803-2721 (No. 5)	深鉢	—	—	—	(49.5)	9.5			
15	4	(No. 11)	深鉢	—	—	—	(21.5)	7.0	沈線文		
	5	(No. 15)	深鉢	—	—	—	(18.5)	7.0	沈線文		
	6	SD72 底面	深鉢	—	—	—	(60.0)	8.5	沈線文		
	7	SD72 底面	深鉢	—	—	(116)	(30.5)	11.5	沈線文	縄文	縄文と櫛描の沈線
	8	SD72 底面	深鉢	—	—	(94)	(17.5)	10.0	沈線文	縄文	櫛描の沈線、7と同一個体
	9	SX54	深鉢?	—	—	—	—	—		縄文	
	10	(No. 2)	深鉢?	—	—	—	(29.5)	7.5		縄文	
16	11	4803-2721	深鉢?	(120)	—	—	(82.4)	10.0			内外面磨滅著しい
	12	北壁	陶器 皿	—	—	—	(15.0)	9.5			こげ底、肥前陶器
	13	表土 (壺堀り南東)	陶器 鉢?	—	—	—	(42.0)	11.5			瓦質土器

表3 八合田遺跡 石器観察表

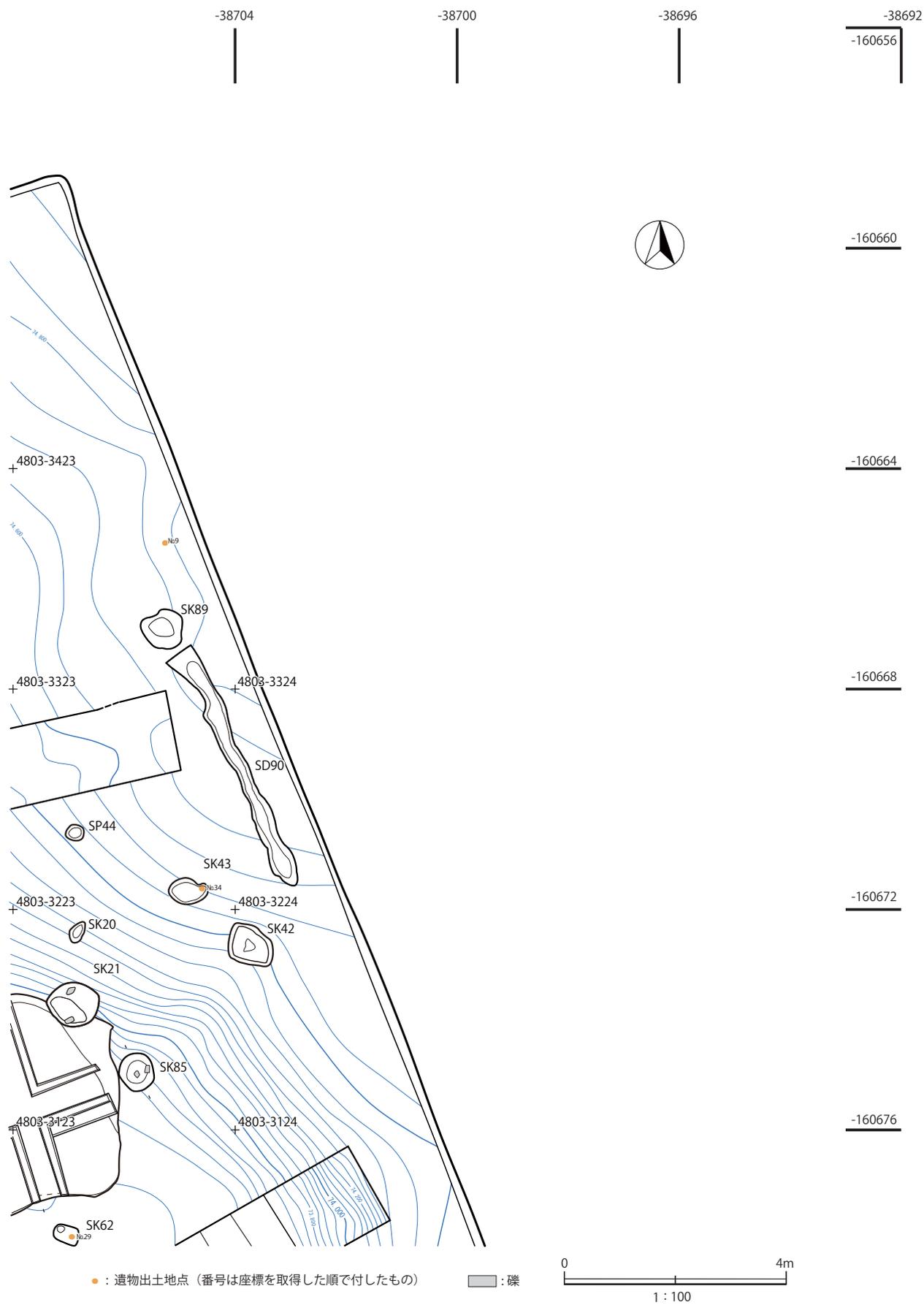
図版 番号	遺物 番号	遺構 (出土地点)	種別	材質	計測値 (mm)			重量 (g)	備考
					長	幅	厚		
	14	(No. 1)	石鏃	頁岩	30.5	18.0	6.5	1.9	
16	15	SP23 (No. 30)	剥片	頁岩	40.8	33.8	5.5	6.3	
	16	SP30	剥片	頁岩	31.5	17.0	6.5	2.3	
	17	SX103 (No. 32)	剥片	頁岩	20.5	20.5	5.0	1.4	



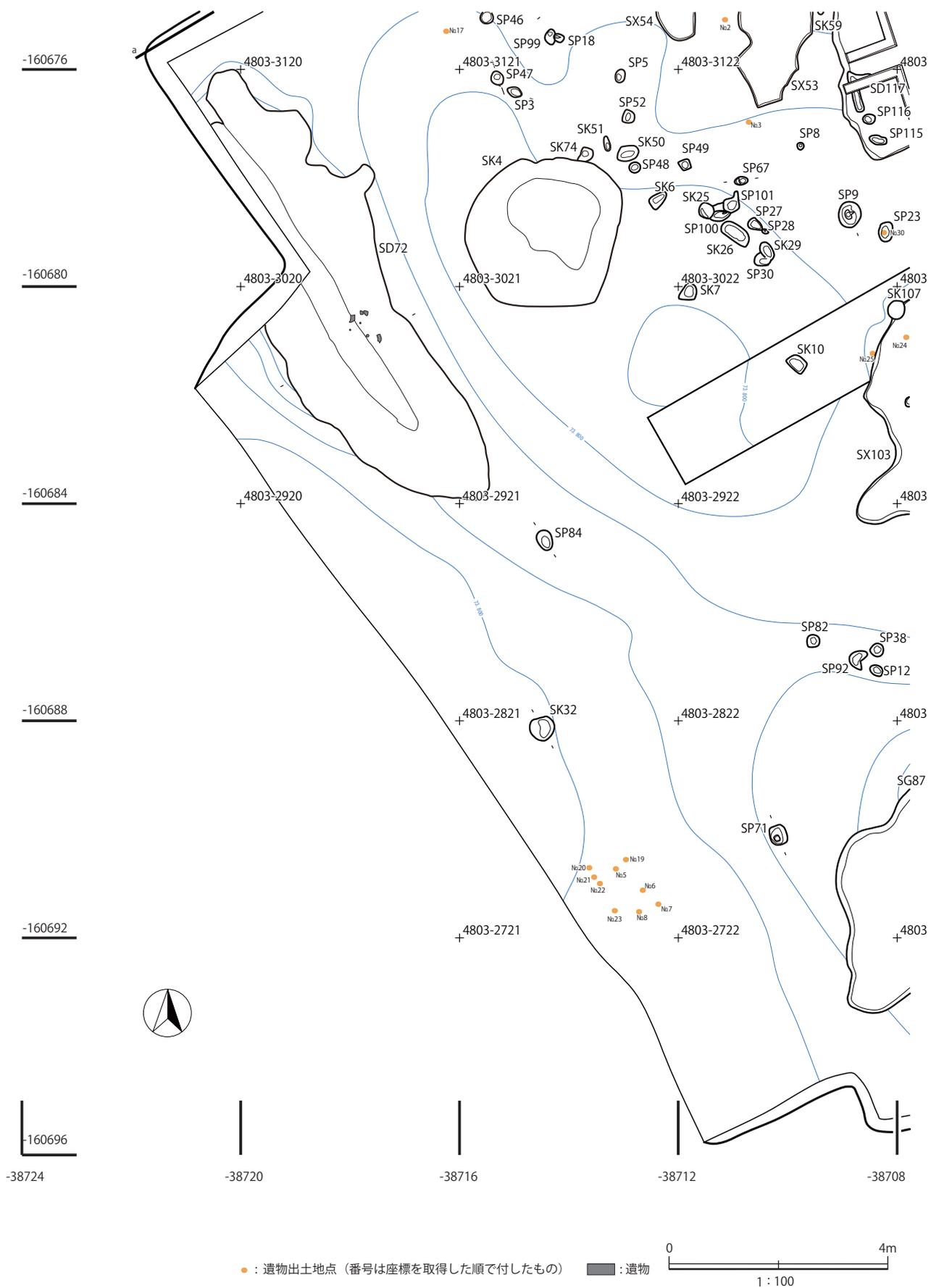
第6図 遺構配置図の割付



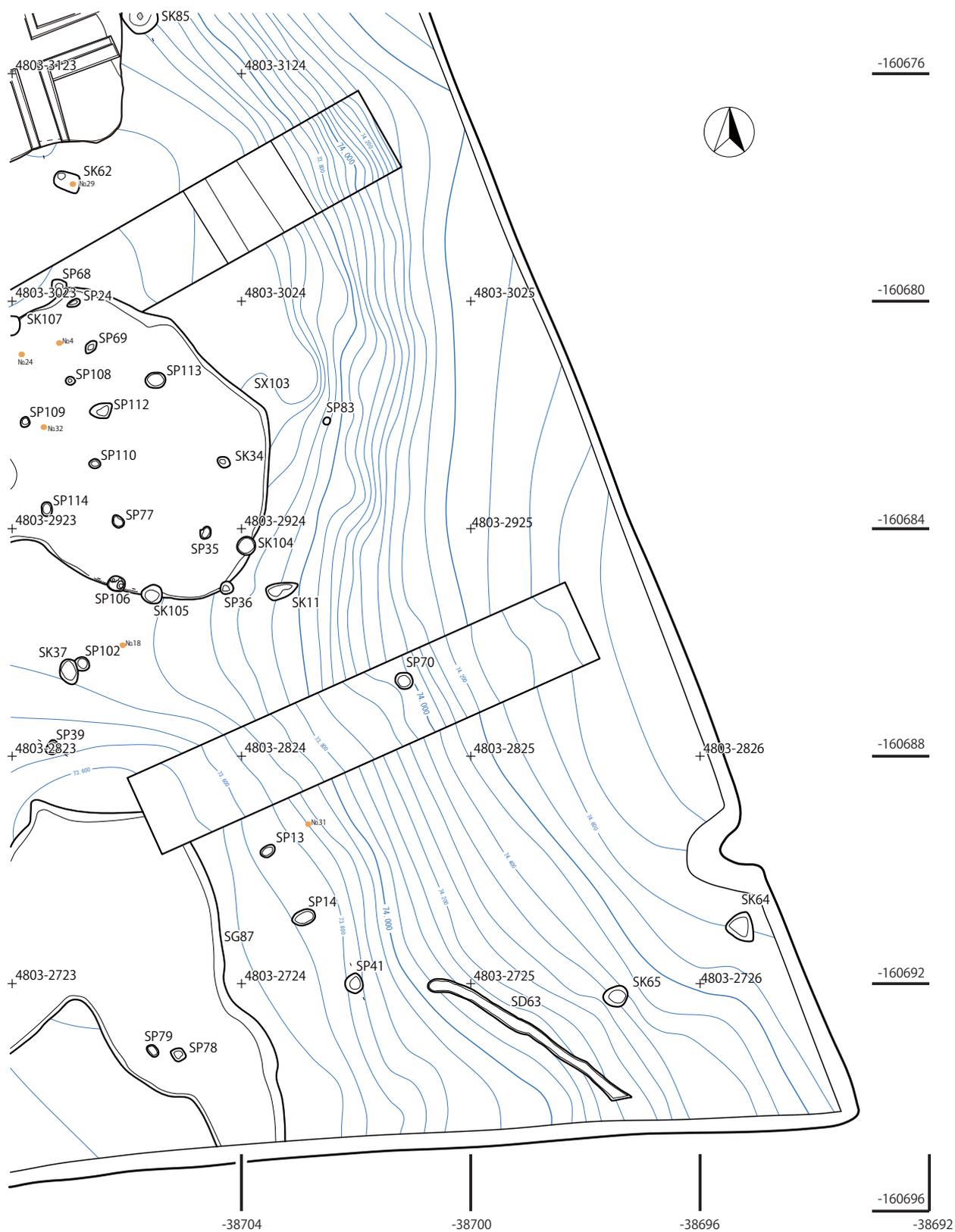
第7図 遺構配置図(1)



第8図 遺構配置図(2)



第9図 遺構配置図(3)



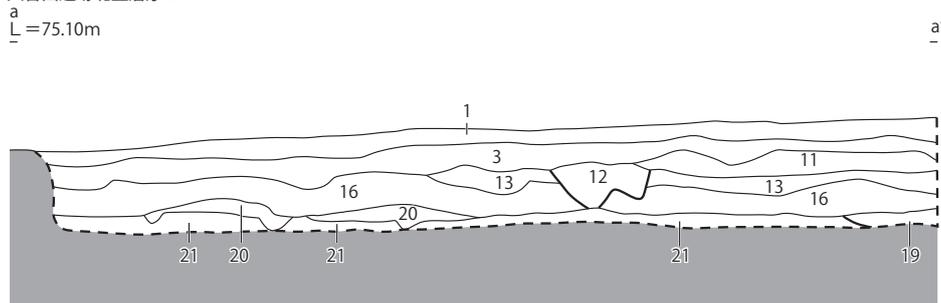
● : 遺物出土地点 (番号は座標を取得した順で付したものの)

■ : 礎

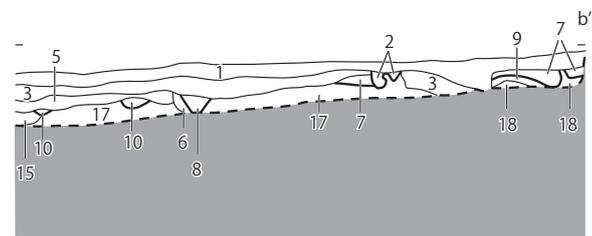
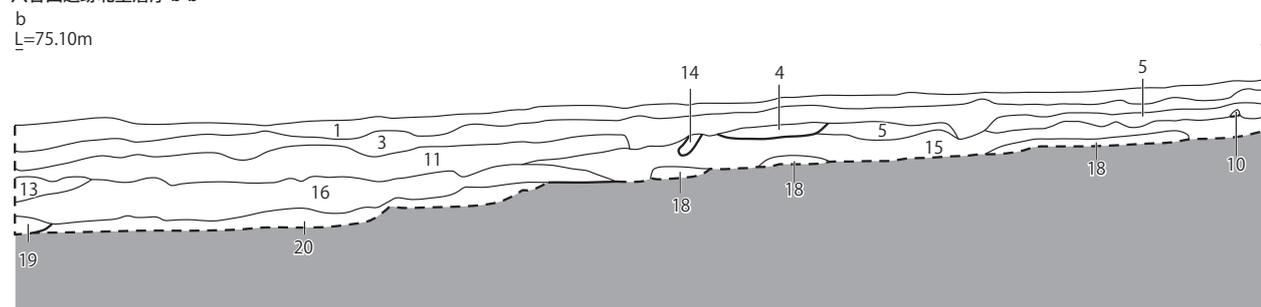
0 4m
1 : 100

第10図 遺構配置図(4)

八合田遺跡北壁層序 a-a'



八合田遺跡北壁層序 b-b'



八合田遺跡北壁層序 a-a',b-b'

- 1:10YR3/2黒褐色シルト
- 2:10YR3/2黒褐色シルト
- 3:10YR3/2黒褐色シルト
- 4:10YR2/2黒褐色シルト
- 5:10YR2/2黒褐色シルト
- 6:10YR3/2黒褐色シルト
- 7:10YR2/2黒褐色シルト
- 8:10YR3/2黒褐色シルト
- 9:7.5YR1.7/1黒色シルト
- 10:10YR2/2黒褐色シルト
- 11:10YR2/1黒褐色シルト
- 12:10YR2/2黒褐色シルト
- 13:10YR1.7/1黒色シルト
- 14:7.5YR1.7/1黒色シルト
- 15:7.5YR2/1黒色シルト
- 16:10YR1.7/1黒色粘質土
- 17:10YR2/1黒色シルト
- 18:10YR3/3暗褐色砂(地山)

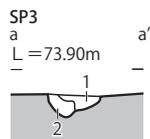
- 10YR5/6黄褐色細砂をわずかに含む。植物根と小礫を含む(現表土)。
- 10YR6/6明黄褐色砂をブロック状に含む(攪乱)。
- 10YR6/6明黄褐色砂をブロック状に含む。小礫を含む(現耕作土)。
- 10YR3/2黒褐色シルトを含み、小礫を含む(木の根の攪乱)。
- 小礫と炭化物をわずかに含む。
- 10YR5/6黄褐色シルトをブロック状に含む。
- 小礫とビニールを含む(攪乱)。
- 10YR2/2黒褐色シルトを含み、10YR5/6黄褐色シルトをわずかに含む(攪乱)。

- 10YR3/2黒褐色シルトを含む(木の根の攪乱)。
- 植物根を含む(黒ボク層)。
- 10YR3/2黒褐色シルトを含む。植物根を含む(木の根の攪乱)。
- 植物根を少量含む(黒ボク層)。
- 10YR3/2黒褐色シルトを含む(木の根の攪乱)。
- 小礫を含む(黒ボク層)。
- 植物根を含み、小礫を含む(遺物包含層:黒ボク層)。
- 10YR5/6黄褐色砂を少量含む(漸移層)。

第 11 図 調査区北壁土層断面



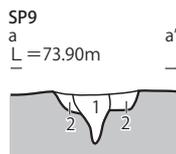
SP3



SP3

1:10YR2/1黒色シルト 地山粒わずかに含む。
2:10YR2/1黒色シルト 地山ブロック多く含む。

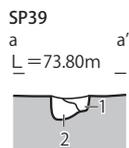
SP9



SP9

1:10YR2/1黒色シルト 地山ブロックやや多く含む。灰白色粘土塊がわずかに混入する（柱抜取痕）。
2:10YR3/1黒褐色シルト しまり弱い、地山ブロック多く含む（柱掘方）。

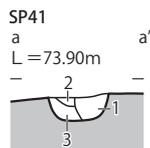
SP39



SP39

1:10YR2/1黒色粘土質シルト 地山小ブロックやや多く含む（柱抜取痕）。
2:10YR3/3暗褐色粘土質シルト 地山ブロック多く含む（柱掘方）。

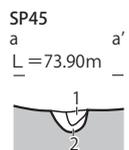
SP41



SP41

1:10YR2/2黒褐色シルト 地山小ブロック含む。
2:10YR4/2灰黄褐色シルト 地山小ブロック含む。

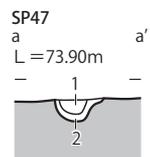
SP45



SP45

1:10YR2/1黒色シルト 地山粒わずかに含む。
2:10YR2/3黒褐色シルト 地山ブロックやや多く含む。

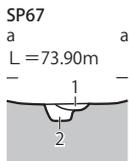
SP47



SP47

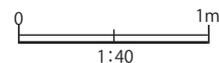
1:10YR2/1黒色シルト 地山小ブロックわずかに含む（柱痕）。
2:10YR2/3黒褐色シルト 10YR2/1黒色土がブロック状に少量混入する（柱掘方）。

SP67

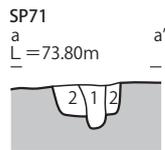


SP67

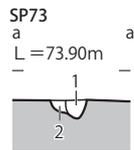
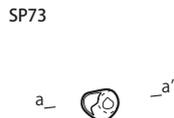
1:10YR4/2灰黄褐色粘土質シルト 地山粒わずかに含む。
2:10YR2/2黒褐色シルト



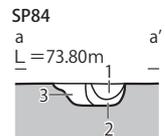
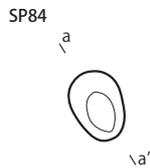
第 12 図 ピット・柱穴 SP 3・9・39・41・45・47・67



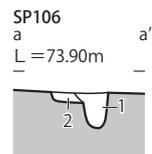
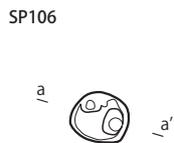
SP71
 1:10YR2/2黒褐色シルト 粘性強い、地山小ブロック少量含む(柱痕)。
 2:10YR3/2暗褐色粘土質シルト 地山ブロック多く含む(柱掘方)。



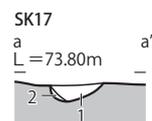
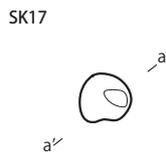
SP73
 1:10YR2/1黒色シルト 地山粒わずかに含む。
 2:10YR2/3黒褐色シルト 地山小ブロック多く含む。



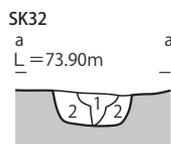
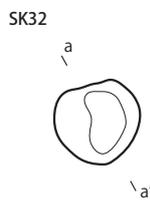
SP84
 1:10YR2/1黒色シルト 地山小ブロックわずかに含む(柱痕)。
 2:10YR4/3にぶい黄褐色シルト 粘性・しまり共に弱い地山質土(柱掘方)。
 3:10YR3/1黒褐色シルト 地山粒少量含む(柱掘方)。



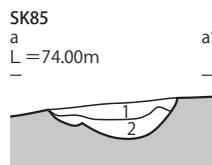
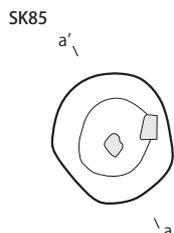
SP106
 1:10YR2/3黒褐色粘土質シルト しまり強い、地山粒わずかに含む(柱痕)。
 2:10YR4/2灰黄褐色粘土質シルト 10YR2/1黒色土がブロック状に混入、
 地山小ブロック多く含む(柱掘方)。



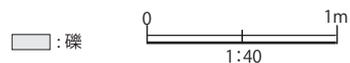
SK17
 1:10YR2/1黒色シルト 地山小ブロック多く含む。
 2:地山崩落土



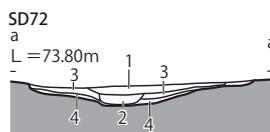
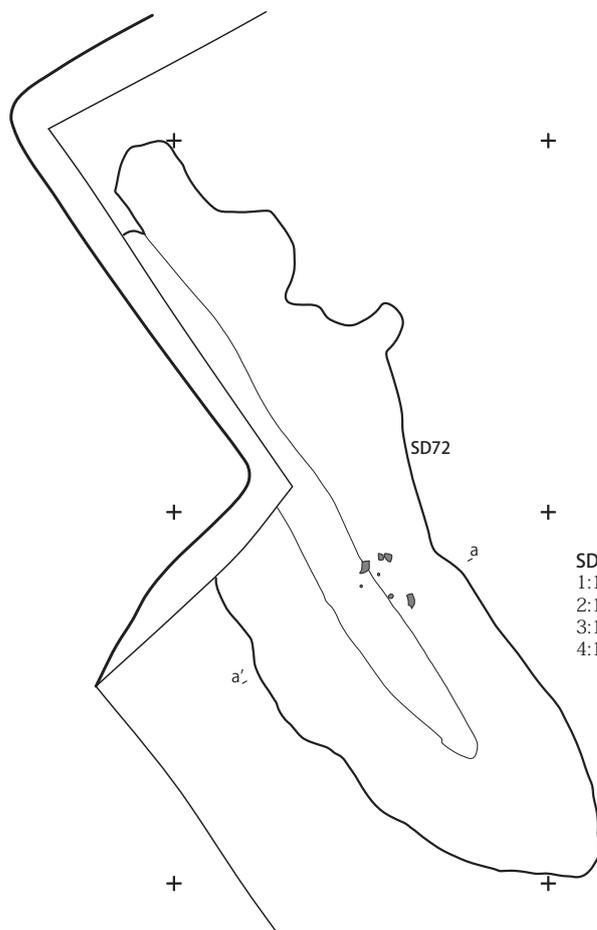
SK32
 1:10YR3/1黒褐色シルト 地山ブロック多く含む。
 2:10YR3/1黒褐色シルト 地山小ブロック、地山粒少量含む。



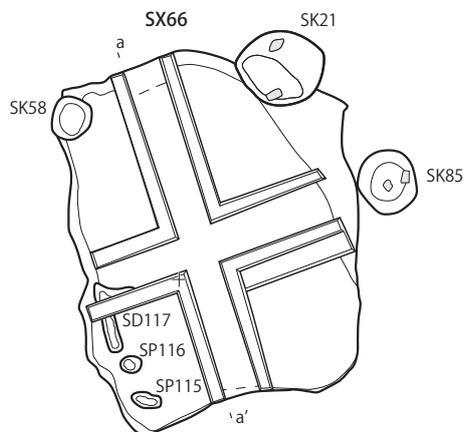
SK85
 1:10YR2/1黒色砂質シルト しまり弱い、砂礫わずかに混入する。
 2:10YR3/3暗褐色砂質シルト 小礫少量含む、地山粒わずかに含む。



第 13 図 ピット・柱穴 SP71・73・84・106、土坑 SK17・32・85

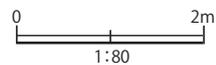


- SD72**
- | | |
|---------------------|------------------------|
| 1:10YR2/1 黒色粘土質シルト | しまり強い、地山粒少量含む。 |
| 2:10YR2/2 黒褐色粘土質シルト | しまり強い、地山小ブロック少量含む。 |
| 3:10YR2/1 黒色粘土質シルト | しまり強い、地山小ブロックやや多く含む。 |
| 4:10YR3/3 暗褐色粘土質シルト | 粘性・しまり共に強い、地山ブロック多く含む。 |

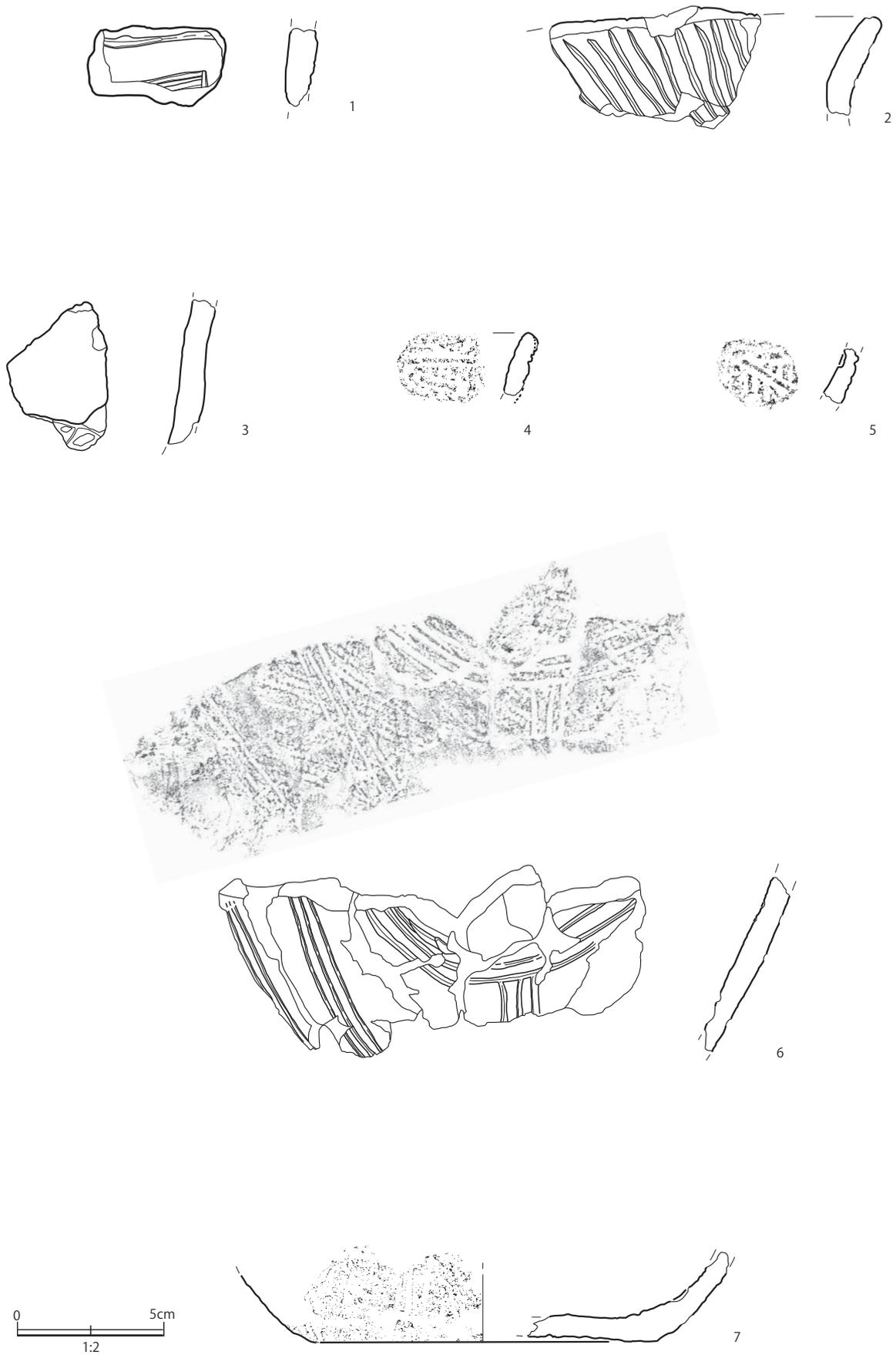


- SX66**
- | | |
|------------------|--------------|
| 1:10YR2/1 黒色シルト | 地山粒わずかに含む。 |
| 2:10YR2/2 黒褐色シルト | 地山小ブロック多く含む。 |

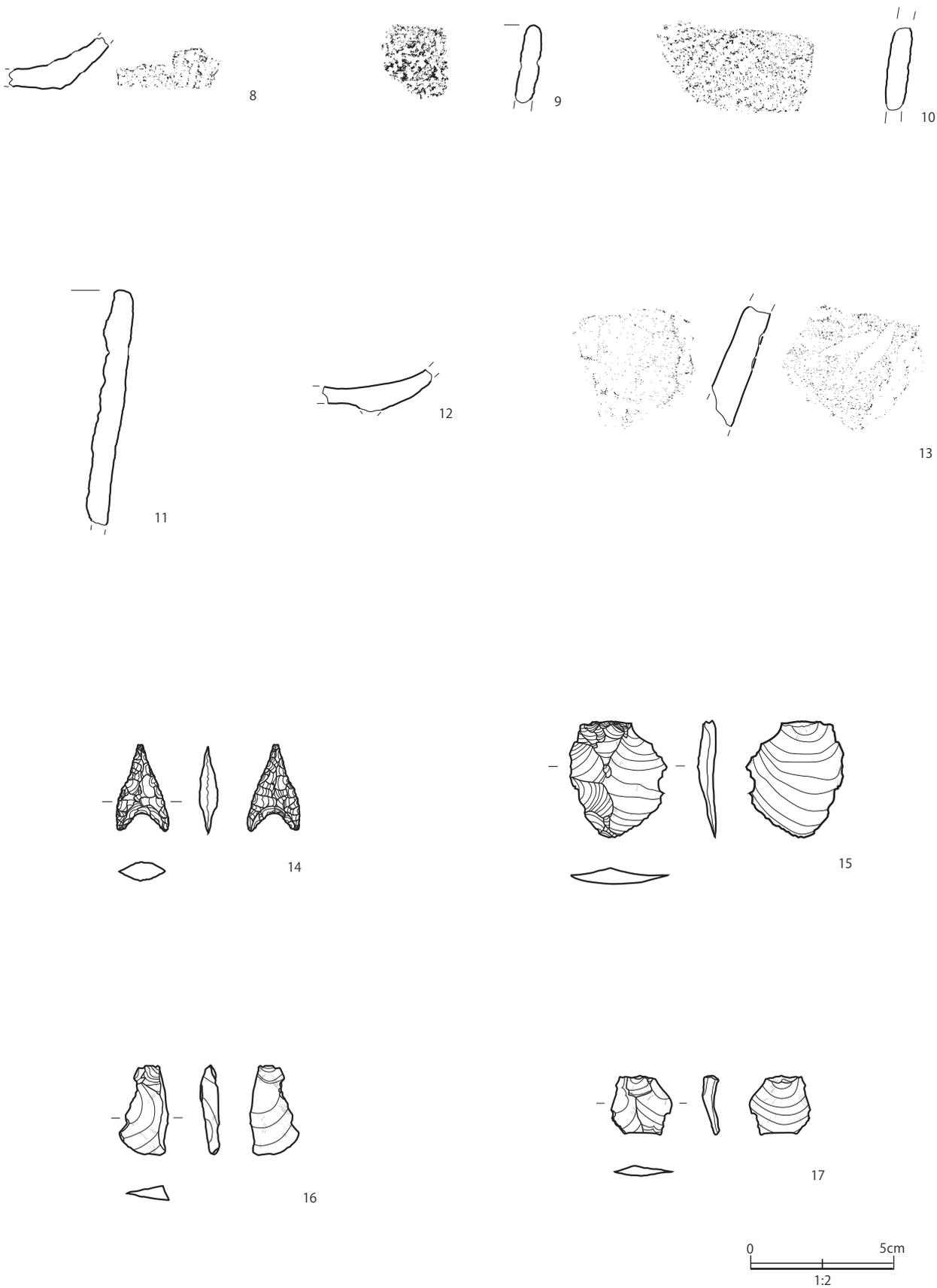
□ : 礎 ■ : 遺物



第 14 図 溝跡 SD72、性格不明遺構 SX66



第15図 縄文土器(1)



第16図 縄文土器(2)、陶器、瓦質土器、石器

IV 森の原遺跡第1・2次

1 遺跡の概要

A 概要

検出遺構は全部で291基である。A区では主に溝跡、ピットが検出されている。B区はピットが数基確認されたのみである。これらの遺構は地表下、約80cmで検出された。

C区では主に性格不明遺構、井戸跡、溝跡、土坑、ピットなどが検出された。A・B区と同様中央部より南側に遺構が集中して検出されている。調査区北側には、砂と粘土が交互に重なる層を持つ溝状遺構が縦横に巡っている。この溝状遺構の特徴から、水流により地面が溝状に抉られ、そこに流されてきた泥や砂が溜まったものと考えられる。

遺物は、第1次、第2次調査合わせて整理箱で9箱出土している。内訳は、縄文土器1039点、石器・石製品28点、土師器・須恵器16点、陶磁器29点、銭貨1点である。土器に至ってはそのほとんどが破片資料であった。

分布状況としては、遺構外出土のものが主になる。遺構内から出土しているものは、土坑SK203から出土した土師器甕、土坑SK247から出土した石鏃などごく少数であり、遺構に帰属する遺物などはほとんど見られない。縄文土器の出土数が多いが、これは遺構検出面の上面、遺物包含層から集中して出土している。また、この遺物集中地点を性格不明遺構として設定しており、同遺構の分布と遺物の分布は同じものである。調査区全体で見ると、南側の少し高くなっている場所のみで遺物が出土している。

出土遺物で共通していることは、特に土器などで表面が磨滅し、文様などが判別できないことである。そのため帰属時期の特定に至るものが少なかった。

B 基本層序

第1次、第2次調査ともそれぞれの調査区で層序の

確認を行なった(第21図)。第1次調査ではA、B区で各2か所、第2次調査では方角ごと、特に傾斜80cmの差がある北側と南側の計4か所で確認した。その結果、森の原遺跡の土層は大きく3つの層に分かれていることが判明した。以下にその詳細を述べる。

まず1層目は、表土である黒褐色シルト層である。この層は耕作土であり、過去の造成やほ場整備などで盛土された土と考えられ、畑地で使われるビニール片などが混入していた。砂粒や小礫などを含み、しまりが無いのが特徴である。深さは地表面から30～60cmほどである。この層からは、盛土によって攪乱を受けた際に混入したと思われる近世陶磁器などが出土している。

次に2層目の灰黄褐色粘質シルト層である。この層は、旧水田基盤層と思われる。遺跡は畑地として利用されていたが、戦前などは周辺一帯が水田であったことから、その頃の土層ではないかと考えられる。砂粒や小礫を多く含み、粘性は強く固くしめる。場所によっては水分を多く含むところも見受けられた。

最後に3層目の黒褐色粘土層である。この層上が遺構検出面であり、遺物が大量に出土した層でもある。この面は、強い粘質土であり、直上の旧水田基盤面を除去する際に剥離が激しく、面が荒れやすかった。また、水分を含むと軟弱化する一方、一度乾燥すると硬化し、遺構精査に支障をきたすことも度々あった。層の幅は約15～20cmほどである。この層では、縄文土器片がまとまって出土した。

以上3層が基本層序となるが、遺構検出面も含めた堆積土の特徴として、特に水はけが悪く、一度降雨があるとなかなか水が引かないことが挙げられる。

2 遺構

A 性格不明遺構

性格不明遺構と分類したものは、大小合わせて9基である(第22～26・28図)。しかし、前述したとおり、これらの遺構は遺物集中地点を囲み掘り下げをしていく過程で土層や土質などにより判断し遺構としたものであ

る。中には遺物集中範囲をプランとして性格不明遺構としたものもある。分類は以下のとおりである。

- 1 遺構プランが確認された大型のもの…3基
- 2 遺構プランが確認された小型のもの…2基
- 3 遺構プランが確認されず遺物集中範囲をプランとしたもの …4基

以下に1と分類したものについて詳述する。

SX007（第23図）は縦5m11cm×横4m2cm、深さ21.6cmを測る、楕円形の落ち込みである。遺物集中地点として当初に検出した。この遺構の底面付近では、火山灰が検出されている。この火山灰は分析結果から、肘折尾花沢テフラと推定された。噴出年代は、暦年で1.1～1.2万年前と推定されるが、堆積層が攪乱を受けた可能性が高い。遺構の帰属時期との関連はないと考えられる。この遺構からは、縄文土器片44点が出土している。

SX005（第26図）は縦3m35cm×横3m55cm、深さ22.2cmの円形の遺構である。トレンチの断面観察から判断し検出された遺構である。窪地のような場所に土が流れ込んで堆積した可能性が高い。この場所も遺物が集中して出土した地点であり、縄文土器の破片などが15点出土している。

SX009（第25図）は、縦3m66cm×横4m12cm、深さ30.4cmを測る、楕円形の遺構である。この遺構も含め前述の2つの遺構は遺物集中地点をプランとして囲んだものである。出土した遺物は縄文土器片172点、石鏃1点、有孔石製品1点などである。

B 溝 跡

遺構として確認できたものは、3条である。遺物が出土しているものもあるが、小破片であったり、表面が磨滅した土器であり時期を特定できうるものではない。

SD39（第26図）は、A区中央部北側に位置しており、調査区を東西に横切って検出された。長さ4m58cm、幅は1m15cm、深さは19cmになる。溝幅は均一ではなく、中央部で外側に大きく湾曲するような形をしている。遺物の出土はない。

SD237（第24図）は、SX008の範囲に位置し、平面形は楕円状に湾曲し、完結している。2m30cm四方の範囲に収まり、幅は広い部分では1mほど、深さは18.3cmである。

SD239（第27図）は、SX010の範囲に位置し、平面形は円状に湾曲し、先端は調査区外に続いている。幅61cm、深さ24.2cmを測る。この溝跡の底面からはSX007で検出された肘折尾花沢テフラが検出されている。また、この火山灰は層状に堆積しているものではなく、かなり散逸的に検出されている。二次堆積の可能性が高い。この遺構の埋没時期はSX007が埋没した時期と時期差がないものと推測がつく。

また、記載はしていないが調査区南側から検出されたSD015は森の原遺跡第3次調査で検出されているSD1004と同一の遺構である可能性が高い。

C 井戸跡

1基確認されている（第27図）。SE137は、直径1m18cm、深さ76.6cmを測る。平面形は円状で、断面形は底が平らなU字形である。ほかの土坑やピットよりも深く掘り下げられていること、またグライ化した土壌が底部付近にみられることから、井戸跡としての利用が考えられる。

D 土 坑

土坑は4基確認されており、その中で本報告書に記載したものは2基である（第22・27図）。

SK203（第22図）は、SX001範囲内から検出された。遺構検出面からは確認できず、SX001に東西サブトレンチを入れ断面を観察したところ、その存在が確認できた。

そのため、SX001検出面より40cmほど掘り込んだ層で検出されている。直径1m23cm、深さ34.6cmを測る。この土坑の2層から、大型の土師器壺が潰れた状態で出土している。このSK203の上面には、縄文土器片が多く含まれる遺物集中層があるため、出土した土師器が遺構に帰属すると考えると、堆積順序が逆転することとなる。そのため、縄文土器層は水流・泥流などの流れ込みによる、二次堆積と考えられる。

SK247（第27図）は、SX010の範囲に位置し、直径86.8cm、深さ18cmを測る。楕円形の平底形を呈し、上層からは第34図40の石鏃の他、土器片が少量出土している。

E ピット（小柱穴）

大小合わせて274基礎確認されている(第28～30図)。しかし、そのほとんどは地面にできた窪みや凹凸部へ堆積したものと考えられ、柱痕跡が認められる柱穴は少数に留まっている。また、これら柱穴で構成される建物跡なども確認できなかった。今回、報告書では特に柱痕跡が認められるもの、遺物が出土したものを記載している。ここでの遺物とは縄文土器片、炭化物などであるが、縄文土器については、文様が判別できないほど状態が悪いものであり、時期特定には至らないものであることを明記しておく。

3 遺物

出土遺物は縄文土器を中心に、石器、石製品、土師器、須恵器、近世陶磁器と多種にわたる。遺構に関連する遺物は少ない。また遺跡自体の水はけが悪く、降雨などによりすぐ水が溜まる土壌のためか、出土した縄文土器や土師器の多くは表面が磨滅している状態であった。

A 縄文土器

時期が判別できる資料から、縄文前期～晩期まで幅広い時代の遺物が出土している。だがそのほとんどが流れ込みと考えられる。出土した縄文土器の点数は多いが、そのほとんどが磨滅または溶出により文様が判別困難な状態である。出土した時点での取り上げ自体が困難なものも多く、土と一緒に取り上げなければならないものもあった。

その中で時期や文様・地文の判別できるものを掲載した(第31～33図)。

前期の土器（第33図）

前期に分類される土器は32の1点のみ出土している。体部の破片で、胎土に繊維が混入している。施文された非結束の羽状縄文から、前期初頭の東北南半で見られる上川名I式に属すると推測される。

中期の土器（第33図）

中期に属すると思われる遺物は2点出土している。

33は、湾曲する沈線により区画され、内は縄文が充填、外は磨消し縄文となる。大木9または10式に属するものと思われる。34も同様に曲線状の沈線による区画文

が施されるが、磨滅により縄文は確認できない。一部に文様の名残ではないかと推測されるゆるい突起が確認できる。大木10式のものと考えられる。

晩期の土器（第31～33図）

時期が判別できる土器で最も多く出土しているのがこの時期の土器である。

10は波状口縁をもつ鉢で、口縁近くに三叉文が施される。晩期初頭の大洞B式に属するものと考えられる。17は体部にRL・LRの縄文を施文し、底部付近と思われる下部は、横位に地文を磨り消し無文帯とする。18は口縁部で平行沈線間に刻目文を施す。19も口縁部でいわゆる数珠文が施されている。18・19は、大洞BC式に属すると推測される。24は、口縁近くに三条の沈線が施され、沈線間には部分的に刺突文も確認できる。体部は結節をもつLR原体で施文される。

時期不明の土器（第31～33図）

文様が施文されるが、時期の判断はつかないものを挙げる。

3は、半截竹管によるものとみられる深い刻みの沈線が施される。4も同様の沈線をもち、3・4は口縁近くに半截竹管条痕文をもち、体部にLR縄文が施される深鉢の同一個体と考えられる。5は、横位沈線の下に曲線状の沈線が入る。8は頸部ですばまり、体部で膨らむ深鉢の肩部分と考えられ、広く沈線をまわしその下方に縄文を施文している。35は、口縁近くに撚糸文が縦位押圧され、頸部は無文帯となる土器であると考えられる。

文様をもたず地文だけの粗製土器の破片が多く出土した。おおまかに分類すると、以下のとおりである。

- ①結節をもたない原体を地文とするもの
- ②結節をもつ原体を地文とするもの
- ③RL・LR原体を展開するもの
- ④原体を縦方位に施文するもの

20は地文はLR結節だが、結節が2本平行して施されている。

底部のみ残存する土器（第31・32図）

7点出土したが、表面の磨滅が激しく、地文の有無も確認できないものがほとんどである。その中で1のみでLR原体の地文が確認できた。16は、小型の鉢と考えられる。文様の有無は確認できないが、外面の一部に何かを押し当てたような痕があり、光沢を伴う。

B 石器・石製品

石鏃6点、石匙1点、剥片1点、石核1点、礫1点、石剣1点、有孔石製品1点の計12点が出土している(第34・35図)。

石 鏃 (第34図36～41)

縄文時代中期または後期のものが1点、縄文時代晩期のものが5点出土した。36は、ほかの石鏃と比べ大きく、基部に僅かな抉り込みが入る形態となる。37は、基部に僅かに湾曲した抉り込みが入る形態を呈する。36・37ともに凹基無茎鏃に分類される。それに対し、38～41は茎部が欠損しているものが多く、凸基有茎鏃に属するものである。

石 匙 (第34図42)

縦型の石匙で、表面は剥離痕が少なく自然面の状態を呈する。下部には被熱の痕跡が見られる。刃部の調整加工が顕著ではなく、実用的なものとは考えられない。

剥 片 (第34図43)

腹面と背面、両面共全面に調整加工が施されるが、刃部を形成するような連続した加工は見られない。

石 核 (第34図44)

片面だけに加工痕が認められる。加工痕が少ないことから、作業途中で放棄された可能性がある。

礫 (第35図45)

片面に茶褐色の付着物が確認できる。

石 剣 (第35図46)

先端部が薄く細くなる形態を呈するが、半分が欠損しており全体の形態は不明である。断面はほぼ楕円形だが、背面を平坦に作り出している。石材は粘板岩である。

有孔石製品 (第35図47)

材質は凝灰岩である。周辺からは接合する剥片も出土している。中央部の円孔には、その周りに円状に加工痕が残る。その中に、約2～3mmの敲打痕が円状に回っているのが認められるため、先の細い棒状のもので敲いて孔をあけたと考えられる。用途は不明である。

C 土師器・須恵器

出土したものはほとんどが破片資料であり、遺構に関連するものは1点のみである。

SK203 出土の土師器 (第36図48)

SK203の上層から潰れた状態で出土している。底部から体部下半のみ残存する。底部は丸底を呈し、底部中心部を平らに整形しようとしたナデ痕が認められる。全体的に歪みが認められるが、丸型の器形と考えられる。内面にはハケメ、ナデ痕が見られ、外面にもわずかに同じ整形が見られる。

遺構外出土の土師器・須恵器 (第36図49～56)

49は口縁～底部にかけて残存するが、わずかな部分しか残っていない。外面に僅かにロクロ目による調整痕が確認できる。時期は9世紀後半と考えられる。50は底部に回転糸切の跡が残る。51・52は口縁資料で、52は内面に黒色処理が施される。53は甕の口縁部のみ残存している状況である。口縁上部には平らに面取りしたような整形痕が認められる。内面の口縁部付近にも同じ整形痕が見られ、口縁部外面は指でつまんで整形した痕跡がある。

また、須恵器については甕の破片が2点、坏の破片が1点出土した。54は甕の口縁部で、下部にわずかに外面にタタキ、内面にアテ痕が見られる。55も同様の整形痕が残る。56は坏の底部である。

D 陶磁器

8点出土しているが、そのすべてが表土、もしくは表土除去後の面整理時に出土しているため、表土の層に紛れ込んでいたものと思われる(第37図)。

時期については57以外の多くが17世紀～18世紀の所産と考えられる。57は瀬戸美濃の皿で、大窯第1段階(1480～1530年)のものと考えられ、底部に重ね焼きの痕跡が明瞭に残る。58は肥前陶器の皿で、灰釉がかかる。砂目段階のものと考えられ、時期は1610～1650年頃である。59は、内面に刷毛目文を有し、唐津の特徴を備えている。時期は江戸時代頃と推定される。60は、呉器手と呼ばれる碗と考えられ、高台が高く外に開いた「撥高台」が特色の器である。17世紀末から18世紀初頭の頃のものである。61は、高台から底部の一部のみ残存する。底部の立ち上がりがないこと、底部内面に文様が描かれていることから器形を皿と推定した。62は、体部に草花文を有する碗である。時期は18世紀頃の所産と考えられる。61・62は肥前系のものであると考えられる。63は灰色がかった胎土の、波

佐見の碗である。全体の文様はわからないが、わずかに染付が確認できる。時期は18世紀後半である。64は、播鉢である。内面には卸し目を有するが、長く使用していたのか目が磨滅している。使用痕跡とみられる帯状の擦痕が認められる。時期は18世紀頃の所産と考えられる。

ラス一銭アルミ貨幣である(第37図65)。同様の貨幣は昭和13年～15年銘までであるが、出土したものは15年銘のものである。表土層に紛れ込んで出土したものと考えられる。

E 金属製品

銭貨が1点出土しているが、これは径1.7cm程の力

表4 森の原遺跡第1・2次 縄文土器観察表

図版 番号	遺物 No.	遺構 (出土地点)	器種	計測値 (mm)				施文	地文	備考	
				口径	最大径	底径	器高				器厚
	1	SX001	深鉢	—	(110)	(78)	(32)	6.5	—	LR	—
	2	SX001	深鉢	—	(175)	—	(146)	9	—	LR	RP011
	3	SX001	不明	—	—	—	(49)	7	半截竹管条痕文	不明	RP011
	4	SX001	不明	—	—	—	(22)	6	半截竹管条痕文	LR	RP011
	5	SX001	深鉢	—	—	—	(17)	8	沈線文	—	—
	6	SX001	深鉢	—	—	—	(34)	6	—	RL	—
31	7	SX001	深鉢	—	—	—	(46)	6	—	RL (縦方向)	—
	8	SX005	深鉢	—	—	—	(20)	10	沈線文	RL (縦方向)	—
	9	SX008	深鉢	—	(142)	(88)	(49)	(6)	—	不明	—
	10	SX008	深鉢	—	—	—	(32)	7	三叉文	LR	波状口縁
	11	SX008	深鉢	—	—	—	(30)	6	—	RL・LR	—
	12	SX009	深鉢	—	—	—	(48)	5.5	—	LR 結節	—
	13	SX009	深鉢	—	—	—	(49)	5.5	—	RL・LR	—
	14	SX009	深鉢	—	(126)	88	(55.5)	(8)	—	不明	—
	15	SX009	深鉢	—	(118)	(84)	(36)	(7.5)	—	—	—
	16	SX010	小型鉢	—	(71)	(39)	(24)	5.5	—	—	外面光沢部有 底部付近地文 磨り消し
	17	SX010	深鉢	—	(124)	—	(59)	4	—	RL・LR	—
32	18	SX010	深鉢	—	—	—	(21)	4.5	平行沈線・刻目文	不明	—
	19	SX010	深鉢	—	—	—	(24)	6	数珠文	—	—
	20	SX010	深鉢	—	—	—	(61)	6	—	LR 結節	—
	21	SX010	深鉢	—	—	—	(96)	5	—	LR・RL	—
	22	SX010	深鉢	—	—	—	(40.5)	5	—	LR 結節	—
	23	SX010	深鉢	—	—	—	(62)	3.7	—	不明	補修孔
	24	SX012	深鉢	—	—	—	(69)	5.5	沈線文・刺突文	LR 結節	—
	25	SX012	深鉢	—	—	—	(73)	5.5	—	LR 結節	—
	26	SX282	深鉢	—	—	—	(47)	7	—	LR	—
	27	SX282	深鉢	—	—	—	(53)	7.5	—	LR 結節	—
	28	SX282	深鉢	—	—	—	(39)	5	—	LR	—
	29	SX282	深鉢	—	—	—	(45.5)	5.5	—	LR 結節	—
33	30	3901G	深鉢	—	(112)	(74)	(27)	5	—	—	—
	31	3901G	鉢	—	(97)	(80)	(16.5)	5	—	—	—
	32	X-0	深鉢	—	—	—	(54.5)	8	—	LR・RL (前々多) 羽状縄文	—
	33	4797G	深鉢	—	—	—	(51)	6	沈線区画文	RLか?	—
	34	4797G	深鉢	—	—	—	(66.5)	9	沈線区画文	不明	—
	35	4797G	深鉢	—	—	—	(27)	11	押庄縄文(縦位)	—	—

表5 森の原遺跡第1・2次 石器・石製品観察表

図版 番号	遺物 No.	遺構 (出土地点)	種別	材質	計測値 (mm)			重量 (g)	備考
					長	幅	厚		
	36	4797G	石鏃	珪質頁岩	38.2	15.0	5.0	2.3	—
	37	3701G	石鏃	珪質頁岩	(25.1)	(16.5)	3.4	1.1	RQ002 先端・左端部欠損
	38	SX009	石鏃	珪質頁岩	37.1	15.5	4.6	1.9	RQ004
	39	SX001	石鏃	珪質頁岩	(26.1)	11.7	4.2	1.3	RQ001 茎部欠損
34	40	SK247	石鏃	珪質頁岩	(28.1)	13.0	5.2	1.3	RQ008 茎部欠損
	41	3999G	石鏃	珪質頁岩	(18.0)	11.0	3.9	0.7	茎部欠損
	42	4301G	石匙	珪質頁岩	58.0	33.5	9.5	16.8	RQ010 下部被熱
	43	4199G	剥片	珪質頁岩	34.5	24.0	7.5	5.1	—
	44	4797G	石核	頁岩	106.2	105.3	61.2	550.0	—
	45	SX009	礫	安山岩	(100)	(63)	51	389.9	褐色付着物 下部破損
35	46	SX001	石剣	粘板岩	(164.4)	23.9	13.3	94.0	RQ009 上部破損
	47	SX009	有孔石製品	凝灰岩	32.0	57.6	5.0	11.3	RQ005 鼓孔 接合資料有

表6 森の原遺跡第1・2次 土師器・須恵器観察表

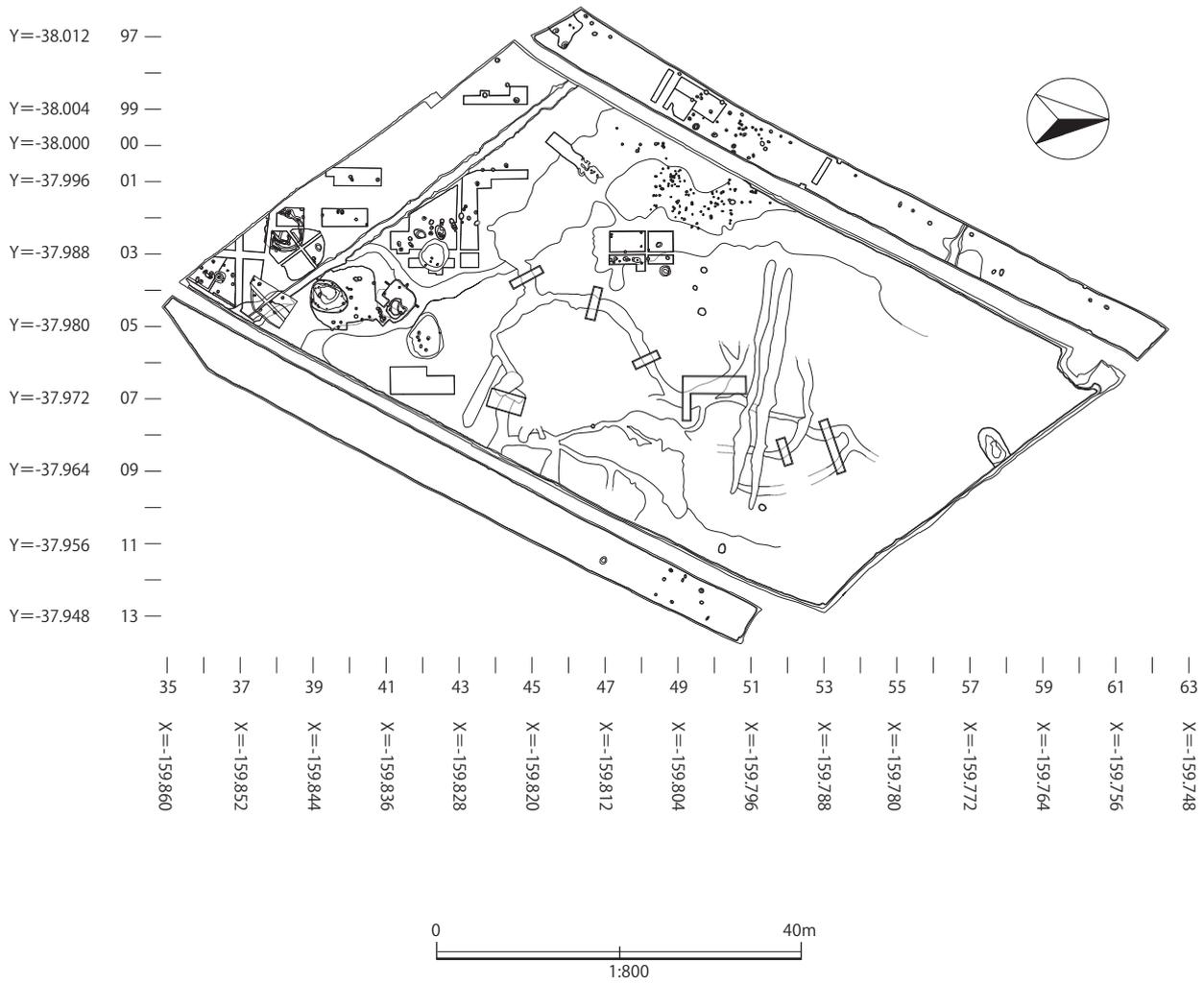
図版 番号	遺物 No.	遺構 (出土地点)	種別	器種	計測値 (mm)					調整		備考		
					口径	最大径	底径	器高	器厚	内面	外面			
	48	SK203	土師器	壺?	—	(275)	(38)	(119)	7	ナデ	ハケメ	ナデ	ハケメ	RP006
	49	4701G	土師器	坏	(128)	—	(60)	39	5	ロクロ	—	ロクロ	—	—
	50	4701G	土師器	坏	—	(81)	63	(12)	9	—	—	—	—	底部回転糸切
	51	4701G	土師器	坏	(116)	—	—	(17)	5	ロクロ	—	ロクロ	—	—
36	52	C区西壁	土師器	坏	(162)	—	—	(44)	5	ミガキ 黒色処理	—	ロクロ	—	—
	53	X-O	土師器	甕	—	—	—	(20)	6	ハケメ	—	ロクロ	—	—
	54	5907G	須恵器	甕	—	—	—	(55)	8.5	—	—	—	—	内:アテ痕 外:タタキ
	55	4101G	須恵器	甕	—	—	—	(82.5)	5	—	—	—	—	内:アテ痕 外:タタキ・自然釉
	56	A区X-O	須恵器	坏	—	—	—	(20)	8	—	—	—	—	—

表7 森の原遺跡第1・2次 陶磁器観察表

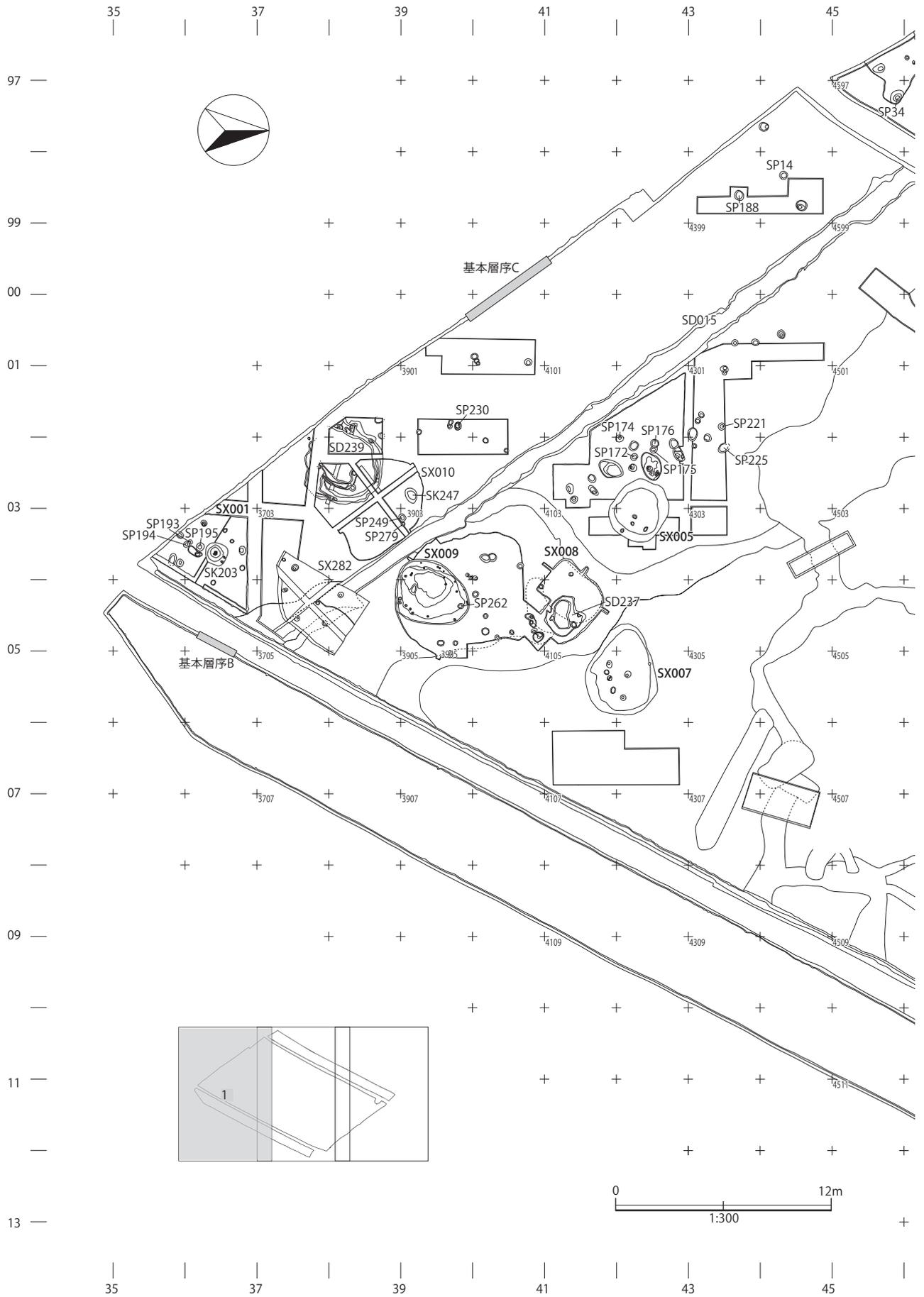
図版 番号	遺物 No.	遺構 (出土地点)	種別	器種	計測値 (mm)					文様	備考			
					口径	最大径	底径	器高	器厚					
	57	C区X-O	陶器	皿	—	—	—	(11)	7.5	—	—	瀬戸美濃	1480~1530	重ね焼きの痕跡
	58	C区X-O	陶器	皿	—	—	—	(13)	4.5	—	—	肥前	1610~50	灰釉
	59	X-O	陶器	鉢	—	—	—	(46)	6	波状文	—	唐津	—	—
37	60	X-O	陶器	碗	—	(66)	(50)	(23.5)	8	—	—	肥前 呉器手	17世紀末~18世紀初	灰釉
	61	X-O	磁器	皿	—	—	—	(15)	6	草花文	—	肥前	—	—
	62	X-O	磁器	碗	—	(100)	(44)	(33)	5	草花文	—	肥前	—	—
	63	A区X-O	磁器	碗	—	(78)	(43)	(28)	7	草花文	—	波佐見	18世紀後半か?	—
	64	X-O	陶器	搦鉢	—	(194)	(136)	(48)	10	—	—	—	—	—

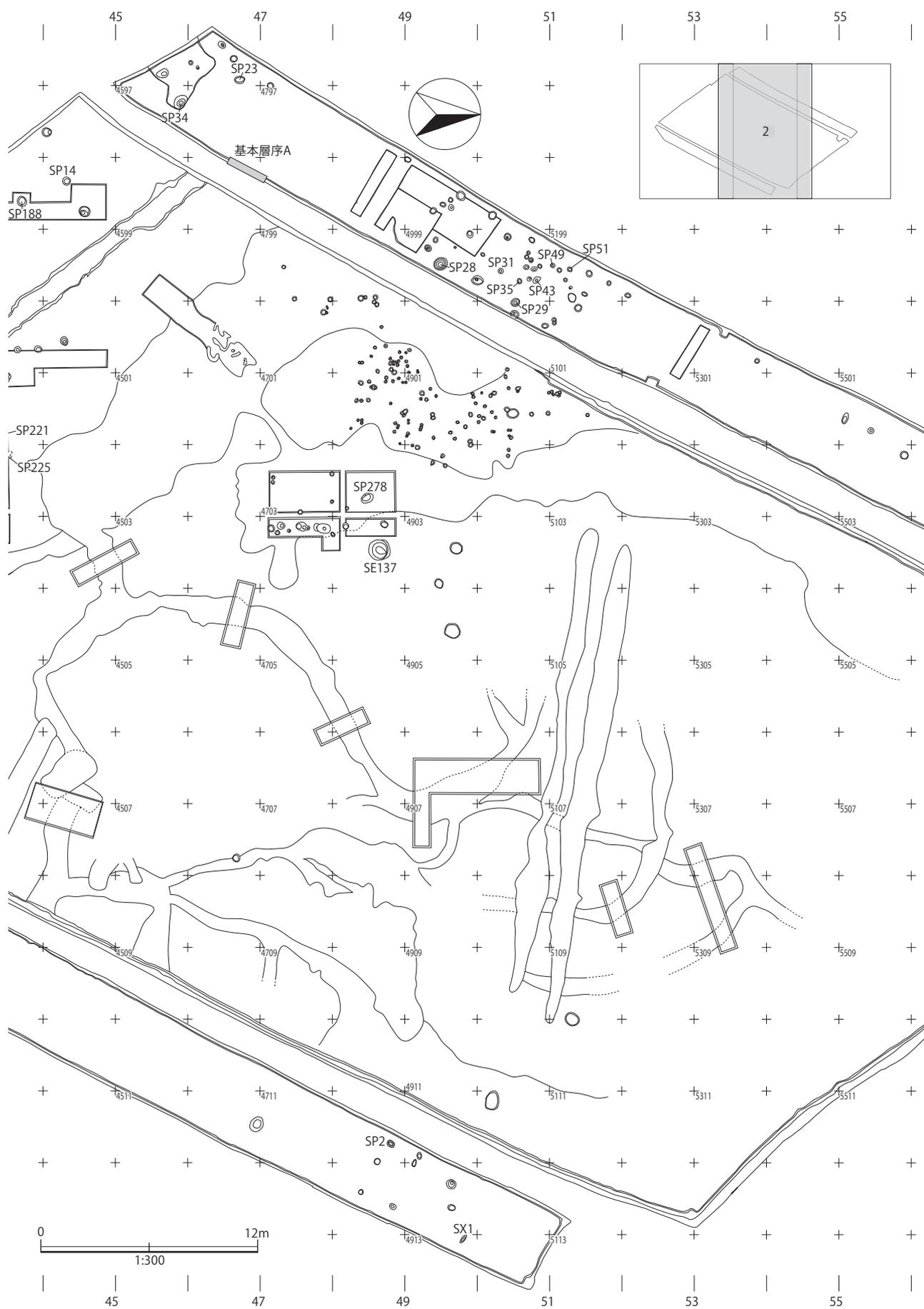
表8 森の原遺跡第1・2次 金属製品観察表

図版 番号	遺物 No.	遺構 (出土地点)	種別	計測値 (mm)				備考
				長さ	幅	厚さ	重量 (g)	
37	65	X-O	銭貨	17.4	17.4	2.7	0.9	表「一銭」裏「大日本 昭和十五年」

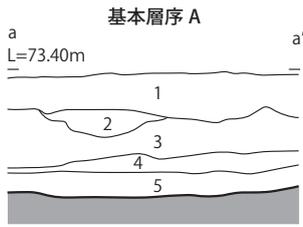


第17図 遺構全体図



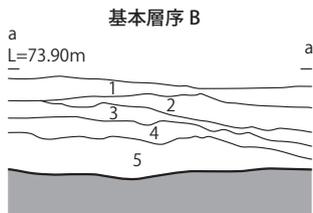


第19図 遺構配置図(2)



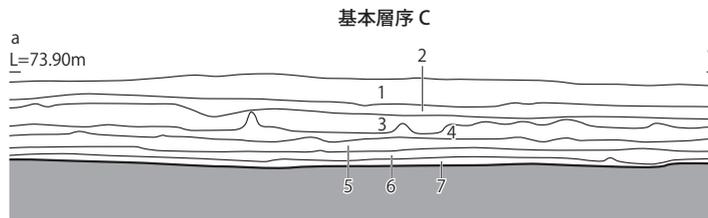
基本層序A

- | | |
|--------------------|--|
| 1:10YR3/1黒褐色シルト | 1～5mm程度の砂粒及び10mm程度の小礫を少量含む。しまり弱いが硬い。 |
| 2:10YR2/1黒色シルト | 2.5Y3/2黒褐色シルトを斑状に多く含む。3～5mmの砂礫及び30mm程度の小礫を多く含む。硬くしまる。 |
| 3:2.5Y3/2黒褐色シルト | 2.5Y4/2暗灰黄色シルト及び10YR4/6褐色粘質シルトが互層に重なっている。5mm～30mm程度の小礫を多く含む。しまる。 |
| 4:2.5Y4/2暗灰黄色粘質シルト | 7.5YR5/8明褐色シルトをブロック状に少量及び3mm程度の小礫を含む。しまる。 |
| 5:10YR3/3暗褐色シルト | 1～3mm程度の砂粒を含む。しまる。 |



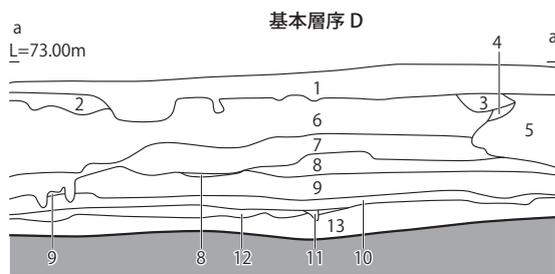
基本層序B

- | | |
|-------------------|--|
| 1:10YR3/3暗褐色シルト | しまり弱く、硬い。 |
| 2:10YR3/4暗褐色シルト | 5～30mm程度の小礫を全体的に多く含む。しまり弱く、硬い。 |
| 3:10YR5/3にぶい黄褐色粘土 | 5～30mm程度の小礫を含む。粘性強く、しまる。 |
| 4:2.5Y5/2暗灰黄色粘土 | 5～30mm程度の小礫を少し含む。粘性強く、硬くしまる。 |
| 5:2.5Y5/6黄褐色砂 | 2.5Y5/2暗灰黄色砂質シルト及び10YR5/6黄褐色粘質シルトを斑状に多く含む。しまり弱く、やわらかい。 |



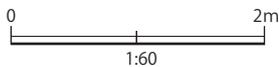
基本層序C

- | | |
|---|-----------------------------------|
| 1:10YR2/2黒褐色シルト | 耕作土。径3～5mm大の小礫がわずかに混じる。ぼそぼそとした土質。 |
| 2:10YR2/2黒褐色シルト | 耕作土。1と同じだが、1よりも硬くしまった土質。 |
| 3:10YR2/1黒色シルトと、10YR1.7/1黒色シルトが縞状に混じる。10YR4/6褐色粘土が20mm角前後のブロック状に含まれる。 | |
| 4:10YR4/2灰黄褐色粘土質シルト | 細砂を多量に含む。径5mm前後の小礫がわずかに混じる。 |
| 5:10YR4/2灰黄褐色粘土 | 硬くしまる。径5mm以下の小礫がごくわずかに混じる。 |
| 6:10YR3/1黒褐色粘土 | 径5mm前後の炭粒をごくわずかに含む。 |
| 7:10YR3/1黒褐色粘土 | 土質は6に似る。酸化鉄による褐色の変色がはげしく見られる。 |

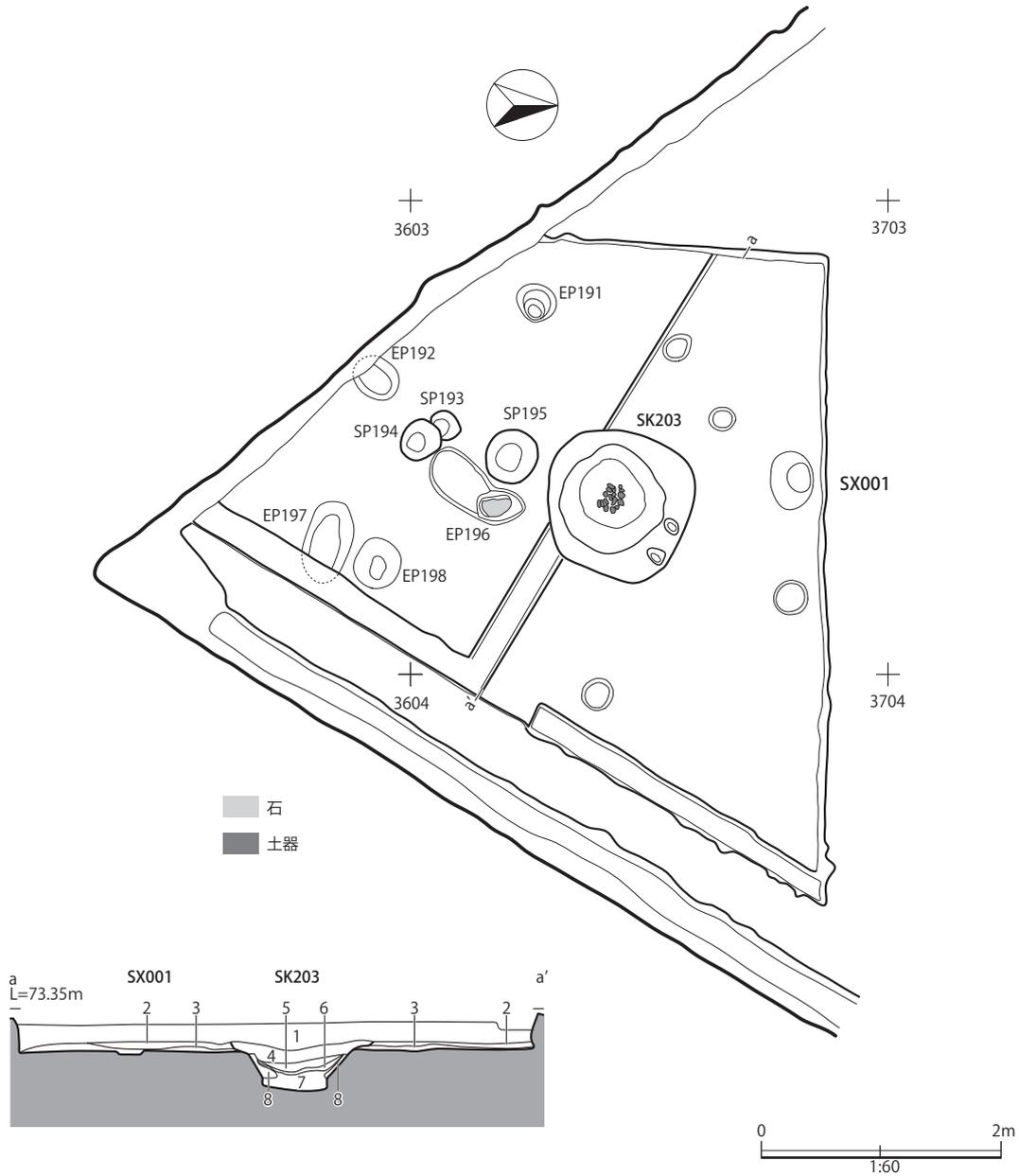


基本層序D

- | | |
|---|---|
| 1:10YR3/2黒褐色砂質シルト | 粗砂と径5～10mmの小礫を多量に含む。 |
| 2:10YR4/2灰黄褐色砂質シルト | 径3mm前後の粗砂粒を含む。根の炭化物がわずかに見られる。 |
| 3:10YR4/3にぶい黄褐色砂質シルト | 径10mm前後の礫を多量に含む。 |
| 4:10YR4/2灰黄褐色砂質シルト | 径10～20mmの小礫を多量に含む。径50mm前後の礫をわずかに含む。 |
| 5:10YR3/3暗褐色粗砂質シルト | 10YR5/4にぶい黄褐色粘土質シルトが、50mm角程度のブロック状にわずかに混じる。 |
| 6:10YR4/2灰黄褐色粘土質シルト | 径50mm前後の礫をわずかに含む。 |
| 7:10YR4/1褐灰色粘土質シルト | 径5～10mmの小礫をわずかに含む。 |
| 8:10YR4/1褐灰色砂質粘土 | 粗砂を多量に含む。 |
| 9:10YR4/1褐灰色粘土 | 均質で硬くしまる。ごくわずかに砂粒を含む。酸化鉄による褐色のシミが多く見られる。 |
| 10:10YR3/1黒褐色粘土 | 均質で硬くしまる。9にあった砂はほとんど見られない。 |
| 11:10YR3/1黒褐色粘土と、10YR5/3にぶい黄褐色粘土が6：4でまだらに混じる。 | |
| 12:10YR3/1黒褐色粘土と、10YR5/3にぶい黄褐色粘土が2：8でまだらに混じる。 | |
| 13:10YR5/3にぶい黄褐色粘土 | 下部に砂を多量に含む。 |



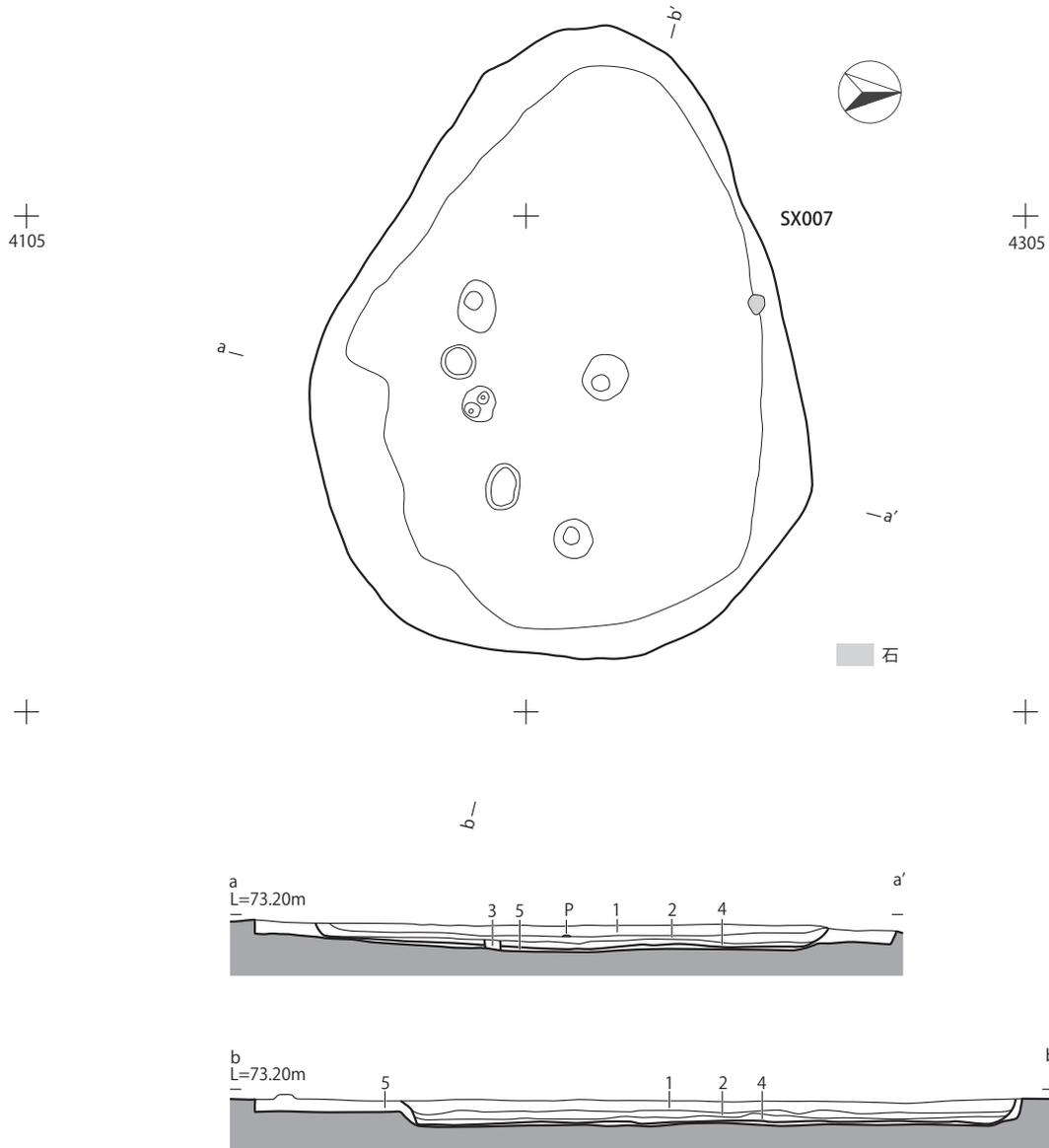
第21図 基本層序図



SX001 性格不明遺構・SK203 土坑

- | | |
|------------------------|--------------------------------|
| 1:10YR3/2 黒褐色粘質シルト | |
| 2:10YR4/3 にぶい黄褐色粘質シルト | 強く粘る。 |
| 3:10YR4/4 褐色粘質シルト | 砂を含む。強く粘る。 |
| 4:(F1)10YR2/2 黒褐色シルト | やや粘る。 |
| 5:(F2)10YR2/2 黒褐色シルト | 炭化物粒と土器片が混じる。 |
| 6:(F3)2.5Y3/1 黒褐色粘質シルト | |
| 7:(F4)10YR2/3 黒褐色粘質シルト | 強く粘る。 |
| 8:10YR5/4 にぶい黄褐色粘質シルト | 10YR2/2 黒褐色シルトブロックが少量混じる。崩落土か？ |

第 22 図 性格不明遺構 SX001、土坑 SK203



SX007 性格不明遺構

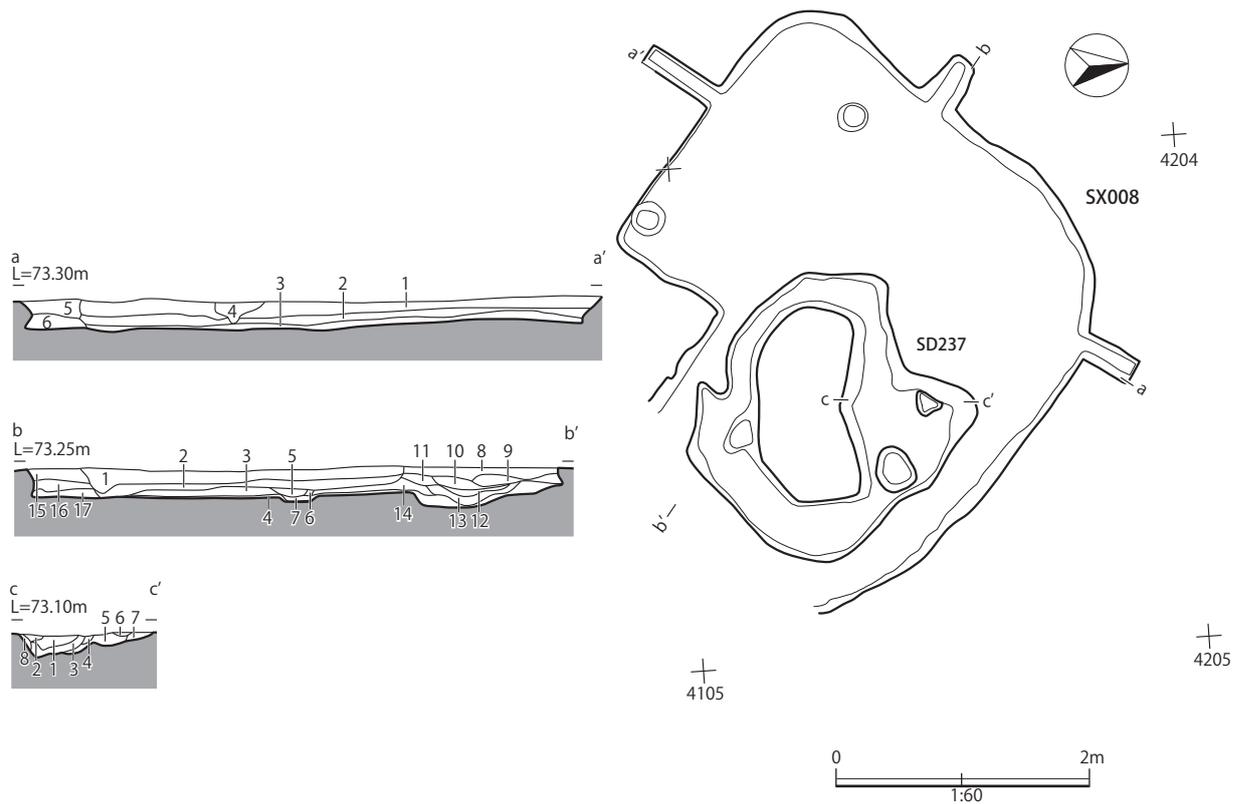
- 1:10YR3/1 黒褐色シルト
- 2:10YR3/4 暗褐色シルト
- 3:10YR4/1 褐灰色砂質シルト
- 4:10YR5/1 褐灰色砂質シルト
- 5:10YR3/1 黒褐色砂質シルト

微砂を少量含み、硬くしまる。土器片を含む。

10YR2/1 黒色砂粒 (塊でヤニ状のものと絡んで固まる) が、まだらに混じる。



第 23 図 性格不明遺構 SX007

**SD237 溝跡**

- 1:10YR2/2 黒褐色砂質シルト
- 2:10YR4/2 灰黄褐色砂質シルト
- 3:10YR2/3 黒褐色砂質シルト
- 4:10YR4/4 褐色砂質シルト
- 5:10YR4/3 にぶい黄褐色砂質シルト
- 6:10YR3/4 暗褐色砂質シルト
- 7:10YR3/3 暗褐色砂質シルト
- 8:10YR4/4 褐色砂質シルト

小砂礫が少量混じる。

10YR5/2 灰黄褐色砂質シルトの小ブロックが少量混じる。粘る。

SX008 性格不明遺構

a-a'

- 1:10YR2/3 黒褐色シルト
- 2:10YR3/4 暗褐色砂質シルト
- 3:10YR4/3 にぶい黄褐色砂質シルト
- 4:10YR2/2 黒褐色シルト
- 5:10YR4/3 にぶい黄褐色砂質シルト
- 6:7.5YR3/3 暗褐色シルト

極小風化礫が多く混じる。硬くしまる。土器片を含む。
小砂礫が少量混じる。
やや粘る。
粘る。土器片を含む。

極小砂が混じる。やや粘る。

b-b'

- 1:10YR2/3 黒褐色シルト
- 2:10YR3/4 暗褐色砂質シルト
- 3:10YR4/3 にぶい黄褐色砂質シルト
- 4:10YR4/4 褐色砂質シルト
- 5:10YR3/2 黒褐色シルト
- 6:10YR4/4 褐色砂質シルト
- 7:10YR3/3 暗褐色シルト
- 8:10YR4/2 灰黄褐色砂質シルト
- 9:10YR4/3 にぶい黄褐色砂質シルト
- 10:10YR4/3 にぶい黄褐色砂質シルト
- 11:10YR3/4 暗褐色砂質シルト
- 12:10YR2/3 黒褐色砂質シルト
- 13:10YR3/3 暗褐色砂質シルト
- 14:10YR3/3 暗褐色砂質シルト
- 15:10YR4/3 にぶい黄褐色砂質シルト
- 16:7.5YR3/3 暗褐色シルト
- 17:10YR4/4 褐色砂質シルト

極小風化礫が多く混じる。硬くしまる。土器片を含む。
小砂礫が少量混じる。
やや粘る。

10YR2/1 黒褐色粘質シルトの細粒が少量混じる。サラサラしている。

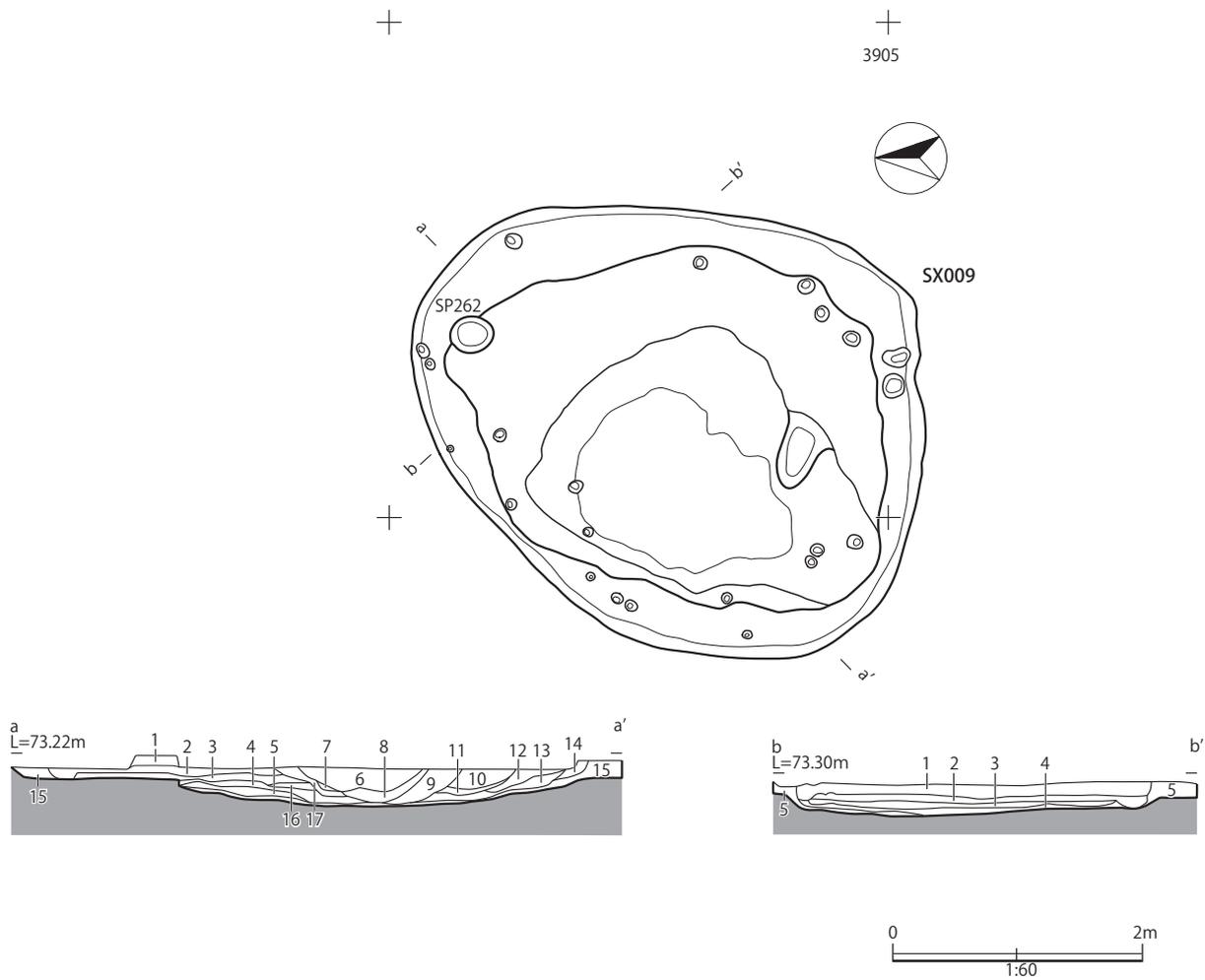
10YR2/1 黒褐色シルトの細粒が混じる。やや粘る。
小風化礫が多く混じる。サラサラしている。

小風化礫が多く混じる。硬くしまる。土器片を含む。
やや粘る。
小風化礫が少量混じる。

10YR4/6 褐色砂質シルトがブロック状に混じる。

極小砂が混じる。やや粘る。

第24図 性格不明遺構 SX008、溝跡 SD237



SX009 性格不明遺構

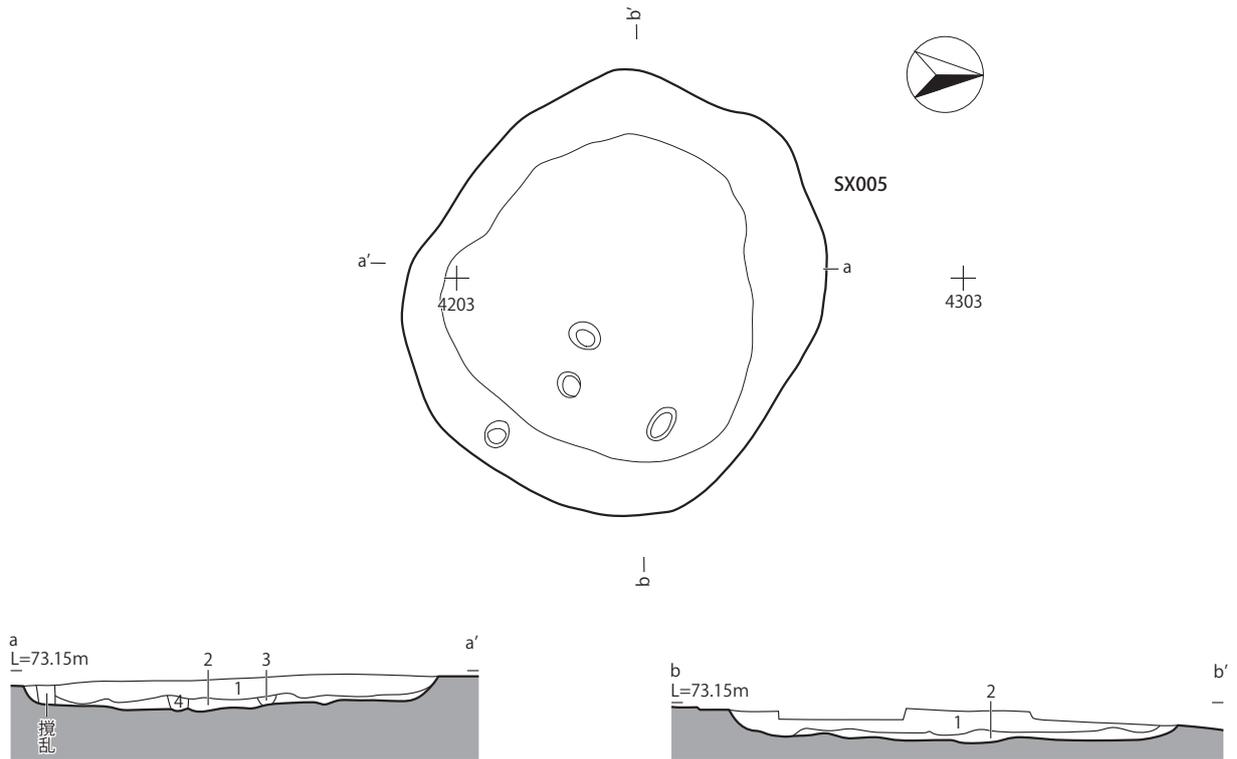
a-a'

- | | |
|--|----------------------------------|
| 1:10YR5/4 にぶい黄褐色シルト | 小風化礫が少量混じる。硬くしまる。 |
| 2:10YR5/4 にぶい黄褐色砂質シルト | 小風化礫がごく少量混じる。 |
| 3:10YR4/6 褐色砂質シルト | 極小風化礫と、10YR7/1 灰白色シルトの小ブロックが混じる。 |
| 4:10YR4/3 にぶい黄褐色砂質シルト | |
| 5:10YR5/3 にぶい黄褐色砂に | 小風化礫が多く混じる。 |
| 6:10YR5/6 黄褐色砂質シルト | |
| 7:10YR4/3 にぶい黄褐色砂質シルト | やや粘る。 |
| 8:10YR5/3 にぶい黄褐色砂質シルト | 小風化礫が少量混じる。 |
| 9:10YR10/3 黒褐色粘質シルト | 硬くしまる。 |
| 10:10YR3/2 黒褐色粘質シルト | 硬くしまる。 |
| 11:10YR5/5 黄褐色砂質シルト | |
| 12:10YR3/4 暗褐色砂質シルト | |
| 13:10YR4/3 にぶい黄褐色砂質シルト | |
| 14:10YR3/3 暗褐色シルト | |
| 15:10YR4/4 褐色シルト | |
| 16:10YR5/2 灰黄褐色シルトと、10YR5/4 にぶい黄褐色砂質シルトがまだらに混じる。 | |
| 17:10YR3/3 暗褐色シルト | 小風化礫が混じる。硬くしまる。 |

b-b'

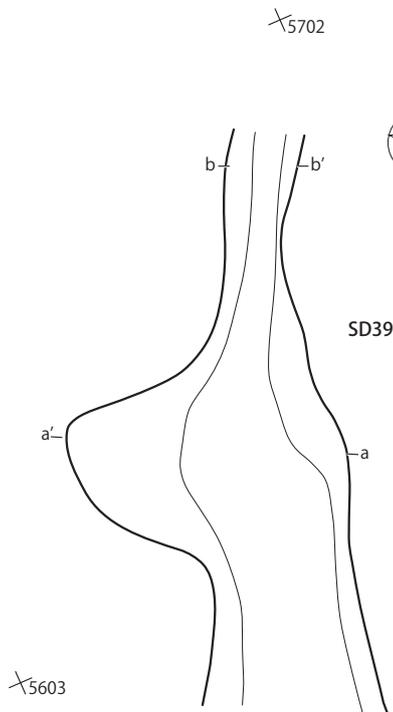
- | | |
|-----------------------|-----------------------------------|
| 1:10YR5/4 にぶい黄褐色シルト | 小風化礫が少量混じる。硬くしまる。 |
| 2:10YR5/4 にぶい黄褐色砂質シルト | 小風化礫がごく少量混じる。 |
| 3:10YR4/6 褐色砂質シルト | 極小風化礫と、10YR7/1 灰白色シルトの小ブロックが混じる。 |
| 4:10YR4/3 にぶい黄褐色砂質シルト | |
| 5:10YR5/5 黄褐色砂質シルト | 10YR2/1 黒色砂質土の小ブロック(小さいかたまり)が混じる。 |

第 25 図 性格不明遺構 SX009



SX005 性格不明遺構

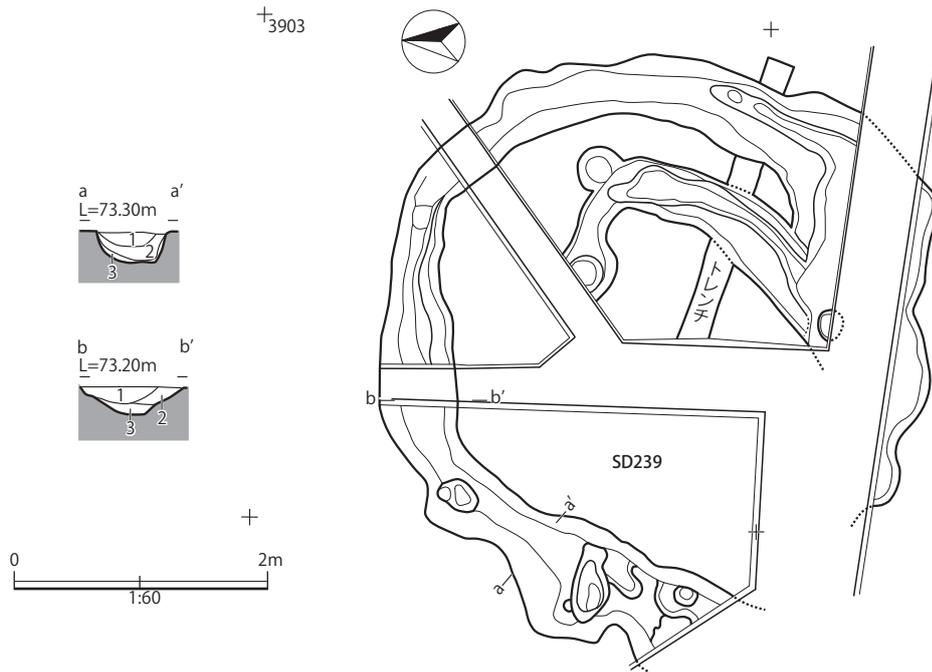
- 1:10YR2/2 黒褐色砂質シルト 風化礫が少量混じる。硬くしまる。縄文土器細片を含む。
- 2:10YR3/2 黒褐色砂質シルト 風化小礫が少量混じる。硬くしまる。
- 3:10YR2/3 黒褐色砂質シルト やや粘る。
- 4:10YR2/1 黒色シルト やや粘る。



SD39 溝跡

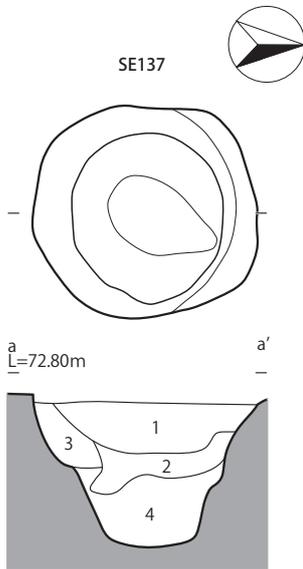
- 1:2.5Y2/1 黒色シルト 5YR5/8 明赤褐色粘土及び2.5Y5/4 黄褐色粘土を点状に少量含む。しまる。
- 2:2.5Y3/2 黒褐色砂質シルト 2.5Y5/4 黄褐色粘土のブロックを少量含む。しまり弱く、やわらかい。
- 3:2.5Y4/3 オリーブ褐色砂質シルト しまり弱く、やわらかい。

第 26 図 性格不明遺構 SX005、溝跡 SD39



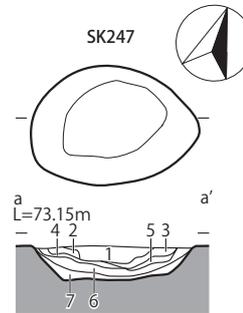
SD239 溝跡

- | | |
|-----------------------|--|
| 1:10YR2/2 黒褐色微砂質シルト | 上層に土器片を含む。固くしまる。 |
| 2:10YR2/2 黒褐色砂質シルト | 10YR3/2 黒褐色粘質シルトがマーブル状に混じる。 |
| 3:10YR4/3 にぶい黄褐色砂質シルト | 10YR3/3 暗褐色粘質シルト(極小砂を含む)がマーブル状に混じる。やや粘る。 |



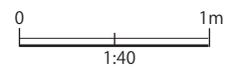
SE137 井戸跡

- | | |
|--------------------|--------------------|
| 1:10YR2/3 黒褐色粘質シルト | 2.5Y6/4 にぶい黄色粘質シルト |
| 2:5Y2/1 黒色粘質シルト | ブロックが混じる。 |
| 3:10YR5/6 黄褐色砂質シルト | 10YR2/3 黒褐色粘質シルト |
| 4:7.5Y2/1 黒色粘質シルト | ブロックが多く混じる。 |

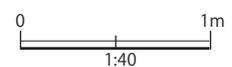
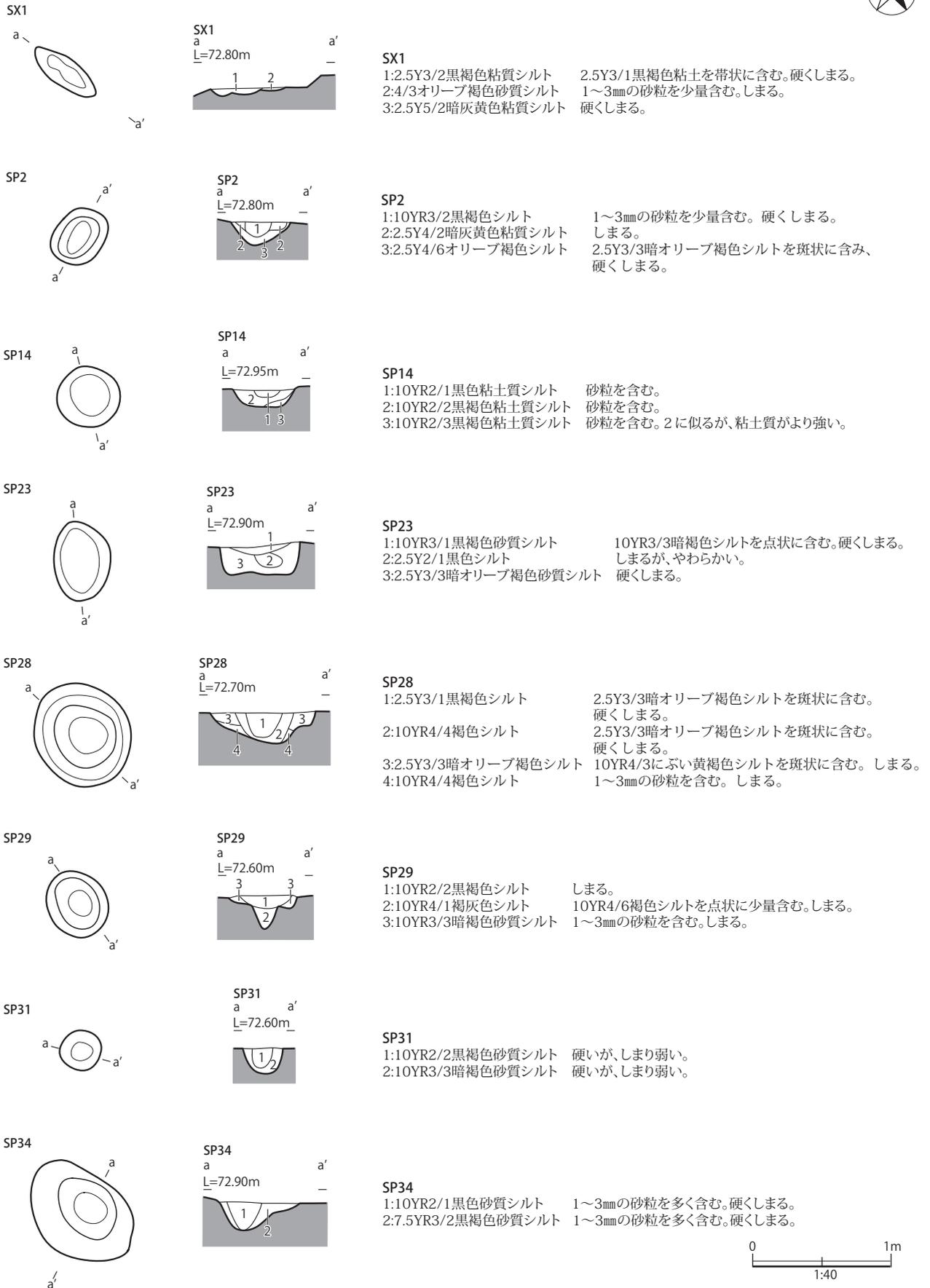


SK247 土坑

- | | |
|-----------------------|---------------------------------|
| 1:7.5YR2/2 黒褐色砂質シルト | 7.5YR2/1 黒色粘質シルトの小ブロックが少量混じる。 |
| 2:7.5YR4/3 褐色砂質シルト | 7.5YR2/2 黒褐色砂質シルトが混じる。 |
| 3:7.5YR3/2 黒褐色砂質シルト | 土器片を含む。 |
| 4:7.5YR2/3 黒褐色砂質シルト | 10YR4/4 褐色砂質シルトの小ブロックが混じる。 |
| 5:7.5YR3/2 黒褐色砂質シルト | 10YR5/6 黄褐色砂質シルトの小ブロックがわずかに混じる。 |
| 6:10YR4/4 にぶい黄褐色砂質シルト | 地山 |
| 7:10YR5/3 にぶい黄褐色砂質シルト | |



第27図 溝跡SD239、井戸跡SE137、土坑SK247



第28図 性格不明遺構 SX1、ピット SP2・14・23・28・29・31・34

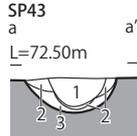
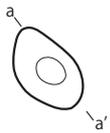


SP35



1:10YR2/3黒褐色シルト 硬くしまる。
2:10YR4/3にぶい黄褐色シルト 硬くしまる。

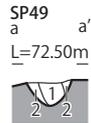
SP43



SP43

1:7.5YR3/2黒褐色シルト 10YR4/2灰黄褐色粘質シルトをまだら状に含む。
2:10YR4/2灰黄褐色粘質シルト 1~3mmの砂粒を少量に含む。硬くしまる。
3:2.5Y4/3オリーブ褐色砂質シルト 1~3mmの砂粒を含む。粘性強く、しまるが、やわらかい。

SP49



SP49

1:10YR3/1黒褐色シルト しまる。
2:10YR4/3にぶい黄褐色シルト しまるが、やわらかい。

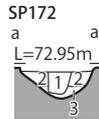
SP51



SP51

1:2.5Y3/1黒褐色シルト 粘性あり。硬くしまる。
2:10YR3/3暗褐色シルト 硬くしまる。

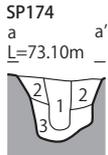
SP172



SP172

1:10YR2/2黒褐色砂質シルト 径5mm前後の小礫を含む。
2:10YR3/3暗褐色砂質シルト 径5mm前後の小礫を含む。
3:10YR5/3にぶい黄褐色粘土質シルト

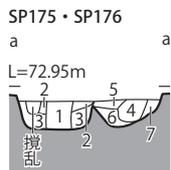
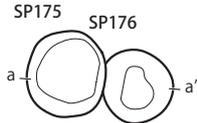
SP174



SP174

1:10YR2/2 黒褐色砂質シルト 径5mm前後の小礫を含む。
2:10YR3/3 暗褐色砂質シルト 径5mm前後の小礫を含む。
3:10YR3/3 暗褐色粘土質砂 わずかに砂粒を含む。

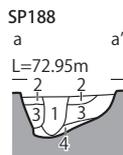
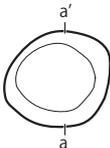
SP175・SP176



SP175・176

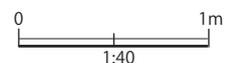
1:10YR3/2黒褐色砂質シルト 径10mm前後の小礫をわずかに含む (SP175)。
2:10YR3/3暗褐色砂質シルト 土質は1に似る。5mm程度の炭粒を含む (SP175)。
3:10YR5/2灰黄褐色粘土質シルト 砂粒を含む (SP175)。
4:10YR2/2黒褐色砂質シルト 10YR4/3にぶい黄褐色シルトが、50mm角のブロック状に混じる (SP176)。
5:2に同じ
6:10YR4/3にぶい黄褐色粘土質シルト 砂粒を多量に含む (SP176)。
7:10YR4/2灰黄褐色粘土質シルト 細砂粒を含む (SP176)。
攪乱:10YR4/2灰黄褐色粘土

SP188

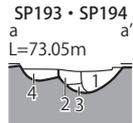
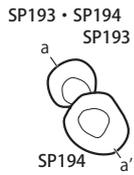


SP188

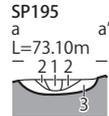
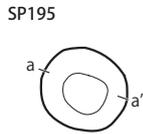
1:7.5YR1.7/1黒色粘土質シルト わずかに砂粒を含む。地山の土が10~50mm大のブロックで30%混じる。
2:7.5YR3/2黒褐色粘土質シルト 砂粒、5~10mm大の小礫を含む。
3:10YR3/3暗褐色砂質粘土 小礫を多量に含む。
4:10YR3/3暗褐色砂質粘土 3より小礫が少ない。



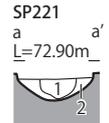
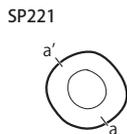
第29図 ピット SP35・43・49・51・172・174・175・176・188



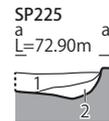
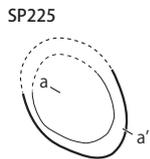
SP193・SP194
 1:10YR4/2灰黄褐色シルト(SP194)
 2:10YR3/3暗褐色シルト(SP194)
 3:10YR4/4褐色粘質シルト(SP194)
 4:10YR3/2黒褐色シルト(SP193)



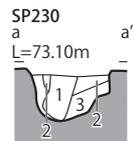
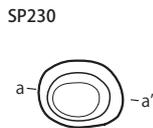
SP195
 1:7.5YR3/1黒褐色砂質シルト 7.5YR4/4褐色砂質シルトをブロック状に含む。粘る。
 2:10YR3/4暗褐色粘質シルト 砂を少量含む。
 3:10YR5/4にぶい黄褐色粘質シルト 強く粘る。



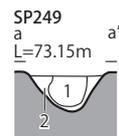
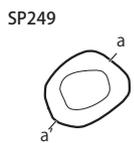
SP221
 1:10YR2/1黒色粘土 わずかに砂粒を含む。
 2:10YR3/2暗褐色砂質粘土 径5mm前後の小礫を含む。



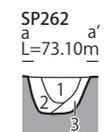
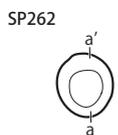
SP225
 1:7.5YR3/2黒褐色砂質粘土 炭粒を含む。
 2:7.5YR3/3暗褐色粗砂質粘土



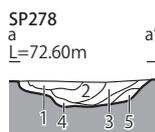
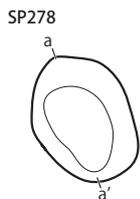
SP230
 1:10YR2/2黒褐色粘土質シルト 褐色のシルト塊を20mm大のブロック状に含む。
 2:7.5YR3/4暗褐色砂質粘土
 3:10YR3/3暗褐色砂質粘土 粗砂粒を多く含む。



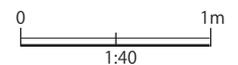
SP249
 1:7.5YR2/2黒褐色砂質シルト 7.5YR5/6明褐色シルトの小ブロックがわずかに混じる。粘る。
 2:10YR4/2灰黄褐色砂質シルト



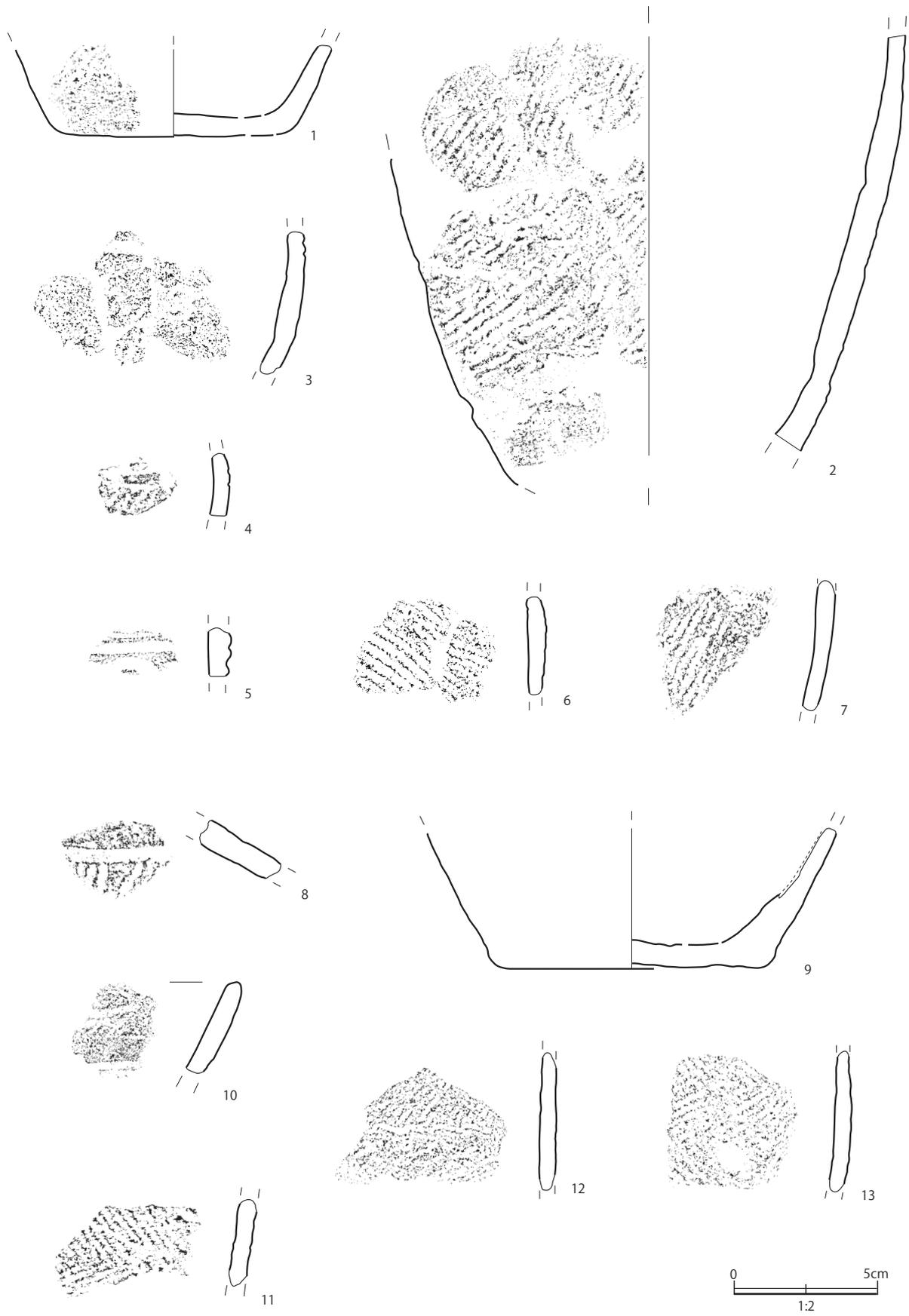
SP262
 1:10YR2/2黒褐色粘質シルト
 2:10YR4/4褐色砂質シルト
 3:10YR5/3にぶい黄褐色砂質シルト



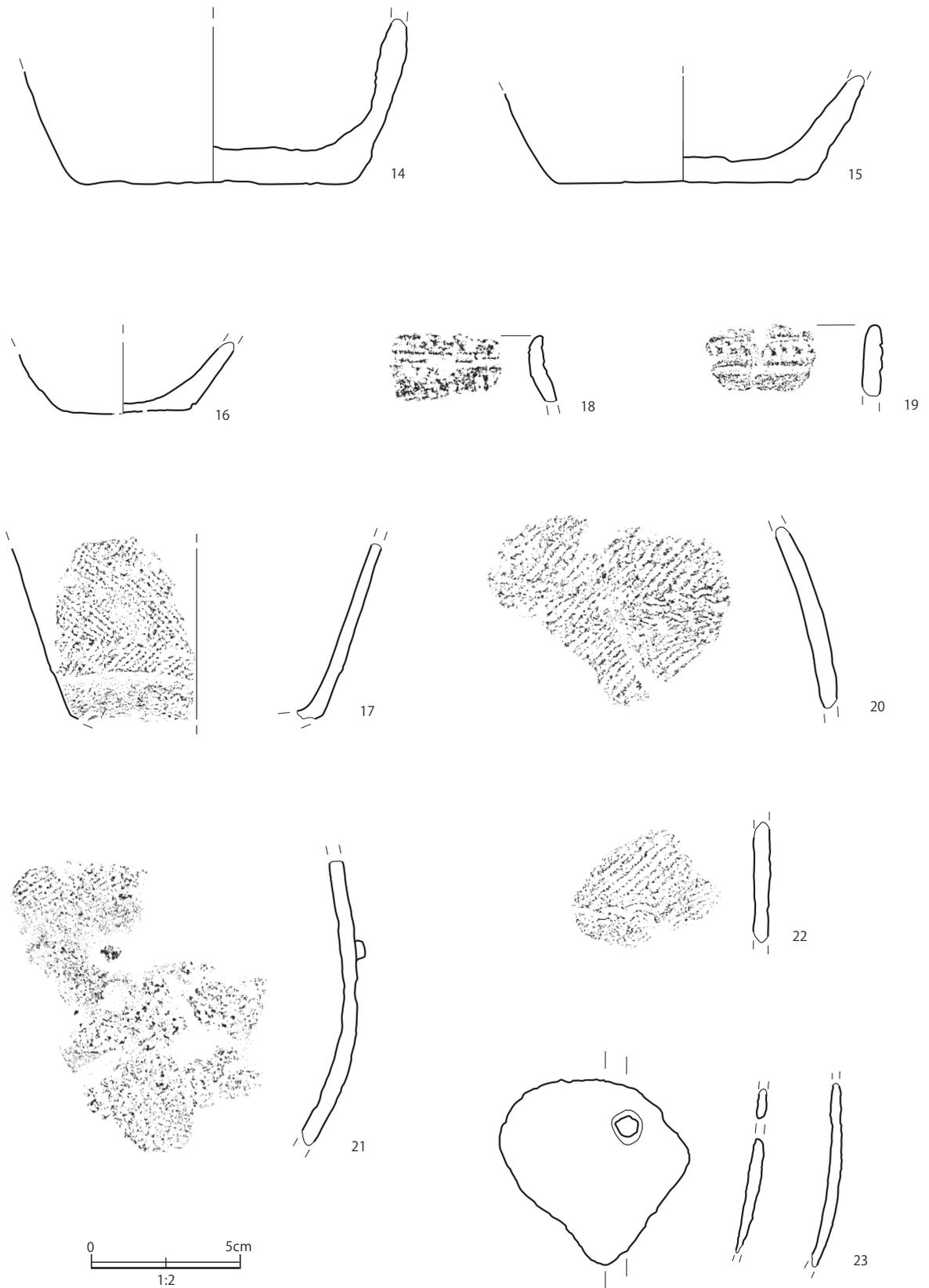
SP278
 1:10YR2/2黒褐色粘土 砂粒を含む。
 2:10YR2/2黒褐色粘土 小礫を多量に含む。
 3:10YR3/4暗褐色粘土質シルト 砂粒を含む。
 4:10YR3/4暗褐色粘土質砂 小礫を多量に含む。
 5:10YR2/3黒褐色粘土質砂 小礫を含む。5～10mm径の炭粒を多量に含む。



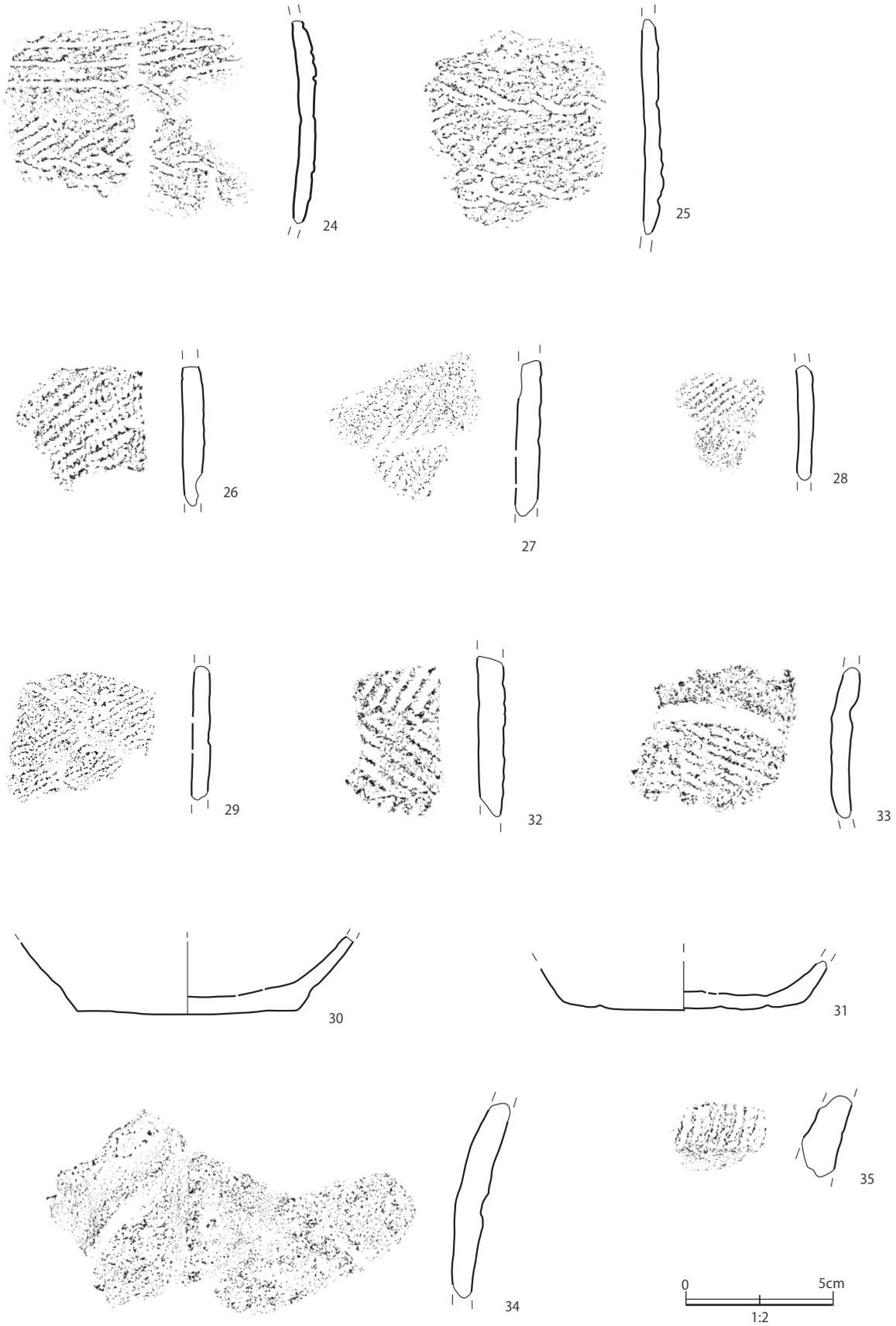
第30図 ピット SP193・194・195・221・225・230・249・262・278



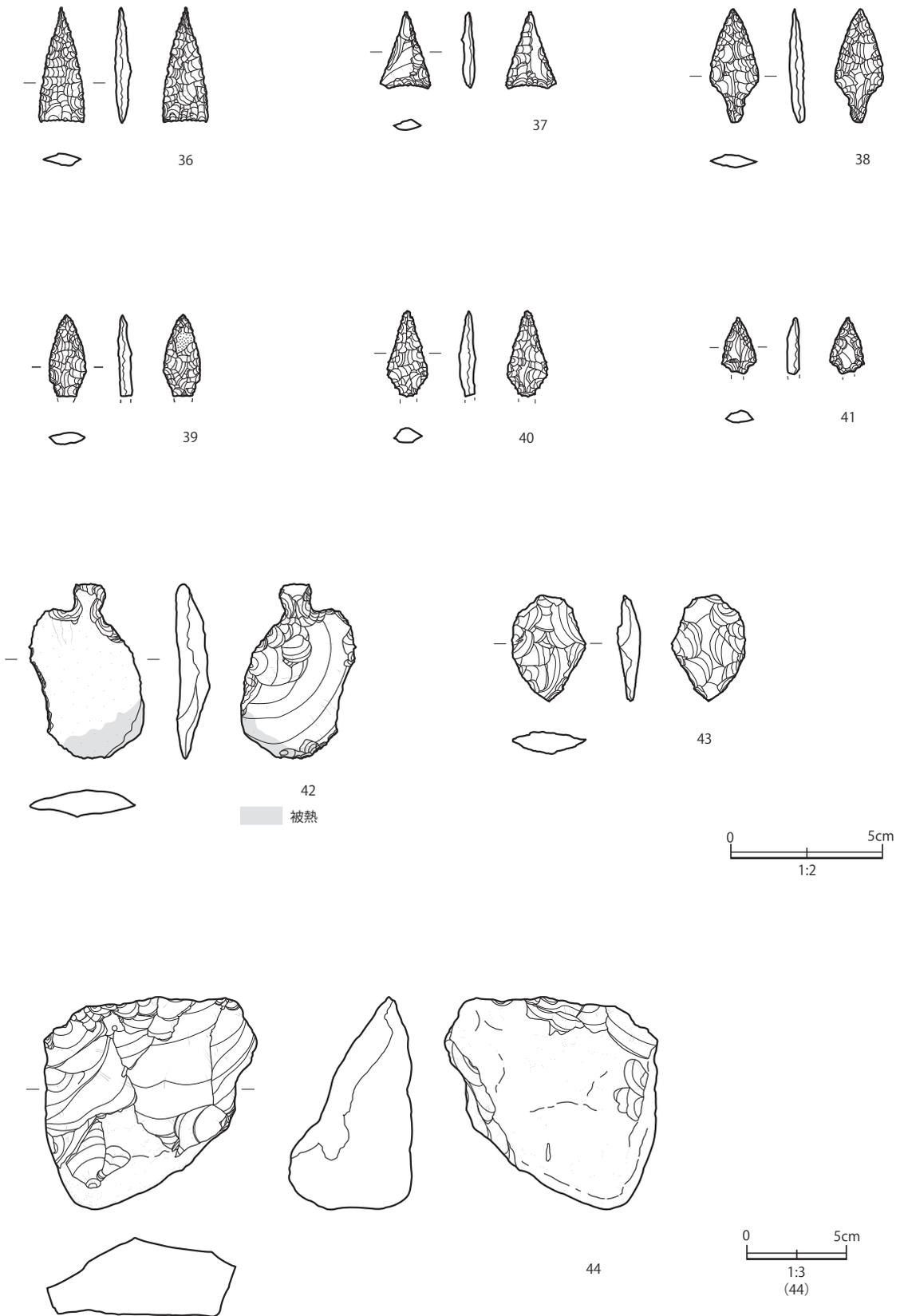
第31図 縄文土器(1)



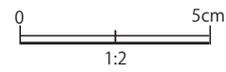
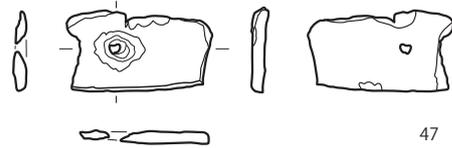
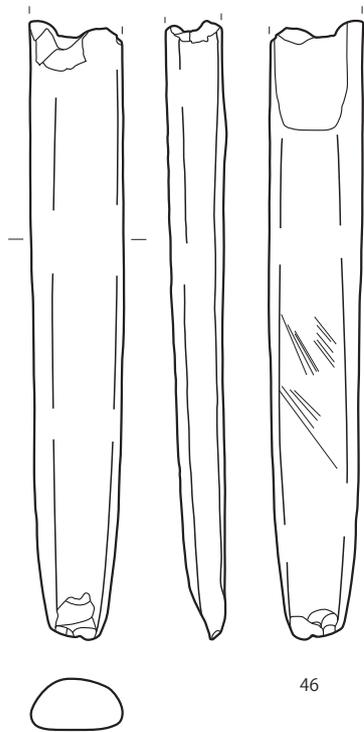
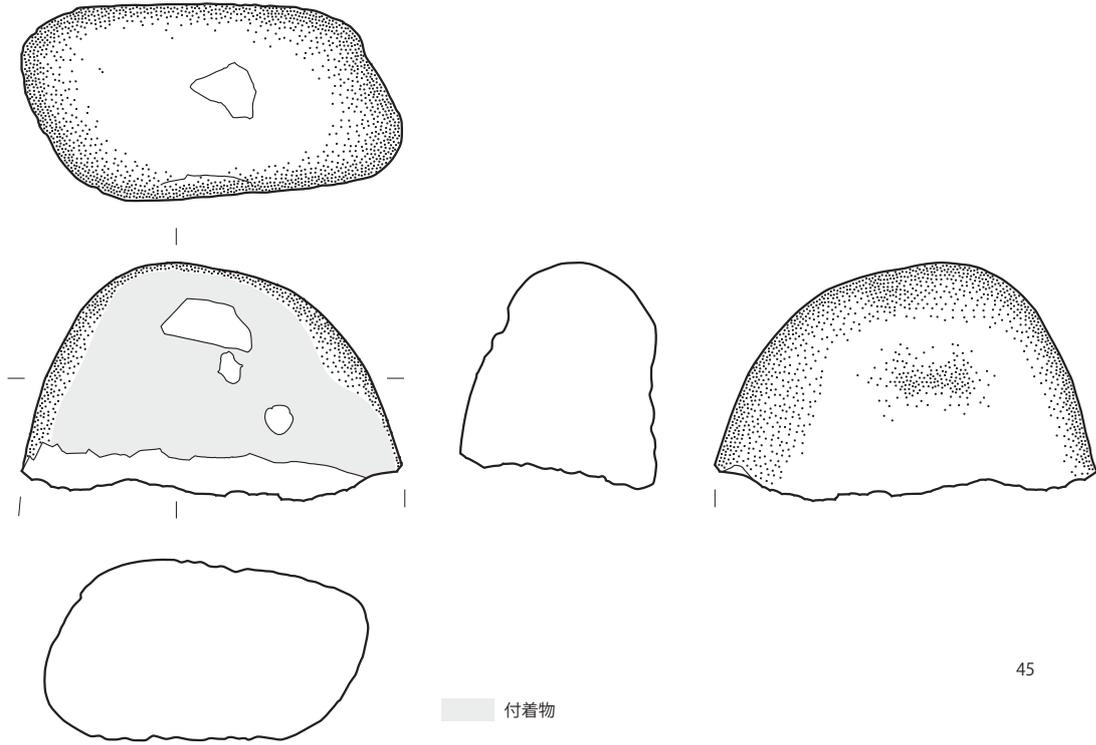
第32図 縄文土器(2)



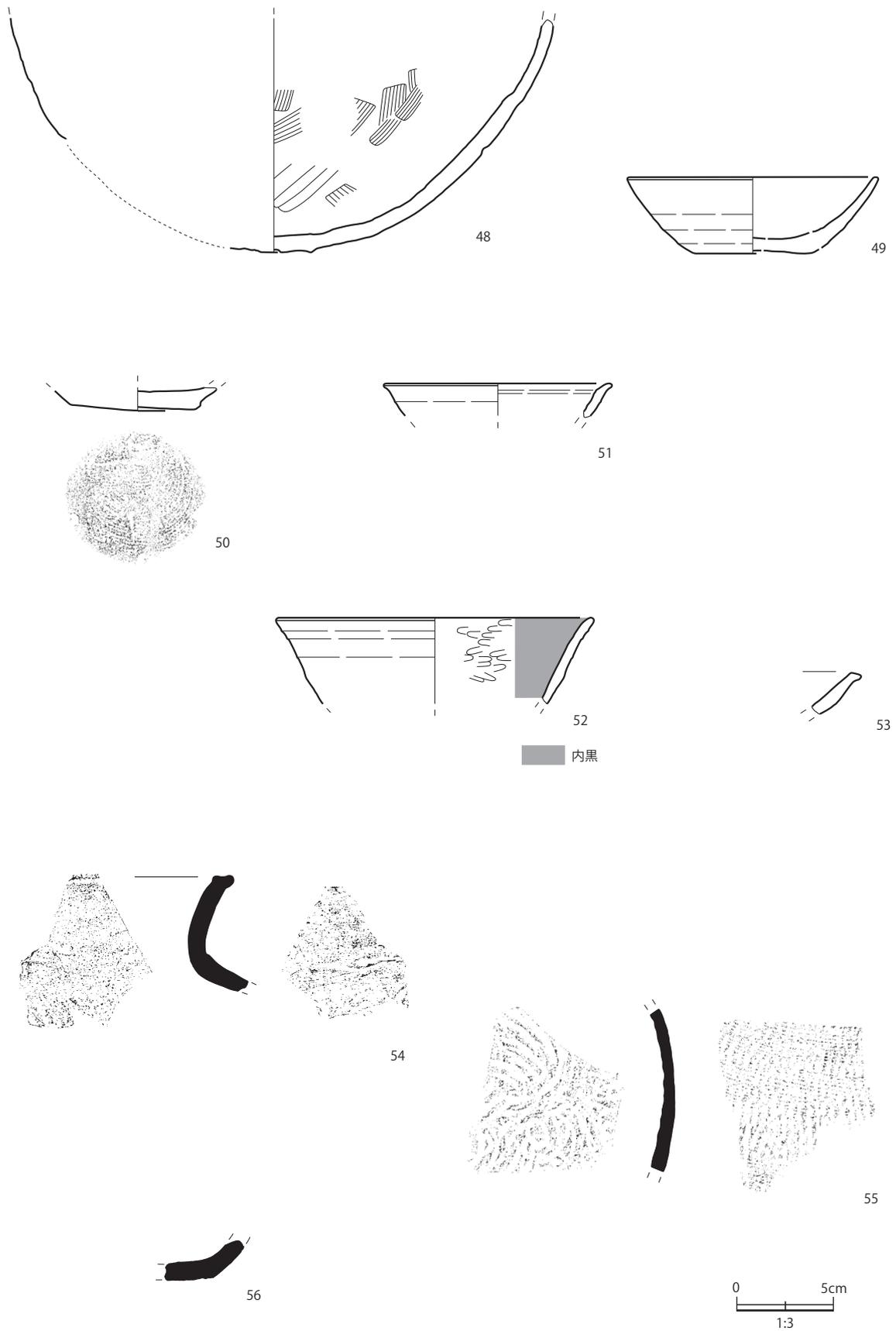
第33図 縄文土器(3)



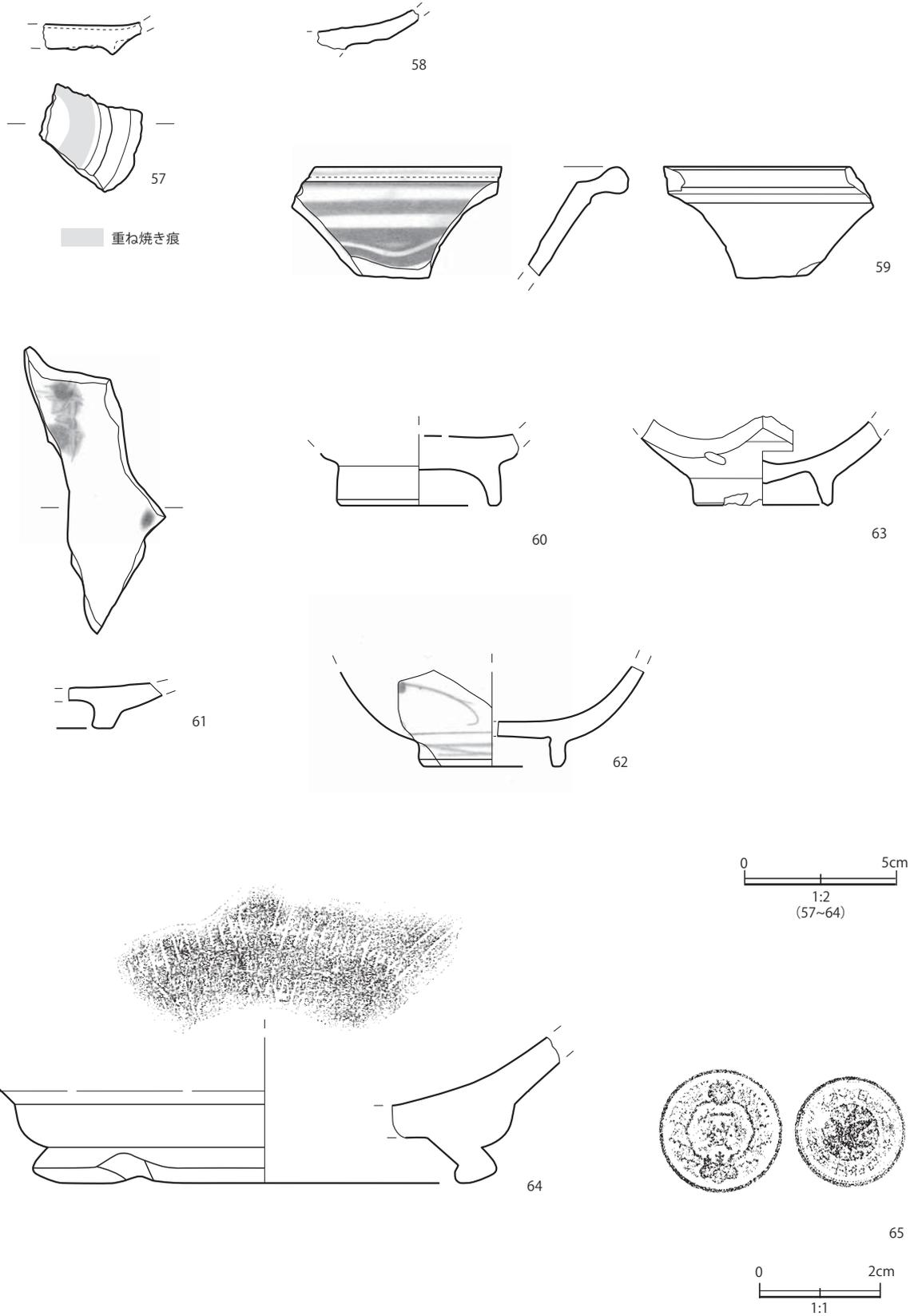
第34図 石器



第35図 石製品



第36図 土師器・須恵器



第37図 陶磁器・銭貨

V 今宿大谷地遺跡

1 遺跡の概要

A 概要

遺跡は大石田ゴルフクラブの東側、国道13号沿いの丘陵に位置する。標高は95～100mを測り、調査前の地目は畑地、荒蕪地であった。現場は5段を数える段丘状になっていたが、重機により表土を取り去ったところ、段丘は近現代の盛り土によるもので、遺跡が存在した当時は緩やかな斜面になっていた様子が確認できた。

遺構は、柱穴や土坑、地床炉が検出され、土器片の集中している様子等は観察できたものの、住居跡等は確認できなかった。遺物は、縄文時代中期の土器片が多数と、石鏃や石皿等の石器や石製品が出土している。

これらの遺物は遺跡近隣にあったとみられる生活の拠点であった場所からの流れ込み、あるいは持ち込まれたものと考えられる。

生活拠点の可能性が考えられる丘の上部は、残念ながら近現代の耕作地造成により大きく削平を受けており、今発掘に先立つ試掘調査でも遺構の存在は確認できなかった。

調査区は丘陵の中腹から裾に位置するが約15m南が谷間にあたり、周辺には沼地が存在していた。現在も谷底にあたる箇所には1条の水路があり、そこから沼地に水が流れている。降雨のあとは山筋を通り、多くの水が沼地へと流れ込む状態であった。

B 基本層序

調査区東西の壁を基本層序として断面図を作成した(第41・42図)。東西いずれも大きくIV層に分けられる。

I層：畑地を水平に形成するため盛り土を行った人為的な層。

II層：調査区北側の丘陵上部に堆積していた土が流れ込んだと考えられる層。

III層：黒ボク層であり、遺構検出面。

IV層：漸移層と地山層。

である。

I層は耕作に適する地形にするため行った近現代の盛り土である。西壁層序の2層と3層の間には重機のキャタピラーの痕跡が見られる。なお、地山や遺構検出面においてこの様な重機の痕跡やトラックのタイヤ痕跡が多く確認されている。堆積していた土は周辺に堆積していたものを掘削し、地形を段丘上に整えながら盛ったものと考えられる。なお、II層とした上部からの流れ込みの層は西側層序に関して、I層中に存在する。その層を挟んで上と下は若干の時期差があったと考えられる。盛り土による地形整形の流れが垣間見える。西壁層序では6、7層のII層対応を除いた1～18層までが該当し、東壁層序では1、2、5層が該当する。

II層は調査区北側の丘陵上部に堆積していた土が水などの影響により流されて堆積した層と考えられる。堆積した土質は砂で層としては砂とシルトが互層状になったものとマーブル状に土が混じり合い、沈殿し形成された状態のものがみられた。I層でも記載したがこの層の前後で時期差があったと考えられる。西壁層序では6、7層が該当し、東壁層序では3、4、5層が該当する。

III層はこの地域によく見られる、黒ボク層である。これ以下の層は一部削平を受けている可能性もあるが基本的に人為的な攪乱などを受けていない層である。なお、遺物を包含しているのもこの層である。遺構の検出はこの層で行った。遺物はこの層の下層では出土していない。また、この層もしくはその上層において地形改良の作業を始めたとみられ重機やトラックのタイヤ痕が多く確認された。さらにそれらの重機が動いた場所は踏み固められ遺構検出面においてそれらの影響を受けた土のしまりが違う場所が存在した。西壁層序では19層が該当し、東壁層序では6層が該当する。

IV層は黒ボク層と下層の地山である肘折パミスが混ざりあった漸移層と地山層である。この層での遺物の出土は確認されていない。西壁層序では20、21層が該当し、東壁層序では7、8層が該当する。

2 遺 構

検出された遺構の数は 21 基を数えるがその中の殆どは重機やトラックのキャタピラーの痕跡やタイヤの痕跡である。溝状であったため遺構として検出し、掘り下げる段階で性格を確認した。第 39～40 図に置いて攪乱やそういった痕跡が確認されたものには遺構番号を付していない。

以下には分層された遺構と遺物が出土した遺構について詳述していく。

柱 穴 (第 43 図)

SP2 のみ検出されている。SK 3 の西側、試掘調査で掘削されたトレンチ T 5 の中で検出された。長軸約 40 cm、短軸約 32 cm の楕円形で深さは検出面から約 24 cm を測る。遺物の出土はないため帰属年代を比定することは難しい。

土 坑 (第 43・44 図)

SK 3 と SK 8 が検出されている。

SK3 はグリッド 5405 - 1798 と 5405 - 1898 内に存在する。遺構の一部は試掘調査で行ったトレンチの T 5 にかかっている。T 5 により削られ全体の形状を把握することは出来ない。この遺構からは RP 1 が出土している。第 50 図 1～3 がこれにあたる。RP 1 は土圧によって潰された状態で検出された。

SK 8 はグリッド 5405 - 1799、5405 - 1899 内で検出された。こちらも試掘調査トレンチ T 9 にかかっている。但し、SK 3 ほど削平を受けてはおらず、遺構の残存状態も良い。長軸約 2 m 36 cm、短軸約 1 m 64 cm で東西に長い楕円形をしている。検出面から底面までの深さは約 22 cm を測る。この遺構から RP 2 と RP 3 が出土している。RP 2 が第 50 図 4、RP 3 が第 50 図 6 にあたる。SK 8 は 2 層に分層出来るがいずれの層からも炭化物を取得し放射性炭素年代測定にかけている。結果の詳細は VI 章に譲るとして測定年代は縄文時代中期を示している。出土遺物も縄文時代中期のものであるから遺構の埋没年代も同時期にあてて良いと思われる。

また、SK 3 出土の縄文土器も縄文時代中期のものと考えられ、遺構の埋没年代も同時期と判断できる。

地 床 炉 (第 44 図)

SK 8 のすぐ南で検出された。焼土の範囲は円形で中心

部は焼けておらず円形を呈している。焼土もしっかり焼けて固まったものではなく、焼けてはいるものの固まり具合はあまいものであった。

焼土中心部の焼けていない円形の部分の存在からこの部分に土器などを設置し周りに燃料材を置き煮炊きを行った痕と推測される。当該遺構内から出土した遺物はないため年代までは判断できない。第 47 図上では第 50 図 4 の破片が出土しているように見えるが SL19 が検出される前の段階で出土したものである。そのため、当該遺構に関係しているかの判断が難しい。

なお、この遺構周辺で第 55 図 45 の石皿、第 56 図 46 の焼けた礫、第 56 図 47 の礫（磨石（棒）？）が出土しているのは興味深い。

遺物出土状況 (第 45～49 図)

以下に遺構から出土した破片と距離的に離れたグリッドから出土した破片が接合した状況について記述する。また、第 50 図 1～3 の接合破片の出土状況も図面として掲載しておくことを明記する。

第 50 図 4 は SK 8 で RP 2 として出土しているがその他にグリッド 5405 - 1799、5406 - 1700、5406 - 1600 から破片が出土している。第 47 図のドットの状況から SK 8 を基準とし東側に広がっているのが認められる。この付近は等高線からもわかる通り北からの傾斜が若干緩む場所であり、遺構も集中してみられる。

このことから調査区北側の丘陵上部から廃棄された遺物がこの地点で傾斜が緩くなったため留まり、一部の遺物はその地に開放していた遺構に入り埋没したと考えられる。もしくは地床炉の存在からキャンプサイトとしてこの地を利用しており、その場で不要になった遺物を廃棄していったとも考えられる。

また、第 50 図 4 においてはさらに傾斜を下ったグリッド 5406 - 1600 でも接合破片が検出されている。この地点からは弥生時代のもと考えられる第 54 図 38 のアメリカ式石鏃が出土している。

それらの遺物出土地点は土のしまりも弱かった。東壁層序の 5 層において盛土層が確認されており、これらの遺物が出土した地点はその盛土がなされた箇所と考えられる。さらに第 50 図 4 の破片が出土していることからこの盛り土の一部は SK 8 近辺から掘削し盛ったものと考えることが出来る。

遺構と離れた盛土部分から接合破片が出土している状況は第 51 図 7 及び 8 にみられる。

遺構周辺から接合破片が出土しているのは第 50 図 5 といえる。

3 遺物

調査では縄文時代中期前葉と後期の土器が出土した。出土した土器で中期に属するもののほとんどが大木 7b 式期にまとまり、その前後の土器は見られない。また石器も数点出土している（第 50～56 図）。

A 遺構出土遺物

SK3（第 50 図）

SK3 からは縄文土器がまとまった状態で出土した。1～3 の 3 点は同一個体と考えられる。口縁部直下に 2 条の沈線を施し、その沈線間に部分的に連続刺突文を施している。地文として 1 原体の無節縄文が縦方向に施されている。短く外反する口縁から、頸部ですぼまり、胴部で膨らむ器形の深鉢で、中期前葉のものと考えられる。

SK8（第 50・51 図）

SK8 からは縄文時代中期前葉、大木 7b 式を中心とした遺物が出土した。4 は底部から口縁部にかけて直線的に外傾する深鉢である。口縁はゆるく波状になり、外面口唇部には粘土紐を貼り付け、厚みを作り出している。口縁直下に隆帯で狭い文様帯を作り、「X」字状の隆帯を貼り付け、LR の押圧縄文を横方向に 3 条から 5 条で施す。口縁部の文様帯下に交互刺突文を施し、胴部上半に隆帯と有節沈線で弧状・「く」字状・楕円状の文様帯を対称的に横方向の展開で描く。LR 原体による縄文を施文後、これらの文様を施文している。5 も 4 と同様の施文が施されており、4 よりもやや発達した波状口縁をもつ。4・5 は同一個体の可能性が考えられる。6 は頸部で外反し、口縁部が内湾するキャリパー型の深鉢である。口縁直下に山形の縄文が横位方向に押圧される。内面には丁寧なミガキ調整が施される。7・8・9 は同一個体と考えられる。口唇部を厚く作りだし、隆線で区画する。区画された口縁部には 2 条の LR 横位押圧縄文を平行に施す。区画隆線には部分で粘土紐を貼り付け山形状の突起を作りだし、胴部に下垂する貼付文となる（欠損しているため形状は不明）。それと相対するように口

縁部に「Y」字形貼付文を 2 対施す。体部には縦回転の LR 縄文が展開される。

SK8 からは縄文時代後期の土器が破片でわずかに出土した。10・11 は後期前半の深鉢の体部である。これらは同一個体と考えられ、地文を施したのち、縦位に沈線を施文している。地文は無節縄文か撚糸文かの判別はつかない。

次に粗製土器をあげる。12 は土器体部で、LR・S 字状結節の原体を縦方向に施す。内面にはミガキ調整が認められる。結節をもつ縄文を縦位に施文したものは、大木 7a 式または 7b 式に見られることから、中期前葉のものと考えられる。13 は口縁下部で、屈曲する頸部部分で割れている。LR 原体を縦方向に転がし施文する。14 は底部で、底部からやや内湾し直立に立ち上がるずん胴型の器形と考えられる。外面にはわずかに縄文が見られ、内面には基底部近くまでミガキ調整が施される。底部には網代痕が残るが、周縁部のみで確認できるため、製作段階で中央部に平坦な円状のものをおいて作られたと考えられる。中期前半のものと考えられる。15 も網代痕の残る底部である。

B 遺構外出土遺物

明確に遺構と判断される SK3・8 以外、特に流れ込みと考えられる遺物集中地点から出土した土器を中心にあげる（第 52・53 図）。中期前葉の遺物が多く、後期初頭の土器もわずかに出土している。

中期前葉の土器は、ほとんどが大木 7b 式のものである。16 は短く外反する口縁をもち、頸部がすぼまり胴部が球状に膨らむ器形の深鉢。体部には LR の縄文を縦方向に転がし、口縁に沿うように一部弧を描きながら押圧縄文を施す。突起のつく波状口縁で、突起頭頂部にも押圧縄文が施される。突起内面には「の」字状の貼付文が施される。17 も同様に口縁に沿うように押圧縄文が施される土器で、波状口縁で、口縁がゆるく「く」の字状に肥厚して外反し、頸部は無文帯となり、体部にはわずかに縦位の LR 縄文が確認できる。18・19・20 は同一個体である。口縁から体部にかけての破片で、口縁部に沿うように 2 条の押圧縄文が横位に施され、その下方に粘土紐の貼り付けによる隆帯と、その隆帯に沿う押圧縄文を組み合わせで施文している。21・22・23・24

は共に押圧縄文で文様を施している。21 は口縁に沿って横位に、その下に弧状に縄文を押圧している。22 も口縁に沿い横位、その下には楕円状に三重に縄文を押圧する。体部は無文である。23 は口縁が外反する器形で、口縁に沿って押圧縄文を施し、体部には LR 原体を縦方向に転がし施文している。24 は口縁部に 2 条の押圧縄文、「く」の字に屈曲した頸部直下に 1 条の押圧縄文が施されているが、内外面共に丁寧にミガキ調整がされているため、押圧縄文がつぶれている。体部は無文である。25 は深鉢の頸部で、粘土を弧状に貼付け隆帯を作り出し、それがはがれた跡が残る。その隆帯に沿って多条 LR 原体の縄文を押圧している。体部にはわずかだが羽状縄文を縦回転で施したことが確認できる。26 は口縁部分が膨らむ深鉢の頸部で、口縁部には曲線状に隆帯を貼付け、その両脇に沈線に沿わせ施文しているのがわずかにみとれる。頸部を無文帯とし、口縁部と体部には LR 原体で縄文を施す。27 は浅鉢の口縁部で、粘土紐の貼付けにより、楕円状の隆帯を施す。口縁から体部にかけて「く」の字状に屈曲し、体部は無文である。内面に丁寧にミガキ調整が見られる。

後期の土器は 2 点確認できた。28 は口唇部直下に隆帯を貼付け、連続刺突を施す。体部は撚糸による施文後に沈線で文様が施される。後期初頭の岩手県・宮城県北部にみられる門前式に併行する時期のものと考えられる。29 も同様の時期のものと考えられ、体部は沈線により曲線文が描かれ、磨消縄文が施される。沈線で区画された内部には無節の撚糸文が充填される。

次に粗製土器をあげる。30・31 は無文土器で、中期前葉のものと考えられる。30 は口縁部で輪積み痕が明瞭に残る。31 も輪積み痕が明瞭に残る底部に近い部分の体部である。32 は RL 原体を縦方向に転がし、内面は棒状工具でのナデ調整痕が残っている。28・29 に伴う時期の可能性が考えられる。

底部資料として 4 点を図化した。33 は底部よりやや内湾し、その後徐々に外反しながら直立するずん胴型の器形で、体部にわずかに縄文が残るが原体は不明である。底部には網代痕が見られるが、後からナデ調整が施されるため明瞭には残っていない。また底部の輪積み痕から、底部の厚みを増すために後から粘土を足していることが伺える。34 も同様に網代痕が確認できる底部であるが、

後からの調整により明瞭に残っていない。33・34 共に中期前半のものと考えられる。35 は深鉢または鉢の底部である。36 は器台の脚部で、円孔が開けられている。底部外面の粘土貼り付けが焼成時に剥離したものと考えられる。

C 石 器

今回の調査で出土した石器を第 54～56 図に掲載した。

石鏃は 2 点出土した。37 は基部が直線状となる平基無茎石鏃である。先端部と基部の両端が欠損している。38 は茎部の両端が方形に外に張り出す、アメリカ式石鏃で弥生時代のものである。先端がわずかに欠けている。

石筥は 39 の 1 点のみである。両側縁に粗く押圧剥離により刃部を作り出している。下部には明瞭な磨滅痕が認められ、全体に被熱している。

剥片として 40・41・42 の 3 点を図化した。いずれも二次加工痕は認められない。

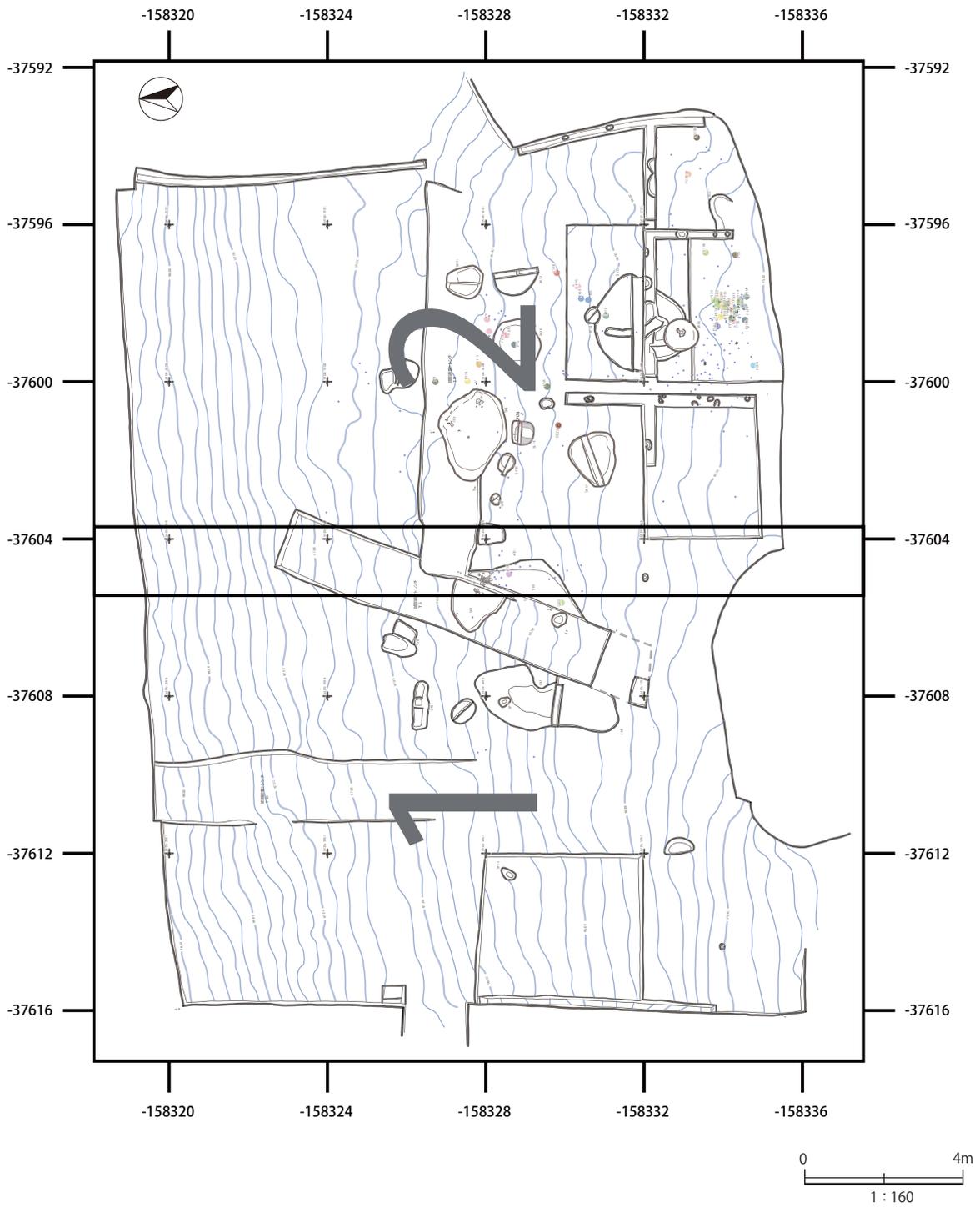
43 は楕円形で扁平な形状の凹石である。両面に明瞭な磨り痕が見られることより、磨石を転用したものと考えられる。44 は楕円形の磨石で、両面に明瞭な磨り痕をもつ。45 は扁平な大型礫を用いた不定型な石皿である。周囲に加工した痕跡はなく、皿状に加工した痕跡も見られないため、礫を元のまま使用していると思われる。3分の1が欠損しているが、片面に全面にわたり明瞭に磨り痕が残る。46・47 は礫で、46 は全体に被熱している。43～47 は共に安山岩である。

表9 今宿大谷地遺跡 縄文土器観察表

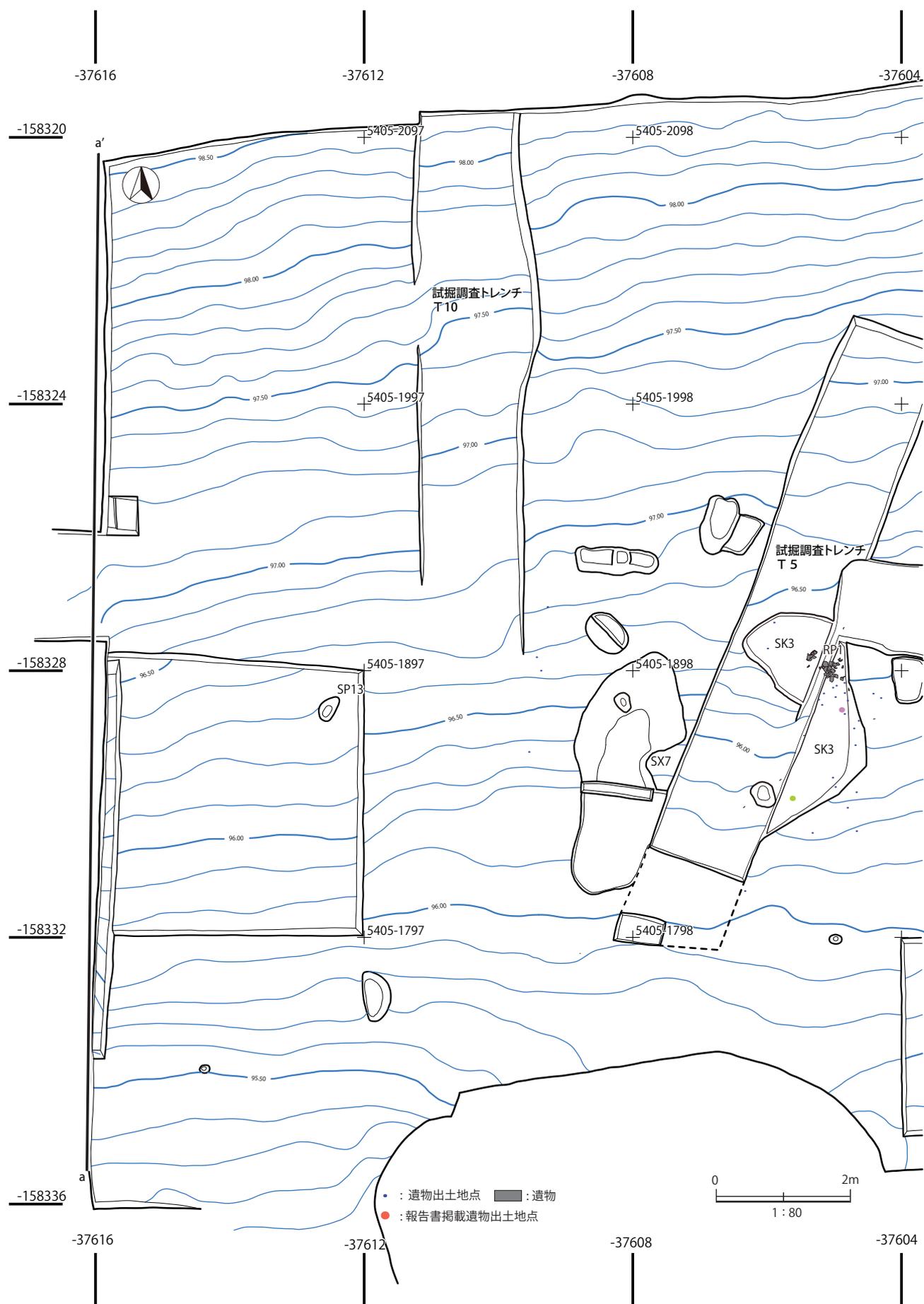
図版 番号	遺物 No	遺構 (出土地点)	器種	計測値 (mm)					施文	地文	備考
				口径	最大径	底径	器高	器厚			
	1	SK3 (P72)	深鉢	—	270	—	(250)	10	沈線文・連続刺突文	l (縦方向)	RP1
	2	SK3	深鉢	—	—	—	(58.5)	9	沈線文	l (縦方向)	RP1
	3	SK3	深鉢	—	(165)	132	(90)	10	—	l (縦方向)	RP1
50	4	SK8 (P9,39,99,106, 108,127,170)	深鉢	(350)	—	—	(224)	9	押圧縄文 (LR)・沈線区画文・交 互刺突文	LR	RP2
	5	SK8 (P102)	深鉢	—	—	—	(61)	9.5	押圧縄文 (LR)・沈線区画文・交 互刺突文	LR	—
	6	SK8 (P12,144,147, 150,175,183, 198)	深鉢	(154)	(190)	—	(81.5)	9	連続山形押圧縄文 (RL)	RL (縦方向)	RP3
	7	SK8 (P141,145,177)	深鉢	(280)	—	—	(64)	11	隆帯貼付・横位押圧縄文 (LR)	LR (縦方向)	—
51	9	5406-1600	深鉢	—	(160)	—	(137)	9	—	LR (縦方向)	—
	10	SK8	深鉢	—	—	—	—	7	沈線文 (縦位)	無節縄文または撚糸文	—
	11	SK8	深鉢	—	—	—	—	7	沈線文 (縦位)	無節縄文または撚糸文	—
	12	SK8	深鉢	—	(120)	—	(109)	10	—	LR・S字状結節 (縦方向)	—
	13	SK8	深鉢	—	—	—	—	7	—	LR (縦方向)	—
	14	SK8	深鉢	—	(182)	91	(56)	7.5	—	不明	底部網代痕
	15	SK8	深鉢	—	—	—	(20)	10	—	—	底部網代痕
	16	5406-1700	深鉢	—	—	—	(63)	13	押圧縄文 (LR)・貼付文 (波頂部)	LR (縦方向)	—
	17	5406-1700	深鉢	—	—	—	(30)	10	押圧縄文 (LR)	LR (縦方向)	—
	18	5406-1600	深鉢	(184)	—	—	(37)	6.5	隆帯貼付・押圧縄文 (LR)	—	—
	19	5406-1600	深鉢	—	—	—	(50)	7	隆帯貼付・押圧縄文 (LR)	—	—
	20	5406-1600	深鉢	—	—	—	(40)	7	隆帯貼付・押圧縄文 (LR)	—	—
	21	5406-1600	浅鉢	—	—	—	(45)	7	押圧縄文 (横位・弧状:RL)	—	—
	22	5406-1600	不明	—	—	—	(46.5)	7	楕円状押圧縄文 (l:無節)	—	—
52	23	試掘調査トレンチ T 9	深鉢	—	—	—	—	9	横位押圧縄文 (LR)	LR (縦方向)	—
	24	5406-1601	浅鉢	—	—	—	(44.4)	8	横位押圧縄文 (LR)	無文	—
	25	5406-1600	深鉢	—	—	—	—	7.5	隆帯貼付・押圧縄文 (LR)	r・l (羽状:無節)	—
	26	試掘調査トレンチ T 9	深鉢	—	—	—	—	9.5	曲線状隆沈線文	LR (縦方向)	—
	27	試掘調査トレンチ T 9	浅鉢	—	—	—	(33)	7.5	楕円状隆帯貼付	無文	—
	28	表土	深鉢	—	—	—	(36)	7.5	隆帯貼付・連続刺突文・曲線状沈 線文	r (撚糸)	—
	29	表土	深鉢	—	—	—	—	6.5	沈線文・磨消縄文	r (撚糸)	—
	30	5405-1799	浅鉢	—	—	—	(36)	7	—	無文	—
	31	5405-1698	深鉢	—	(196)	—	(76)	6.5	—	無文	—
53	32	SX5	深鉢	—	—	—	—	6	—	r (縦方向)	棒状工具でのナ デ調整 (内面)
	33	5406-1600	深鉢	—	—	146	(71.5)	7.5	—	—	底部網代痕
	34	SK15	深鉢	—	—	—	(16)	8	—	—	底部網代痕
	35	5405-1799	鉢か?	—	(82)	76	(11)	10	—	—	—
	36	5405-1698	器台	—	—	—	(38)	9	—	—	脚部に円孔が開 けられている

表 10 今宿大谷地遺跡 石器・石製品観察表

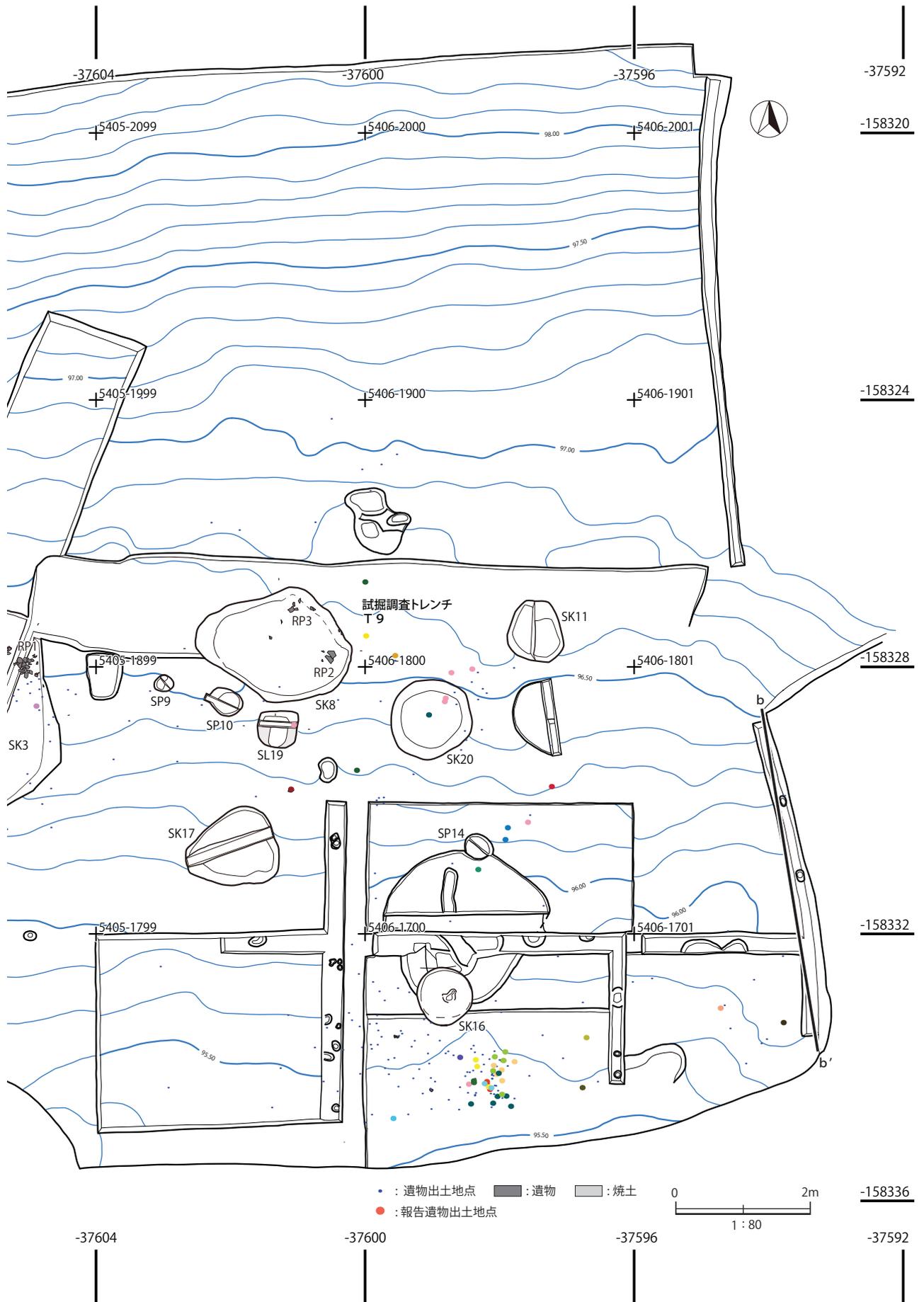
図版 番号	遺物 No	遺構 (出土地点)	種別	材質	計測値 (mm)			重量 (g)	備考
					長	幅	厚		
	37	5406-1600	石鏃	珪質頁岩	(26)	(14)	4	1.3	基部と両端が欠損
	38	5406-1601	石鏃	珪質頁岩	27	13	4	0.8	アメリカ式石鏃
54	39	(Q25)	石篋	頁岩	72	26	16	29.3	—
	40	X-O	剥片	珪質頁岩	50	38	10	10.4	—
	41	5405-1799	剥片	珪質頁岩	51	47	6.5	8.5	—
	42	5406-1700	剥片	珪質頁岩	57	44	11	18.6	—
	43	5406-1800 (Q115)	凹石	安山岩	122	90	56	850	磨石の転用
55	44	試掘調査トレンチ T 9	磨石	安山岩	119	93	52	820	—
	45	5406-1800 (Q221)	石皿	安山岩	(195)	235	65	3760	三分の一が欠損
	46	5405-1799 (Q222)	礫	安山岩	(78)	(66)	55	394	全体が被熱
56	47	試掘調査トレンチ T 9	礫	安山岩	(172.5)	(82.5)	65	1370	—



第 38 図 遺構配置図の割付

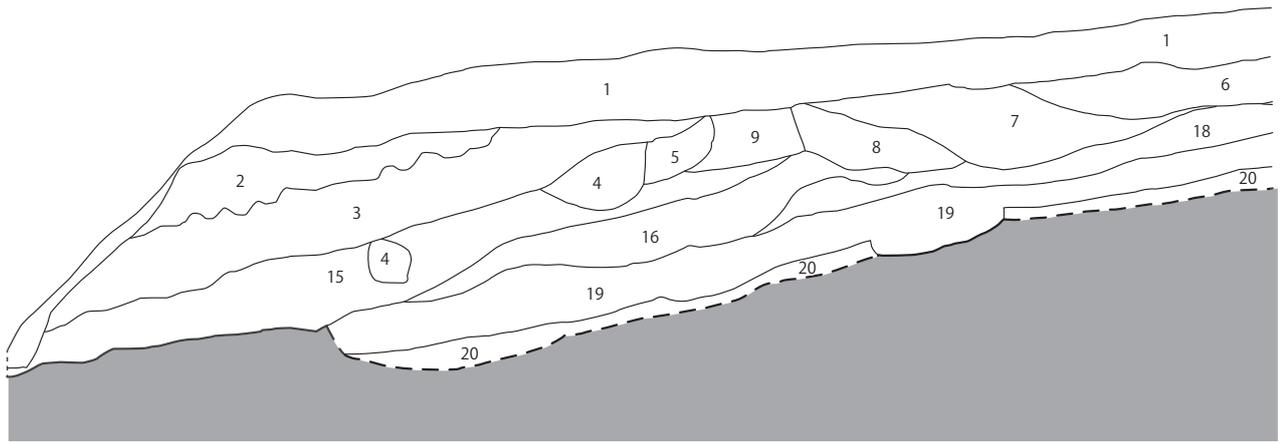


第 39 図 遺構配置図 (1)

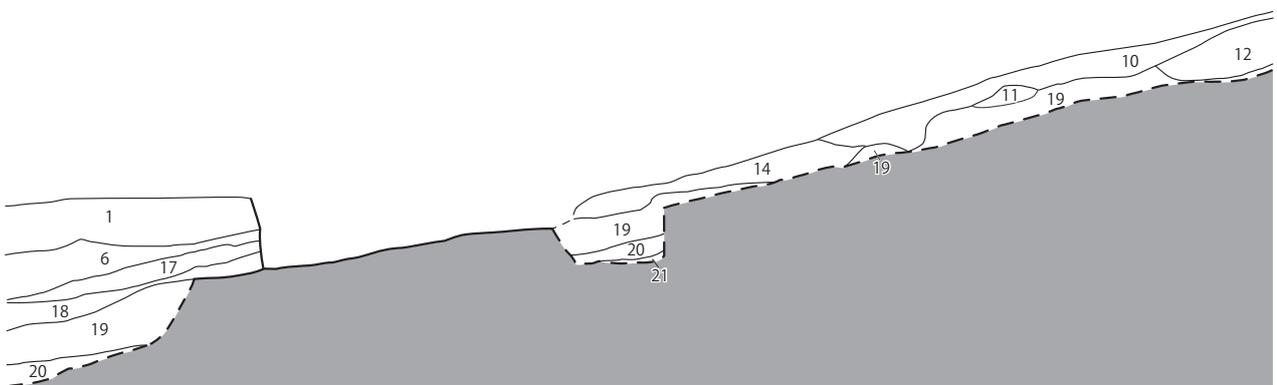


第40図 遺構配置図(2)

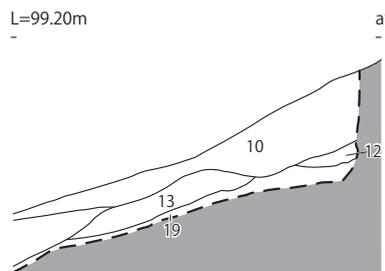
西壁層序
a
L=99.20m



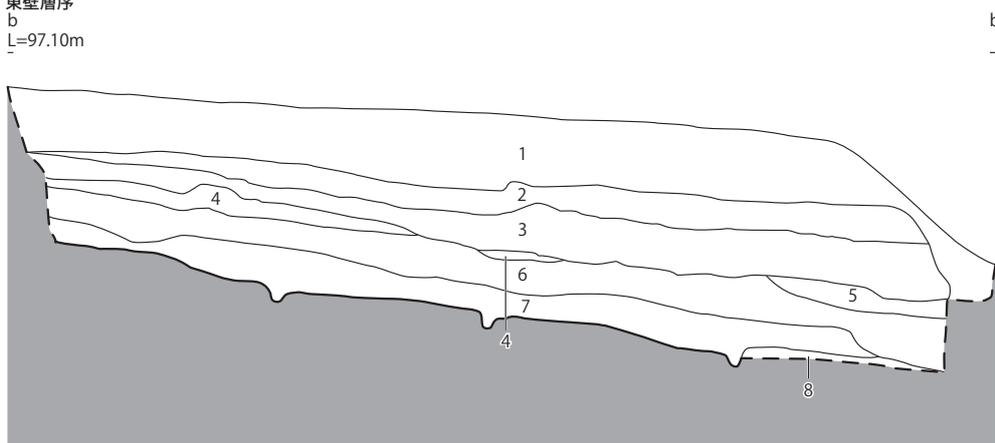
L=99.20m



第41図 調査区西壁断面(1)



東壁層序
b
L=97.10m



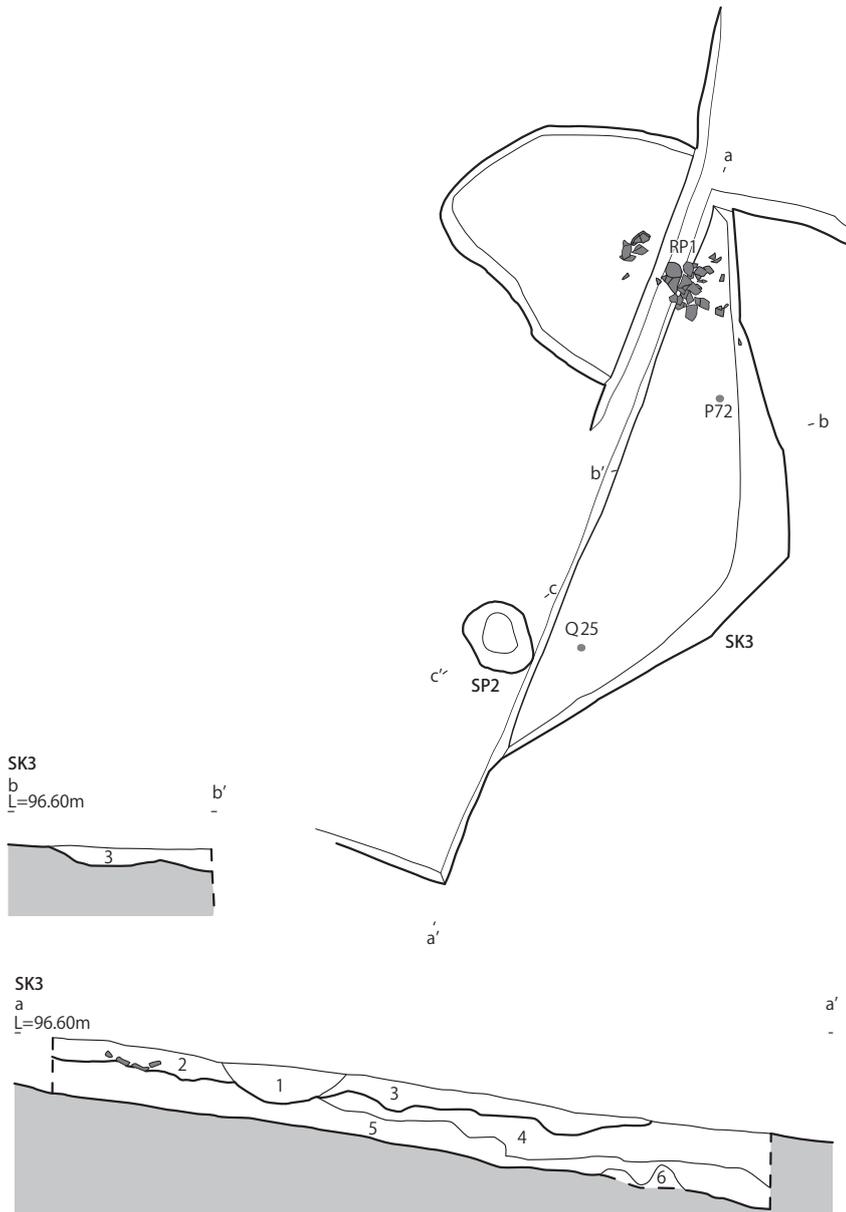
今宿大谷地遺跡西壁層序 a-a'

- | | |
|---------------------|--|
| 1:10YR2/2 黒褐色シルト | 植物根と粗砂を多く含む。(表土) |
| 2:10YR4/3 にぶい黄褐色シルト | 10YR2/2 黒褐色シルトを含み、植物根を含む。(盛土整形) |
| 3:10YR2/1 黒色シルト | 10YR4/3 にぶい黄褐色シルトと 10YR6/6 明黄褐色シルトをブロック状に含む。(盛土整形) |
| 4:木(腐食した物) | 10YR2/3 黒褐色シルトを周りに含む。 |
| 5:10YR3/3 暗褐色シルト | 10YR2/3 黒褐色シルトを含み、植物根を少量含む。 |
| 6:10YR3/3 暗褐色シルト | 10YR3/3 暗褐色砂との互層 10YR3/3 暗褐色シルトには 10YR2/2 黒褐色シルトを含む。
(砂が平行に綺麗に堆積していることから上部より流れてきたと考えられる。) |
| 7:10YR3/3 暗褐色シルト | 10YR2/2 黒褐色シルトをマーブル状に含む。(水性堆積) |
| 8:10YR2/2 黒褐色シルト | 10YR3/3 暗褐色シルトを少し含む。未分解の植物質を含む。 |
| 9:10YR2/1 黒色シルト | 10YR3/2 黒褐色シルトを僅かに含む。 |
| 10:10YR2/2 黒褐色シルト | 植物根を多量に含む。(表土) |
| 11:10YR2/2 黒褐色シルト | 10YR2/1 黒色シルトを含み、植物根を多量に含む。(カクラン) |
| 12:10YR3/2 黒褐色シルト | 10YR2/2 黒褐色シルトを含む。炭化物を僅かに含む。(しまり強) |
| 13:10YR2/2 黒褐色シルト | 10YR3/2 黒褐色シルトを僅かに含む、植物根を少し含む。 |
| 14:10YR2/2 黒褐色シルト | 10YR6/6 明黄褐色シルトをブロック状に少量含む。 |
| 15:10YR2/3 黒褐色シルト | 10YR3/3 暗褐色シルトを含み、10YR2/1 黒色シルトを少量含む。 |
| 16:10YR2/2 黒褐色シルト | 10YR3/3 暗褐色シルトを斑状に含む。未分解の植物質を含む。 |
| 17:10YR2/2 黒褐色シルト | 10YR3/3 暗褐色シルトを斑状に少量含む。 |
| 18:10YR2/2 黒褐色シルト | 10YR2/1 黒色シルトを斑状に含む。植物根を多量に含む。 |
| 19:10YR2/1 黒色シルト | 10YR3/2 黒褐色シルトを僅かに含む。未分解の植物質を含む。(検出面)→遺物出土層 |
| 20:10YR2/1 黒色シルト | 10YR2/2 黒褐色シルトと 10YR6/6 明黄褐色粗砂(地山由来)を斑状に含む。(漸移層) |
| 21:10YR6/6 明黄褐色粗砂 | (地山に肘折パミス) |

今宿大谷地遺跡東壁層序 b-b'

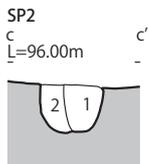
- | | |
|------------------|--|
| 1:10YR2/2 黒褐色シルト | 植物根と粗砂を多く含む。(表土) |
| 2:10YR2/1 黒色シルト | 10YR4/3 にぶい黄褐色シルトと 10YR6/6 明黄褐色シルトをブロック状に含む。(盛土整形) |
| 3:10YR3/3 暗褐色シルト | 10YR3/3 暗褐色砂との互層 10YR3/3 暗褐色シルトには 10YR2/2 黒褐色シルトを含む。
(砂が平行に綺麗に堆積している事から上部より流れてきたと考えられる。) 上層に 10YR3/2 火山灰を層状に含む。
(西壁 18 に近似。) |
| 4:10YR2/3 黒褐色シルト | 10YR2/3 黒褐色シルトを僅かに含む。植物根を含む。しまり弱。(盛土層) |
| 5:10YR2/1 黒色シルト | 10YR3/2 黒褐色シルトを僅かに含む。未分解の植物質を含む。(検出面)→遺物出土層 |
| 6:10YR2/1 黒色シルト | 10YR2/2 黒褐色シルトと 10YR6/6 明黄褐色粗砂(地山由来)を斑状に含む。(漸移層) |
| 7:10YR2/1 黒色シルト | (地山に肘折パミス) |
| 8:10YR6/6 明黄褐色粗砂 | |

第 42 図 調査区西壁断面(2)、調査区東壁断面



土坑 SK3 a-a', b-b'

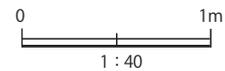
- | | |
|-------------------|---|
| 1:10YR2/1 黒色シルト | 10YR3/2 黒褐色シルトと 10YR1.7/1 黒色シルトと粗砂を含む (SK3 覆土)。 |
| 2:10YR1.7/1 黒色シルト | 10YR3/2 黒褐色シルトと粗砂と土器片を含む (SK3 覆土)。 |
| 3:10YR3/2 黒褐色シルト | 10YR2/2 黒褐色シルトと粗砂を含む (SK3 覆土)。 |
| 4:10YR2/1 黒色シルト | 粗砂を含む (検出面)。 |
| 5:10YR2/3 黒褐色シルト | 10YR2/1 黒色シルトを斑状に含む (漸移層)。 |
| 6:10YR4/4 褐色シルト | (地山: 肘折パミス) |



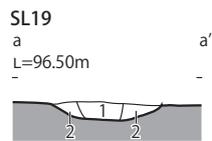
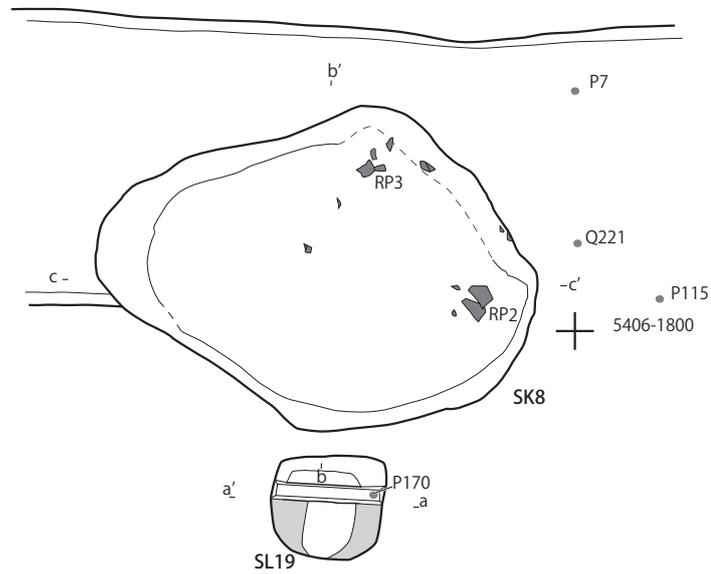
柱穴 SP2

- | | |
|-----------------|---|
| 1:10YR2/1 黒色シルト | 10YR3/4 暗褐色砂を斑に含む。しまる。小礫を少量含む。 |
| 2:10YR2/1 黒色シルト | 10YR3/4 暗褐色砂の混合土。10YR5/6 黄褐色砂 (地山) を少量含む。しまる。 |

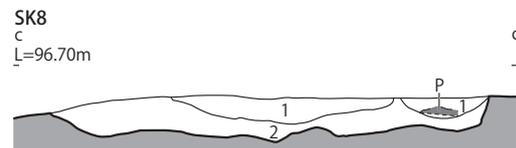
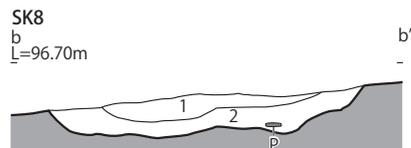
●: 遺物出土地点 ■: 遺物



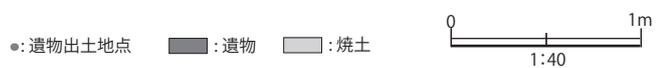
第 43 図 柱穴 SP 2、土坑 SK 3



地床炉 SL19
 1:10YR2/1 黒色シルト 7.5YR5/6 明褐色焼土ブロックを少量含む。炭化物を僅かに含む。
 2:10YR2/3 黒褐色焼土 7.5YR5/6 明褐色焼土を含む(しまりは弱い。)



土坑 SK8 b-b', c-c'
 1:10YR1.7/1 黒色シルト 10YR3/2 黒褐色シルトを含み、炭化物を僅かに含む。粗砂を多く含む。
 2:10YR3/2 黒褐色シルト 10YR2/1 黒色シルトを含み、植物の根を含む。粗砂を多く含む。



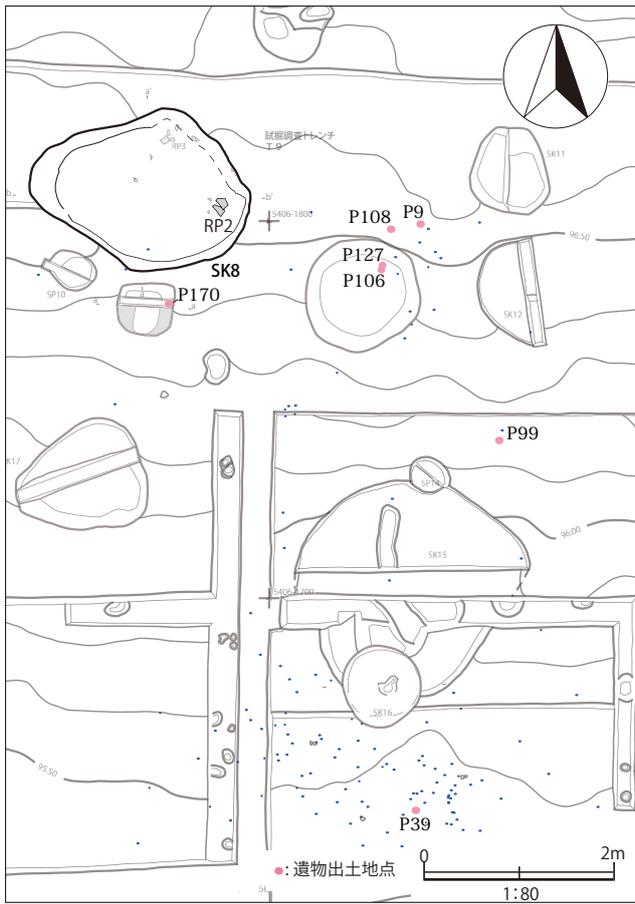
第44図 土坑 SK 8、地床炉 SL19



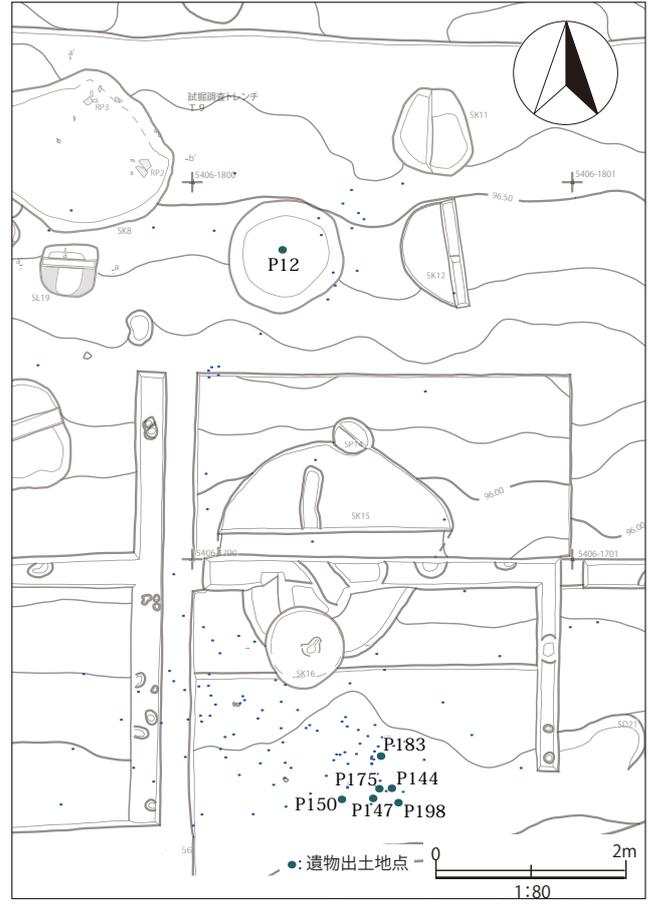
第45図 第50図1・2・3接合遺物出土状況



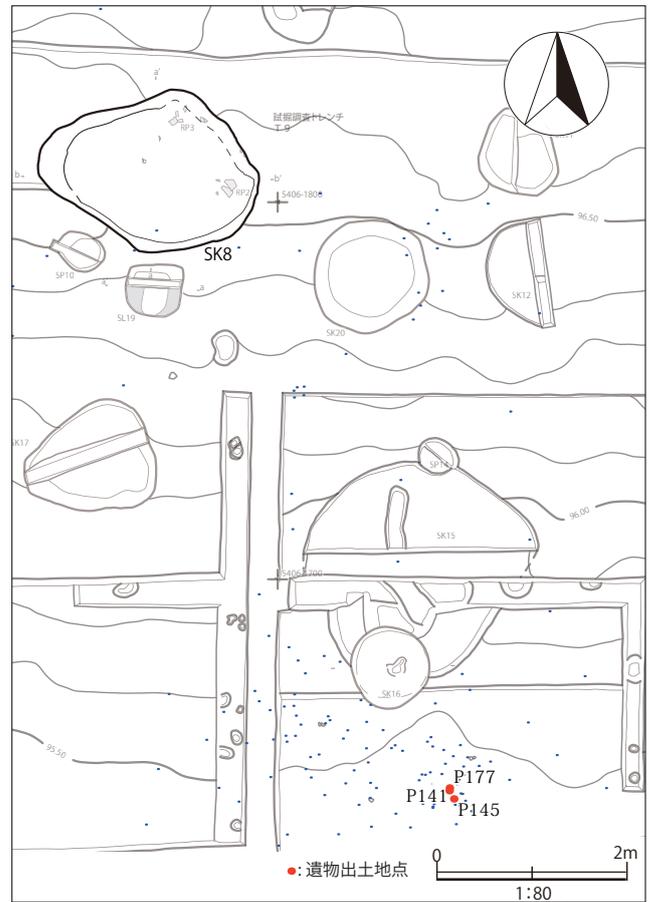
第46図 第50図5接合遺物出土状況



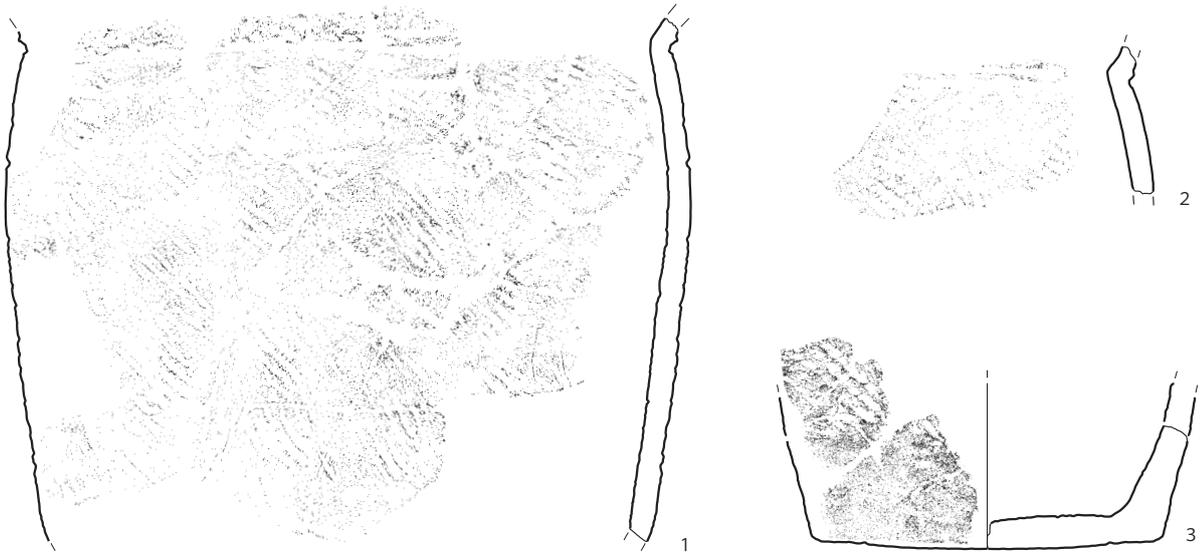
第47図 第50図4 接合遺物出土状況



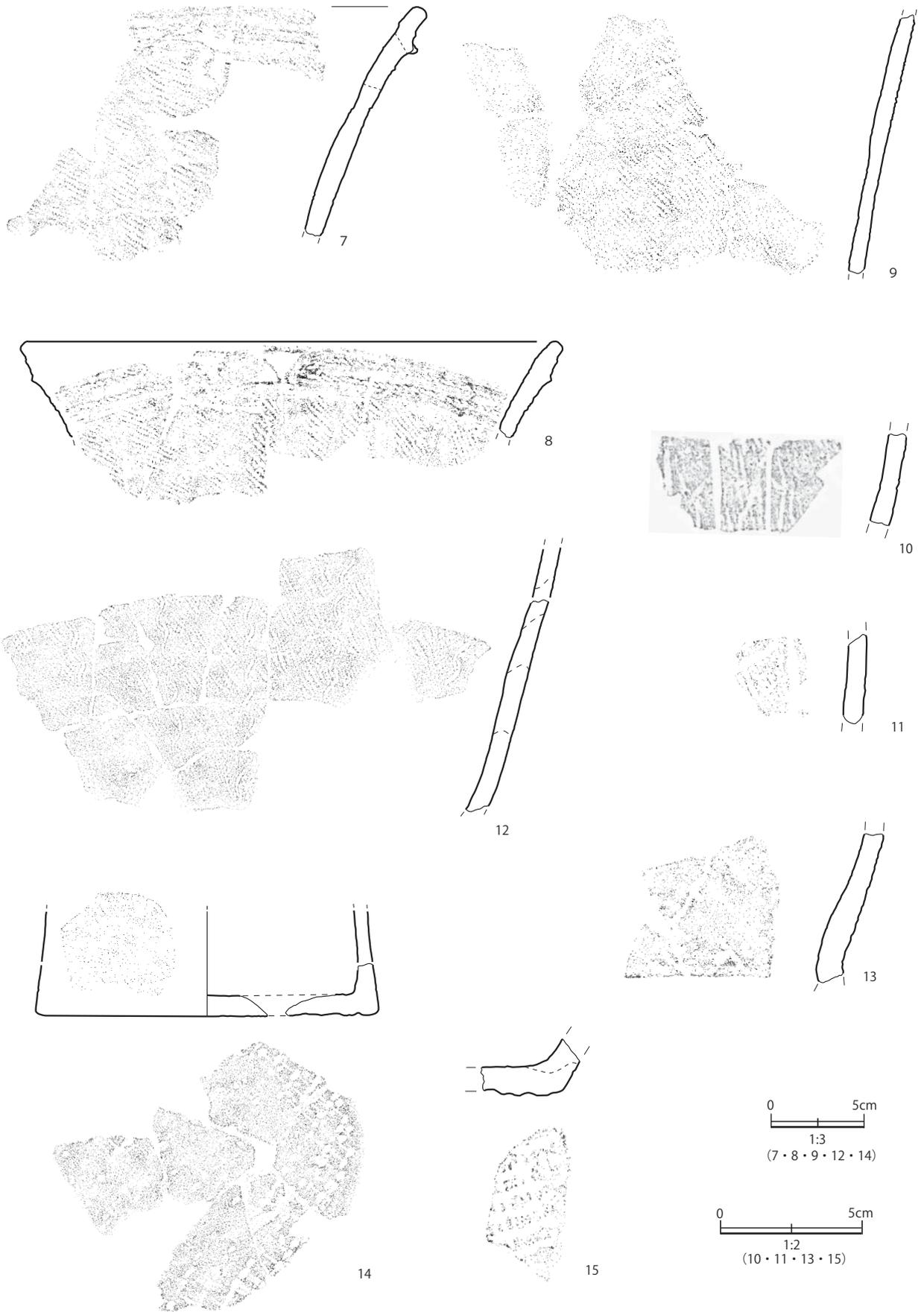
第48図 第51図7 接合遺物出土状況



第49図 第51図8 接合遺物出土状況



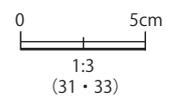
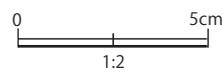
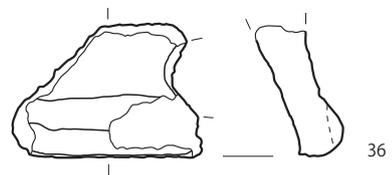
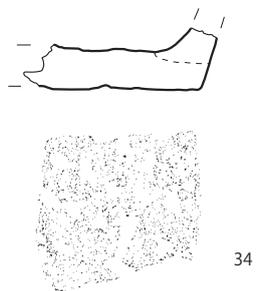
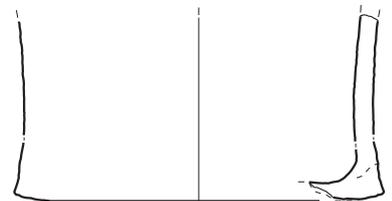
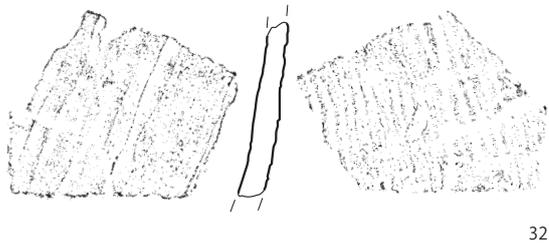
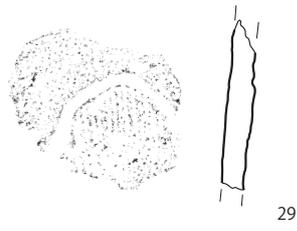
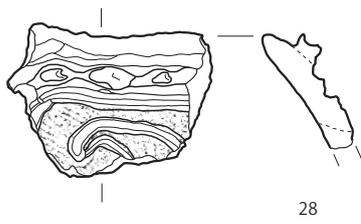
第50図 縄文土器(1)



第51図 縄文土器(2)



第 52 図 縄文土器 (3)



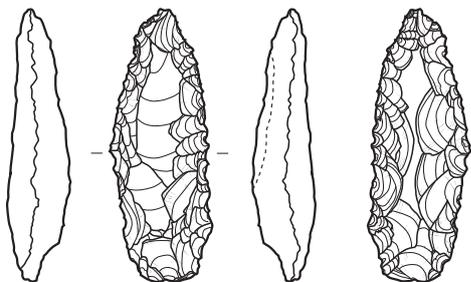
第53図 縄文土器(4)



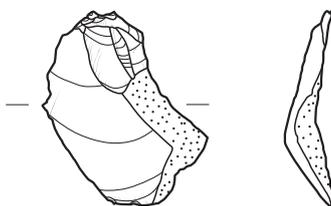
37



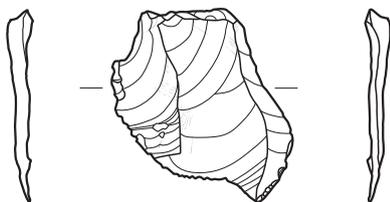
38



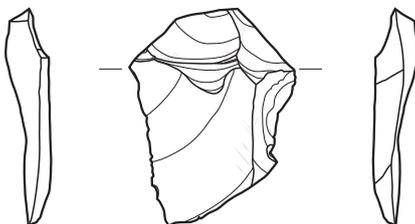
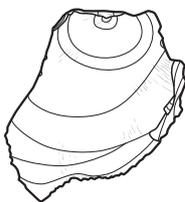
39



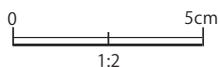
40



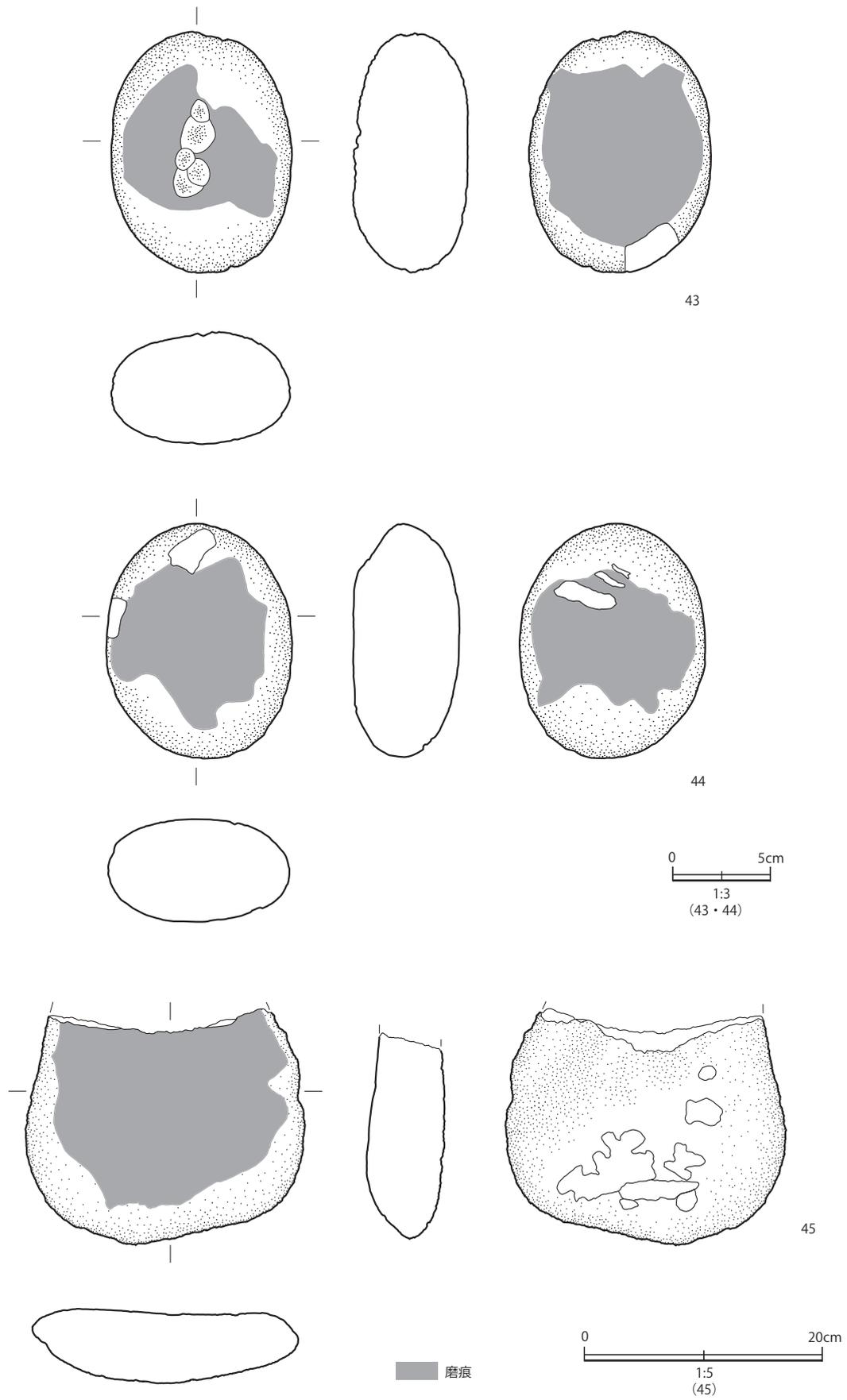
41



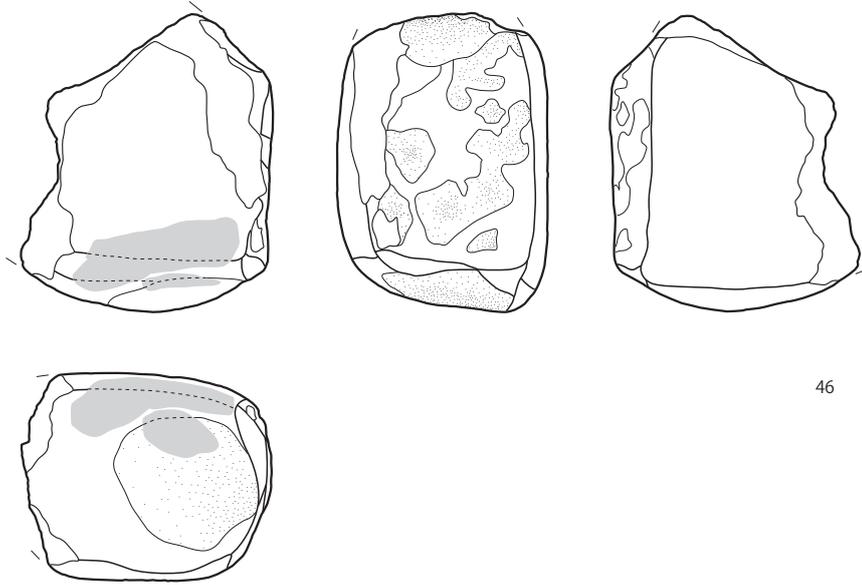
42



第54図 石器

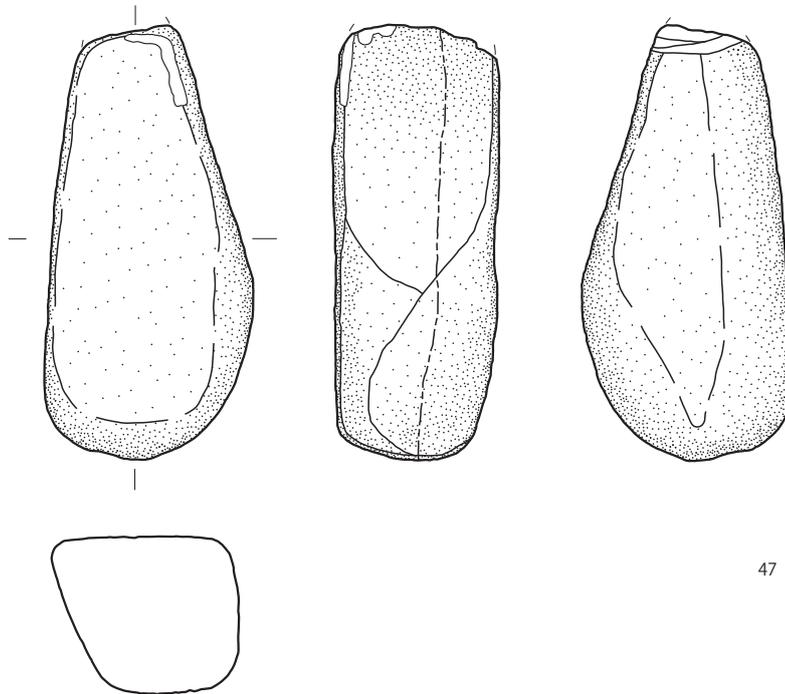


第55図 石製品



46

光沢



47

0 5cm
1:3

第56図 礫

VI 理化学分析

1 森の原遺跡における放射性炭素年代測定

パレオ・ラボ AMS 年代測定グループ

伊藤 茂・安昭炫・佐藤正教・廣田正史・山形秀樹・

小林紘一・Zaur Lomtadze・Ineza Jorjoliani・

小林克也

A はじめに

山形県村山市に位置する森の原遺跡で出土した試料について、加速器質量分析法（AMS 法）による放射性炭素年代測定を行った。

B 試料と方法

測定試料の情報、調製データは表 11 のとおりである。試料は、SX001 の 1 層から出土した炭化材である試料 No.1 (PLD-24717) 1 点である。試料は最終形成年輪を有する。発掘調査所見では、SX001 内の SK203 の 7 層から古代の土師器が出土したが、測定試料を採取した 1 層では縄文土器が出土しており、遺構の時期は不明である。

試料は調製後、加速器質量分析計（パレオ・ラボ、コンパクト AMS：NEC 製 1.5SDH）を用いて測定した。得られた ^{14}C 濃度について同位体分別効果の補正を行った後、 ^{14}C 年代、暦年代を算出した。

C 結果

表 12 に、同位体分別効果の補正に用いる炭素同位体比 ($\delta^{13}\text{C}$)、同位体分別効果の補正を行って暦年較正に用いた年代値と較正によって得られた年代範囲、慣用に従って年代値と誤差を丸めて表示した ^{14}C 年代を、第 57 図に暦年較正結果をそれぞれ示す。暦年較正に用いた年代値は下 1 桁を丸めていない値であり、今後暦年較正曲線が更新された際にこの年代値を用いて暦年較正を行うために記載した。

^{14}C 年代は AD1950 年を基点にして何年前かを示した年代である。 ^{14}C 年代 (yrBP) の算出には、 ^{14}C の半減期として Libby の半減期 5568 年を使用した。また、付記した ^{14}C 年代誤差 ($\pm 1\sigma$) は、測定の統計誤差、標準偏差等に基づいて算出され、試料の ^{14}C 年代がその ^{14}C 年代誤差内に入る確率が 68.2%であることを示す。

なお、暦年較正の詳細は以下のとおりである。

暦年較正とは、大気中の ^{14}C 濃度が一定で半減期が 5568 年として算出された ^{14}C 年代に対し、過去の宇宙線強度や地球磁場の変動による大気中の ^{14}C 濃度の変動、および半減期の違い (^{14}C の半減期 5730 ± 40 年) を較正して、より実際の年代値に近いものを算出することである。

^{14}C 年代の暦年較正には OxCal4.1 (較正曲線データ：IntCal13) を使用した。なお、 1σ 暦年代範囲は、OxCal の確率法を使用して算出された ^{14}C 年代誤差に相当する 68.2% 信頼限界の暦年代範囲であり、同様に 2σ 暦年代範囲は 95.4% 信頼限界の暦年代範囲である。カッコ内の百分率の値は、その範囲内に暦年代が入る確率を意味する。グラフ中の縦軸上の曲線は ^{14}C 年代の確率分布を示し、二重曲線は暦年較正曲線を示す。

D 考察

試料 No.1 (PLD-24717) は 2σ 暦年代範囲 (確率 95.4%) において、1490-1603 cal AD (75.8%) および 1611-1642 cal AD (19.6%) を示した。これは 15 世紀末～17 世紀中頃で、室町時代～江戸時代に相当する。試料は最終形成年輪を含めて測定されており、測定結果は樹木の伐採年代を示している。

測定試料が出土した SX001 では、SX001 内の SK203 の 7 層から古代の土師器、SX001 の 1 層から縄文土器が出土している。1 層から出土した炭化材の測定結果は室町時代～江戸時代で、同じ 1 層出土の縄文土器とは時期が大きく異なる。そのため、縄文土器は再堆積したと考えられ、縄文土器は SX001 の時期を示さない。SX001 の時期については、SK203 が古代の遺構で、1

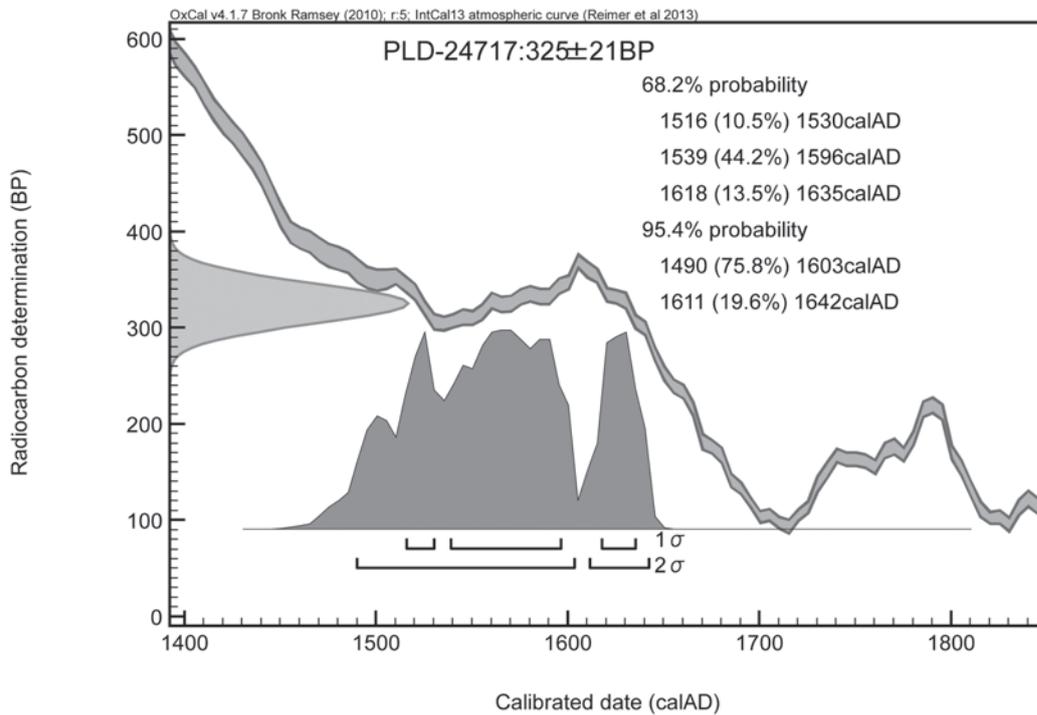
層が室町時代～江戸時代の層で、再堆積した縄文土器を含んでいる可能性などが考えられる。

表 11 測定試料および処理

測定番号	遺跡データ	試料データ	前処理
PLD-24717	遺構：SX001 層位：1 層 試料 No.1	種類：炭化材（広葉樹） 試料の性状：最終形成年輪 部位：外側 5 年分 状態：dry	超音波洗浄 酸・アルカリ・酸洗浄（塩酸：1.2N, 水酸化ナトリウム：1.0N, 塩酸：1.2N）

表 12 放射性炭素年代測定および暦年較正の結果

測定番号	$\delta^{13}C$ (‰)	暦年較正用年代 (yrBP $\pm 1\sigma$)	^{14}C 年代 (yrBP $\pm 1\sigma$)	^{14}C 年代を暦年年代に較正した年代範囲	
				1 σ 暦年年代範囲	2 σ 暦年年代範囲
PLD-24717 試料 No.1	-26.44 \pm 0.14	325 \pm 21	325 \pm 20	1516AD(10.5%) 1530AD 1539AD(44.2%) 1596AD 1618AD(13.5%) 1635AD	1490AD(75.8%) 1603AD 1611AD(19.6%) 1642AD



第 57 図 暦年較正結果

引用文献

Bronk Ramsey, C. (2009) Bayesian Analysis of Radiocarbon dates. Radiocarbon, 51(1), 337-360.
 中村俊夫 (2000) 放射性炭素年代測定法の基礎. 日本先史時代の ^{14}C 年代編集委員会編「日本先史時代の ^{14}C 年代」:3-20, 日本第四紀学会.
 Reimer, P.J., Bard, E., Bayliss, A., Beck, J.W., Blackwell, P.G., Bronk Ramsey, C., Buck, C.E., Cheng, H., Edwards, R.L., Friedrich, M., Grootes, P.M., Guilderson, T.P., Hafflidason, H., Hajdas, I., Hatte, C., Heaton, T.J., Hoffmann, D.L., Hogg, A.G., Hughen, K.A., Kaiser, K.F., Kromer, B., Manning, S.W., Niu, M., Reimer, R.W., Richards, D.A., Scott, E.M., Southon, J.R., Staff, R.A., Turney, C.S.M., and van der Plicht, J.(2013) IntCal13 and Marine13 Radiocarbon Age Calibration Curves 0–50,000 Years cal BP. Radiocarbon, 55(4), 1869-1887.

2 森の原遺跡の火山灰分析

パリノ・サーヴェイ株式会社

管理者 金井 慎司

担当者 矢作 健二

分析者 矢作 健二

坂元 秀平

A はじめに

本報告では、調査区内で検出された遺構の覆土において確認された火山灰（テフラ）とされる堆積物の特性を明らかにすることにより、それがテフラである場合には給源火山と噴出年代を特定し、遺構に関わる年代資料を作成する。

B 試料

試料は、試料番号 1～5 が付された計 5 点の堆積物である。試料番号 1 は、第 1 次調査の調査区 cc5005-5301 の落ち込み内で採取された明灰褐色を呈する砂質シルトであり、厚さ 1cm 程度のレンズ状を呈している。試料番号 2 は、第 2 次調査で検出された SX007 の床面付近に認められた厚さ 1mm ほどの灰白色を呈するシルトの薄層である。試料番号 3 は第 2 次調査で検出された SD239 の底面より採取された明褐灰色を呈するシルト質砂であり、脈状または斑状を呈する灰白色部が散在している。試料番号 4 は、第 2 次調査で検出された SX157 の床面付近より採取されたにぶい褐色を呈する砂混じりシルトであり、脈状または斑状を呈する灰白色部が多く含まれている。試料番号 5 は、第 2 次調査で検出された ST001 の東側ベルト内より採取された灰褐色を呈する砂混じりシルトであり、脈状または斑状を呈する灰白色部が多く含まれている。

C 分析方法

試料約 20 g を蒸発皿に取り、水を加え泥水にした状態で超音波洗浄装置により粒子を分散し、上澄みを流し去る。この操作を繰り返すことにより得られた砂分を乾燥させた後、実体顕微鏡下にて観察する。観察は、テフラの本質物質であるスコリア・火山ガラス・軽石を対象とし、その特徴や含有量の多少を定性的に調べる。

火山ガラスは、その形態によりバブル型・中間型・軽石型の 3 タイプに分類した。各型の形態は、バブル型は薄手平板状、中間型は表面に気泡の少ない厚手平板状あるいは破砕片状などの塊状ガラスであり、軽石型は小気泡を非常に多く持った塊状および気泡の長く伸びた繊維束状のものとする。

さらに火山ガラスについては、その屈折率を測定することにより、テフラを特定するための指標とする。屈折率の測定は、古澤 (1995) の MAIOT を使用した温度変化法を用いた。

D 結果

結果を表 13 に示す。試料番号 4 および試料番号 5 からは中量の、試料番号 1～3 からは微量の、いずれも細砂～極細砂径の火山ガラスが検出された。これらの火山ガラスは、無色透明のバブル型と無色透明の塊状の軽石型が同程度に多く、少量の繊維束状のものが混在する。また、試料番号 3 には極めて微量の軽石も認められた。軽石は、白色を呈し、発泡は良好、角閃石の斑晶を包有している。

なお、いずれの試料の砂分にも新鮮な角閃石の鉱物粒が比較的多く認められ、上述した軽石に包有されていることも考慮すれば、火山ガラスと同一テフラに由来する遊離結晶であると判断される。試料番号 1～3 の処理後の砂分は、石英と長石の鉱物粒を主体に構成されており、試料番号 1 には径数 mm の灰白色を呈する風化岩片が少量含まれ、試料番号 2 と試料番号 3 には径 1～2mm の酸化鉄塊が少量含まれている。一方、スコリアはいずれの試料からも認められなかった。

火山ガラスの屈折率測定結果を第 58 図に示す。5 点の試料は、ほぼ同様のレンジを示し、最小値は n1.500 または 1.501 であり、最大値は n1.503 または 1.504 である。モードはいずれの試料も n1.502～1.503 である。

E 考察

試料番号 4 と試料番号 5 からは、中量の火山ガラスが検出されたことから、試料中に認められた灰白色部は火山ガラス質テフラの濃集部であると考えられる。本遺跡の地理的位置と、火山ガラスの形態および屈折率さら

に角閃石の斑晶を伴うこと、これまでに研究された東北地方におけるテフラの産状(町田ほか(1981;1984)、Arai et al.(1986)、町田ほか(2003)など)との比較から、試料番号4と試料番号5から検出されたテフラは、肘折尾花沢テフラ(Hj-O:町田・新井,2003)に由来する可能性がある。Hj-Oは、山形県最上郡大蔵村にある肘折カルデラを給源とし、暦年で約1.1~1.2万年前に噴出したテフラである。試料番号4と試料番号5におけるテフラの産状からは、テフラの降下堆積層が攪乱を受けて再堆積した状況が推定できる。

試料番号3からは微量の火山ガラスが検出されたが、火山ガラスの形態と屈折率は上述の試料番号4および5とほぼ同様であり、かつ角閃石を包有する軽石も認められたことも併せて考えると、火山ガラスの由来するテフラは、同様にHj-Oであると考えられる。試料番号3におけるテフラの産状も試料番号4や5と類似していることから、同様に攪乱・再堆積の状況が考えられる。火山ガラスの残存状況は、試料番号4や5よりも不良であり、攪乱・再堆積の程度がより大きかったと考えることもできる。

試料番号2については、厚さ1mmの薄層として認識

された堆積物であるが、検出された火山ガラスは微量であった。薄層の状態は、降下堆積したテフラ層がそのまま残存していることを示唆しているが、火山ガラスの多くは粘土化してしまったために、今回の分析処理では微量しか火山ガラスが回収されなかったものと考えられる。

試料番号1は、レンズ状ブロックから微量の火山ガラスが検出されたことになる。火山ガラスの由来するテフラは、他の試料と同様にHj-Oであると判断される。レンズ状ブロックは、テフラの降下堆積層が攪乱を受けながらも塊状に残ったものであると考えられるが、おそらく火山ガラスの多くは粘土化してしまったものと考えられる。

今回の試料から検出されたテフラは、いずれもHj-Oとされたが、Hj-Oの降下堆積年代と遺構の構築年代あるいは遺構の埋積年代との関係については、覆土断面でのテフラの産状と周囲の土層におけるテフラの産状を確認した上で検討する必要がある。その関係が確認されれば、森の原遺跡における縄文時代の遺構や縄文土器および石器についての有効な年代資料になることが期待される。

引用文献

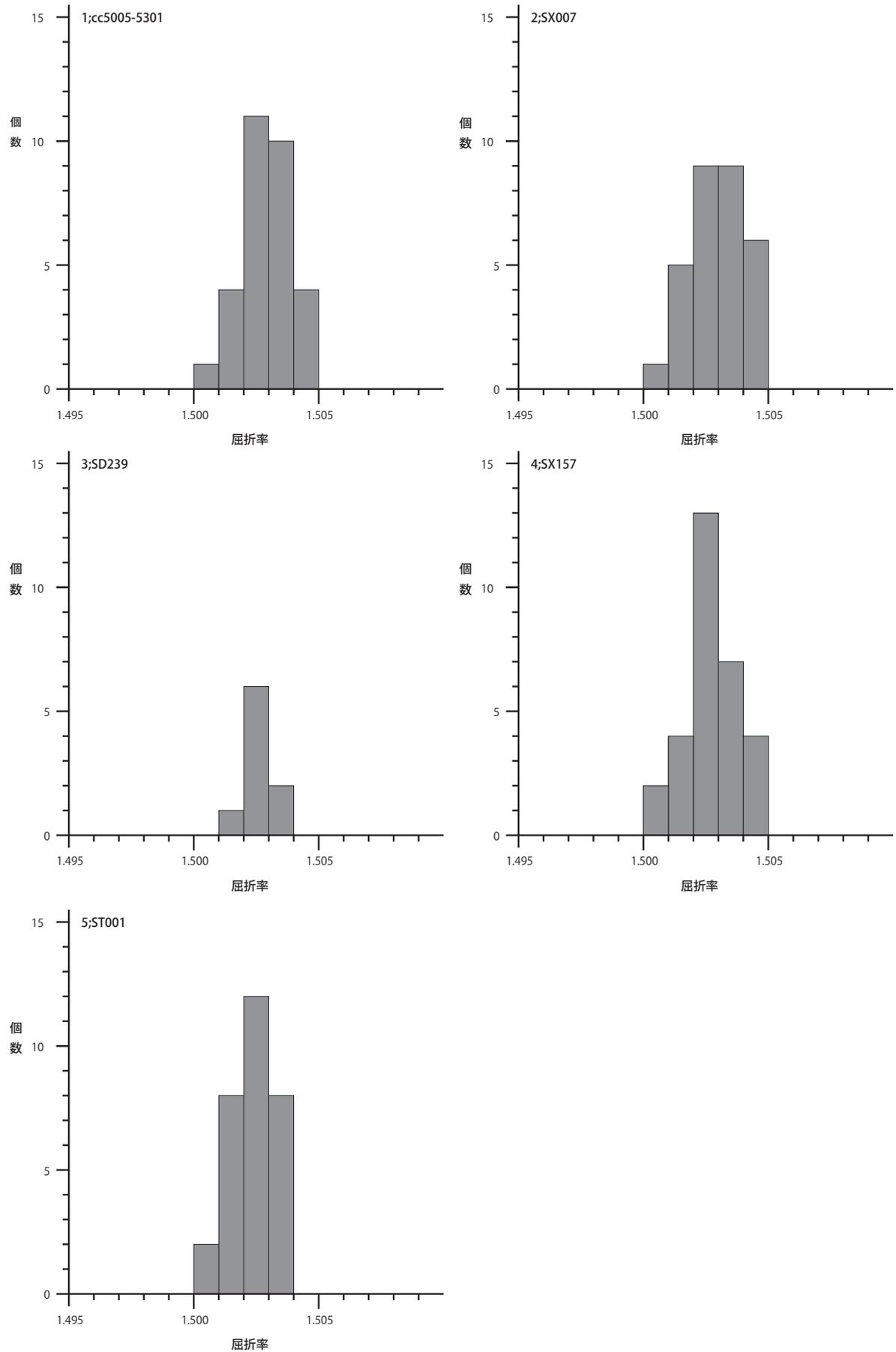
Arai,F.・Machida,H.・Okumura,K.・Miyuchi,T.・Soda,T.・Yamagata,K 1986 Catalog for late quaternary marker-tephras in Japan II - Tephras occurring in Northeast Honshu and Hokkaido - .Geographical reports of Tokyo Metropolitan University No.21,223-250.
 古澤明 1995 「火山ガラスの屈折率測定および形態分類とその統計的な解析に基づくテフラの識別」『地質学雑誌 101』 p.123 ~ p.133
 早川由紀夫ほか 1998 「日本海をはさんで10世紀に相次いで起こった二つの大噴火の年月日一和田湖と白頭山」『火山 43』 p.403 ~ p.407
 町田洋ほか 2003 『新編 火山灰アトラス』 東京大学出版会
 町田洋ほか 1981 「日本海を渡ってきたテフラ」『科学 51』 p.562 ~ p.569
 町田洋ほか 1984 「テフラと日本考古学—考古学研究と関連するテフラのカタログ—」『渡辺直経(編)古文化財に関する保存科学と人文・自然科学』 p.865 ~ p.928 同朋舎

表 13 テフラ分析結果

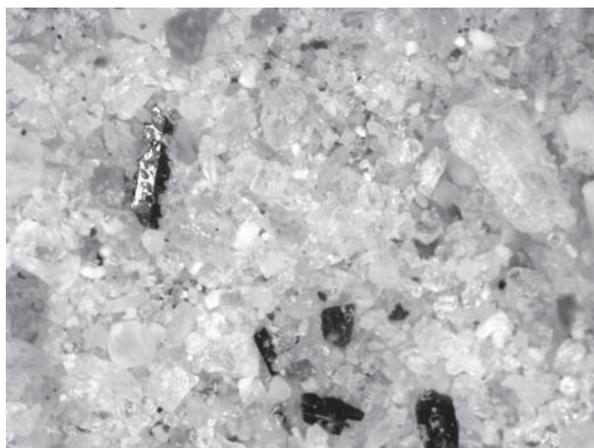
試料番号	調査回数	調査区または遺構番号	出土層位	スコリア量	火山ガラス		軽石			備考
					量	色調・形態	量	色調・発泡度	最大粒径	
1	1次	cc5005-5301	落ち込み内	-	+	cl・bw,cl・pm	-			石英・長石の鉱物粒主体、風化岩片少量伴う
2	2次	SX007	床面付近	-	+	cl・bw,cl・pm	-			石英・長石の鉱物粒主体、酸化鉄塊微量伴う
3	2次	SD239	底面	-	+	cl・bw,cl・pm	(+)	W・g(ho)	1.5	石英・長石の鉱物粒主体、酸化鉄塊少量伴う
4	2次	SX157	床面付近	-	+++	cl・bw,cl・pm	-			
5	2次	ST001	東側ベルト内	-	+++	cl・bw,cl・pm	-			

凡例 - :含まれない, (+):きわめて微量, + :微量, ++ :少量, +++ :中量, ++++ :多量, cl:無色透明, br:褐色, bw:バブル型, md:中間型, pm:軽石型。

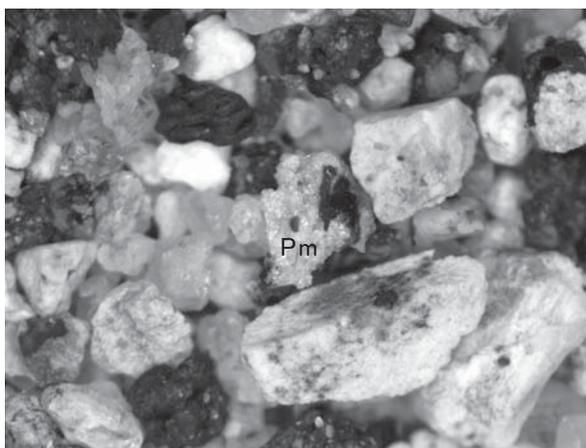
W:白色, g:良好, sg:やや良好, sb:やや不良, b:不良, (ho):角閃石斑晶包有する, 最大粒径はmm。



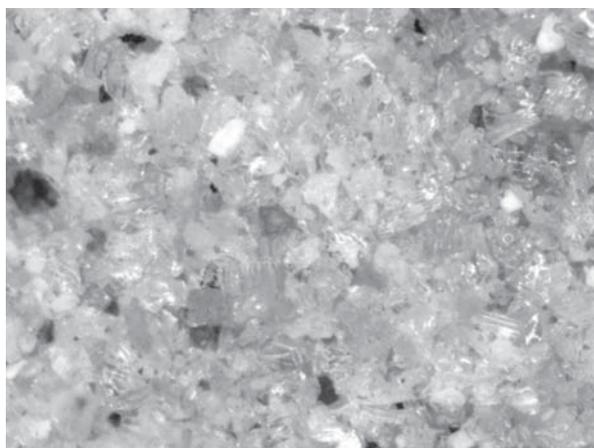
第 58 図 火山ガラスの屈折率



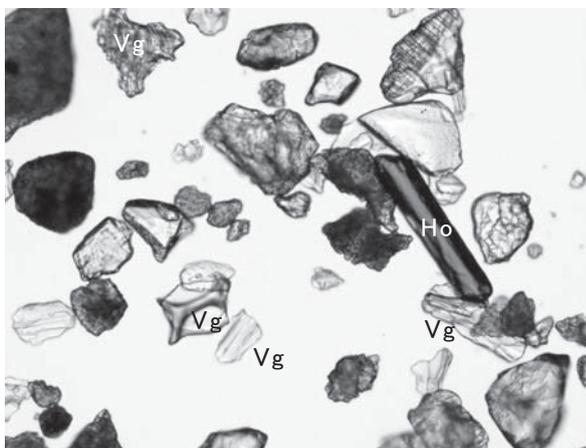
1.砂分の状況(1;cc5005-5301)



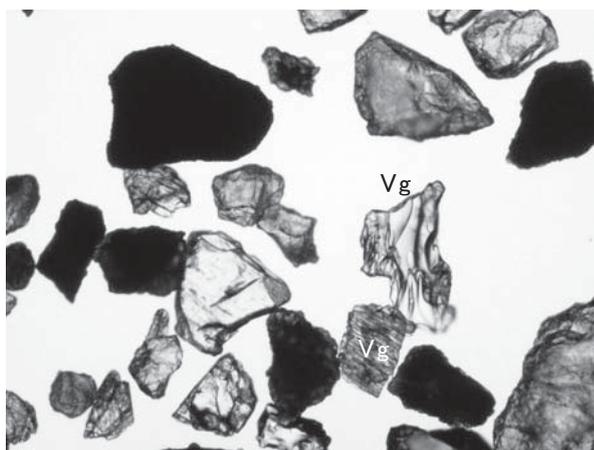
2.砂分の状況(3;SD239)



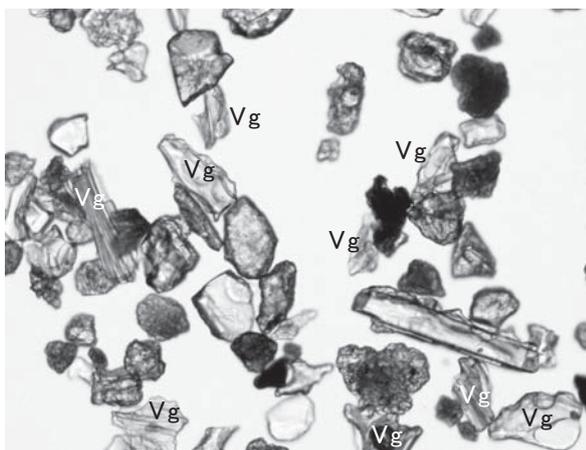
3.砂分の状況(5;ST001)



4.火山ガラス(1;cc5005-5301)



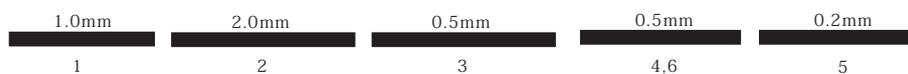
5.火山ガラス(3;SD239)



6.火山ガラス(5;ST001)

Ho:角閃石. Pm:軽石.

Vg:火山ガラス.



3 今宿大谷地遺跡における放射性炭素年代測定（1）

パレオ・ラボ AMS 年代測定グループ

伊藤 茂・安昭炫・佐藤正教・廣田正史・山形秀樹・

小林紘一・Zaur Lomtadze・Ineza Jorjoliani・

小林克也

A はじめに

山形県北村山郡に位置する今宿大谷地遺跡で出土した試料について、加速器質量分析法（AMS 法）による放射性炭素年代測定を行った。

B 試料と方法

測定試料の情報、調製データは表 14 のとおりである。試料は土坑である SK8 の覆土 1 層で出土した炭化材、試料 No.1 (PLD-24718) 1 点である。発掘調査所見では、SK8 からは縄文時代中期前葉の大木 7b 式土器が出土している。

試料は調製後、加速器質量分析計（パレオ・ラボ、コンパクト AMS：NEC 製 1.5SDH）を用いて測定した。得られた ^{14}C 濃度について同位体分別効果の補正を行った後、 ^{14}C 年代、暦年代を算出した。

C 結果

表 15 に、同位体分別効果の補正に用いる炭素同位体比 ($\delta^{13}\text{C}$)、同位体分別効果の補正を行って暦年較正に用いた年代値と較正によって得られた年代範囲、慣用に従って年代値と誤差を丸めて表示した ^{14}C 年代を、第 60 図に暦年較正結果をそれぞれ示す。暦年較正に用いた年代値は下 1 桁を丸めていない値であり、今後暦年較正曲線が更新された際にこの年代値を用いて暦年較正

を行うために記載した。

^{14}C 年代は AD1950 年を基点にして何年前かを示した年代である。 ^{14}C 年代 (yrBP) の算出には、 ^{14}C の半減期として Libby の半減期 5568 年を使用した。また、付記した ^{14}C 年代誤差 ($\pm 1\sigma$) は、測定の統計誤差、標準偏差等に基づいて算出され、試料の ^{14}C 年代がその ^{14}C 年代誤差内に入る確率が 68.2%であることを示す。

なお、暦年較正の詳細は以下のとおりである。

暦年較正とは、大気中の ^{14}C 濃度が一定で半減期が 5568 年として算出された ^{14}C 年代に対し、過去の宇宙線強度や地球磁場の変動による大気中の ^{14}C 濃度の変動、および半減期の違い (^{14}C の半減期 5730 ± 40 年) を較正して、より実際の年代値に近いものを算出することである。

^{14}C 年代の暦年較正には OxCal4.1 (較正曲線データ：IntCal13) を使用した。なお、 1σ 暦年代範囲は、OxCal の確率法を使用して算出された ^{14}C 年代誤差に相当する 68.2% 信頼限界の暦年代範囲であり、同様に 2σ 暦年代範囲は 95.4% 信頼限界の暦年代範囲である。カッコ内の百分率の値は、その範囲内に暦年代が入る確率を意味する。グラフ中の縦軸上の曲線は ^{14}C 年代の確率分布を示し、二重曲線は暦年較正曲線を示す。

D 考察

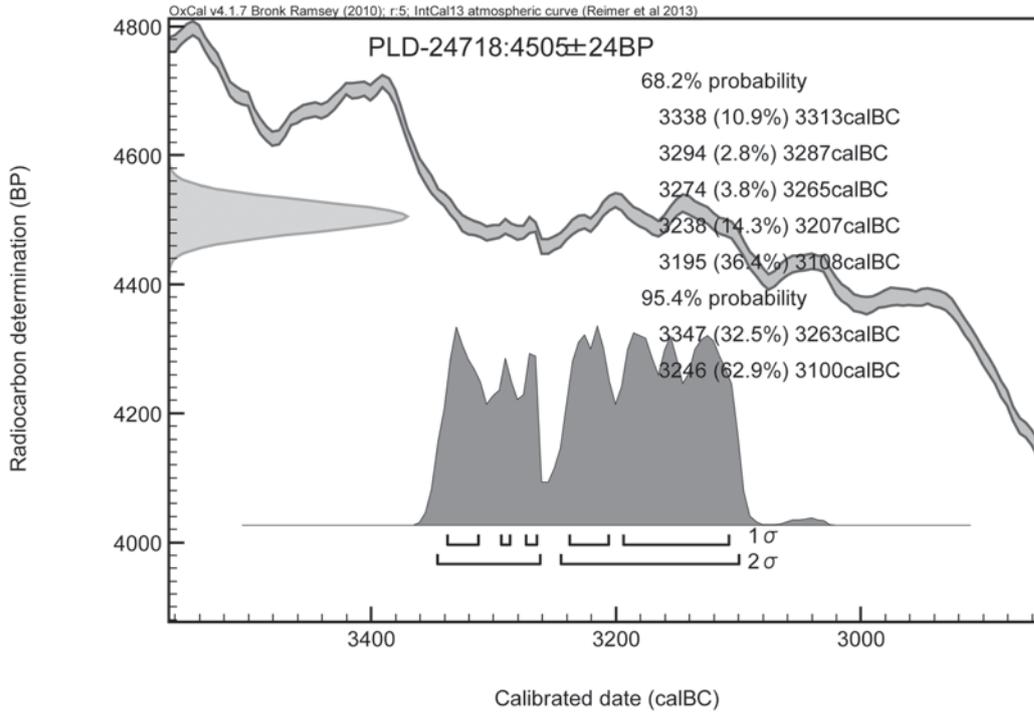
試料 No.1 (PLD-24718) の炭化材は、 ^{14}C 年代が 4505 ± 25 yr BP、 2σ 暦年代範囲 (確率 95.4%) が 3347-3263 cal BC (32.5%) および 3246-3100 cal BC (62.9%) を示した。これは、小林 (2008)、工藤 (2012)、中野 (2008) を参照とすると、縄文時代中期前葉に相当する。SK8 では縄文時代中期前葉の大木 7b 式土器が出土しており、測定結果と整合する。

表 14 測定試料および処理

測定番号	遺跡データ	試料データ	前処理
PLD-24718	遺構：SK8 層位：覆土 1 層 試料 No.1	種類：炭化材（広葉樹） 試料の性状：部位不明 部位：外側 2 年分 状態：dry	超音波洗浄 酸・アルカリ・酸洗浄（塩酸：1.2N, 水酸化ナトリウム：1.0N, 塩酸：1.2N）

表 15 放射性炭素年代測定および暦年較正の結果

測定番号	$\delta^{13}\text{C}$ (‰)	暦年較正用年代 (yrBP $\pm 1\sigma$)	^{14}C 年代 (yrBP $\pm 1\sigma$)	^{14}C 年代を暦年較正した年代範囲	
				1 σ 暦年較正範囲	2 σ 暦年較正範囲
PLD-24718 試料 No.1	-27.37 \pm 0.16	4505 \pm 24	4505 \pm 25	3338BC(10.9%)3313BC 3294BC(2.8%)3287BC 3274BC(3.8%)3265BC 3238BC(14.3%)3207BC 3195BC(36.4%)3108BC	3347BC(32.5%)3263BC 3246BC(62.9%)3100BC



第 60 図 暦年較正結果

引用文献

Bronk Ramsey, C. (2009) Bayesian Analysis of Radiocarbon dates. Radiocarbon, 51(1), 337-360.
 小林謙一 (2008) 縄文時代の暦年代. 小杉康・谷口康浩・西田泰民・水ノ江和同・矢野健一編「縄文時代の考古学 2 歴史のものさし」: 257-269, 同成社.
 工藤雄一郎 (2012) 旧石器・縄文時代の環境文化史—高精度放射性炭素年代測定と考古学—. 373p, 神泉社.
 中村俊夫(2000)放射性炭素年代測定法の基礎. 日本先史時代の ^{14}C 年代編集委員会編「日本先史時代の ^{14}C 年代」:3-20, 日本第四紀学会.
 中野幸夫 (2008) 大木 7a ~ 8b 式土器. 小林達雄編「総覧縄文土器」: 352-359, アム・プロモーション.
 Reimer, P.J., Bard, E., Bayliss, A., Beck, J.W., Blackwell, P.G., Bronk Ramsey, C., Buck, C.E., Cheng, H., Edwards, R.L., Friedrich, M., Grootes, P.M., Guilderson, T.P., Hafliadason, H., Hajdas, I., Hatte, C., Heaton, T.J., Hoffmann, D.L., Hogg, A.G., Hughen, K.A., Kaiser, K.F., Kromer, B., Manning, S.W., Niu, M., Reimer, R.W., Richards, D.A., Scott, E.M., Southon, J.R., Staff, R.A., Turney, C.S.M., and van der Plicht, J.(2013) IntCal13 and Marine13 Radiocarbon Age Calibration Curves 0-50,000 Years cal BP. Radiocarbon, 55(4), 1869-1887.

4 今宿大谷地遺跡における放射性炭素年代 (2)

(AMS 測定)

(株) 加速器分析研究所

A 測定対象試料

今宿大谷地遺跡は、山形県北村山郡大石田町大字今宿

字大谷地に所在する。測定対象試料は、SK8 2 層出土木炭 (1 : IAAA-120566) 1 点である (表 16)。

試料が採取された堆積層は黒褐色シルト層で、肘折パミスの一部を含む。この遺構からは縄文中期の土器が出土している。

B 測定の意義

遺構の埋没年代を考える助けとする。

C 化学処理工程

- (1) メス・ピンセットを使い、根・土等の付着物を取り除く。
- (2) 酸-アルカリ-酸 (AAA: Acid Alkali Acid) 処理により不純物を化学的に取り除く。その後、超純水で中性になるまで希釈し、乾燥させる。AAA 処理における酸処理では、通常 1mol/l (1M) の塩酸 (HCl) を用いる。アルカリ処理では水酸化ナトリウム (NaOH) 水溶液を用い、0.001M から 1M まで徐々に濃度を上げながら処理を行う。アルカリ濃度が 1M に達した時には「AAA」、1M 未満の場合は「AaA」と表 1 に記載する。
- (3) 試料を燃焼させ、二酸化炭素 (CO₂) を発生させる。
- (4) 真空ラインで二酸化炭素を精製する。
- (5) 精製した二酸化炭素を鉄を触媒として水素で還元し、グラファイト (C) を生成させる。
- (6) グラファイトを内径 1mm のカソードにハンドプレス機で詰め、それをホイールにはめ込み、測定装置に装着する。

D 測定方法

加速器をベースとした ¹⁴C-AMS 専用装置 (NEC 社製) を使用し、¹⁴C の計数、¹³C 濃度 (¹³C/¹²C)、¹⁴C 濃度 (¹⁴C/¹²C) の測定を行う。測定では、米国国立標準局 (NIST) から提供されたシュウ酸 (HOx II) を標準試料とする。この標準試料とバックグラウンド試料の測定も同時に実施する。

E 算出方法

- (1) $\delta^{13}\text{C}$ は、試料炭素の ¹³C 濃度 (¹³C/¹²C) を測定し、基準試料からのずれを千分偏差 (‰) で表した値である (表 16)。AMS 装置による測定値を用い、表中に「AMS」と注記する。
- (2) ¹⁴C 年代 (Libby Age: yrBP) は、過去の大気中 ¹⁴C 濃度が一定であったと仮定して測定され、1950 年を基準年 (0yrBP) として遡る年代である。年代値の算出には、Libby の半減期 (5568 年) を使用する (Stuiver and Polach 1977)。¹⁴C 年代は $\delta^{13}\text{C}$ によって同位体効果を補正する必要がある。補正した値を表 16 に、補正していない値を参考値として表 17 に示した。¹⁴C 年代

と誤差は、下 1 桁を丸めて 10 年単位で表示される。また、¹⁴C 年代の誤差 ($\pm 1\sigma$) は、試料の ¹⁴C 年代がその誤差範囲に入る確率が 68.2%であることを意味する。

(3) pMC (percent Modern Carbon) は、標準現代炭素に対する試料炭素の ¹⁴C 濃度の割合である。pMC が小さい (¹⁴C が少ない) ほど古い年代を示し、pMC が 100 以上 (¹⁴C の量が標準現代炭素と同等以上) の場合 Modern とする。この値も $\delta^{13}\text{C}$ によって補正する必要があるため、補正した値を表 16 に、補正していない値を参考値として表 17 に示した。

(4) 暦年較正年代とは、年代が既知の試料の ¹⁴C 濃度を元に描かれた較正曲線と照らし合わせ、過去の ¹⁴C 濃度変化などを補正し、実年代に近づけた値である。暦年較正年代は、¹⁴C 年代に対応する較正曲線上の暦年代範囲であり、1 標準偏差 ($1\sigma = 68.2\%$) あるいは 2 標準偏差 ($2\sigma = 95.4\%$) で表示される。第 16 図に示すグラフの縦軸が ¹⁴C 年代、横軸が暦年較正年代を表す。暦年較正プログラムに入力される値は、 $\delta^{13}\text{C}$ 補正を行い、下一桁を丸めない ¹⁴C 年代値である。なお、較正曲線および較正プログラムは、データの蓄積によって更新される。また、プログラムの種類によっても結果が異なるため、年代の活用にあたってはその種類とバージョンを確認する必要がある。ここでは、暦年較正年代の計算に、IntCal09 データベース (Reimer et al. 2009) を用い、OxCalv4.1 較正プログラム (Bronk Ramsey 2009) を使用した。暦年較正年代については、特定のデータベース、プログラムに依存する点を考慮し、プログラムに入力する値とともに参考値として表 17 に示した。暦年較正年代は、¹⁴C 年代に基づいて較正 (calibrate) された年代値であることを明示するために「cal BC/AD」(または「cal BP」) という単位で表される。

F 測定結果

SK8 2 層出土木炭 1 の ¹⁴C 年代は 4610 \pm 30yrBP、暦年較正年代 (1σ) は 3492 ~ 3357cal BC の間に 2 つの範囲で示され、縄文時代中期前葉頃に相当する (小林編 2008)。

試料の炭素含有率は 60%を超える十分な値で、化学処理、測定上の問題は認められない。

表 16 測定試料および処理

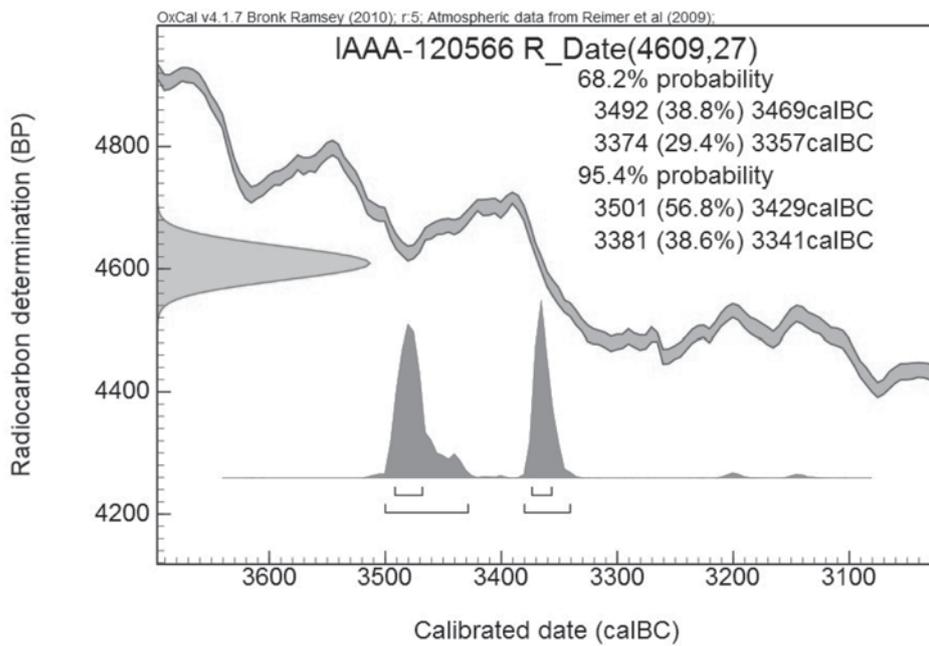
測定番号	試料名	採取場所	試料 形態	処理方法	$\delta^{13}\text{C}$ (‰) (AMS)	$\delta^{13}\text{C}$ 補正あり	
						Libby Age (yrBP)	pMC (%)
IAAA-120566	1	遺構：SK8 層位：2層	木炭	AAA	-29.4 ± 0.39	4,610 ± 30	56.33 ± 0.19

[#5181]

表 17 放射性炭素年代測定および暦年較正の結果

測定番号	$\delta^{13}\text{C}$ 補正なし		暦年較正用 (yrBP)	1 σ 暦年代範囲	2 σ 暦年代範囲
	Age (yrBP)	pMC (%)			
IAAA-120566	4,680 ± 30	55.83 ± 0.19	4,609 ± 27	3492calBC - 3469calBC (38.8%) 3374calBC - 3357calBC (29.4%)	3501calBC - 3429calBC (56.8%) 3381calBC - 3341calBC (38.6%)

【参考値】



第 61 図 暦年較正結果

引用文献

- Bronk Ramsey C. 2009 Bayesian analysis of radiocarbon dates, Radiocarbon 51(1), 337-360
- 小林達雄編 2008 総覧縄文土器, 総覧縄文土器刊行委員会, アム・プロモーション
- Reimer, P.J. et al. 2009 IntCal09 and Marine09 radiocarbon age calibration curves, 0-50,000 years cal BP, Radiocarbon 51(4), 1111-1150
- Stuiver M. and Polach H.A. 1977 Discussion: Reporting of ^{14}C data, Radiocarbon 19(3), 355-363

5 今宿大谷地遺跡の火山灰分析

パリーノ・サーヴェイ株式会社
 管理者 金井 慎司
 担当者 矢作 健二
 分析者 矢作 健二
 坂元 秀平

A はじめに

今宿大谷地遺跡は、山形盆地北端部付近の最上川右岸に分布する丘陵の緩斜面上に位置する。現在の丘陵斜面の地形は、近年の人工改変によるものであるが、発掘調査でも緩やかな斜面が確認されている。なお、調査区より南側の丘陵下には、2～3万年前に形成された狭小な河成段丘の分布が記載されている(小池ほか編,2005)。本報告では、縄文時代中期の遺物の集中する層および造成土直下の検出面において確認された火山灰(テフラ)とされる堆積物の特性を明らかにすることにより、それがテフラである場合には給源火山と噴出年代を特定し、今宿大谷地遺跡に関わる年代資料を作成する。

B 試料

試料は、遺物集中部の遺物出土層中から採取された試料1と造成土直下の検出面上から採取された試料2の2点である。発掘調査所見では、いずれも2次堆積した火山灰であると考えられている。分析時の観察では、試料はいずれもにぶい黄橙色を呈する砂質シルトの外観を呈する。

C 分析方法

試料約20gを蒸発皿に取り、水を加え泥水にした状態で超音波洗浄装置により粒子を分散し、上澄みを流し去る。この操作を繰り返すことにより得られた砂分を乾燥させた後、実体顕微鏡下にて観察する。観察は、テフラの本質物質であるスコリア・火山ガラス・軽石を対象とし、その特徴や含有量の多少を定性的に調べる。

火山ガラスは、その形態によりバブル型・中間型・軽石型の3タイプに分類した。各型の形態は、バブル型は薄手平板状、中間型は表面に気泡の少ない厚手平板状あるいは破砕片状などの塊状ガラスであり、軽石型は小

気泡を非常に多く持った塊状および気泡の長く伸びた繊維束状のものとする。

さらに火山ガラスについては、その屈折率を測定することにより、テフラを特定するための指標とする。屈折率の測定は、古澤(1995)のMAIOTを使用した温度変化法を用いた。

D 結果

試料1および試料2ともに、処理後の砂分は細砂～極細砂径の火山ガラスによりほぼ構成される。両試料ともに、火山ガラスは、無色透明の塊状の軽石型が非常に多く、少量の繊維束状のものも混在し、さらに少量の無色透明のバブル型も含まれる。なお、スコリアおよび軽石はいずれの試料からも認められなかった。

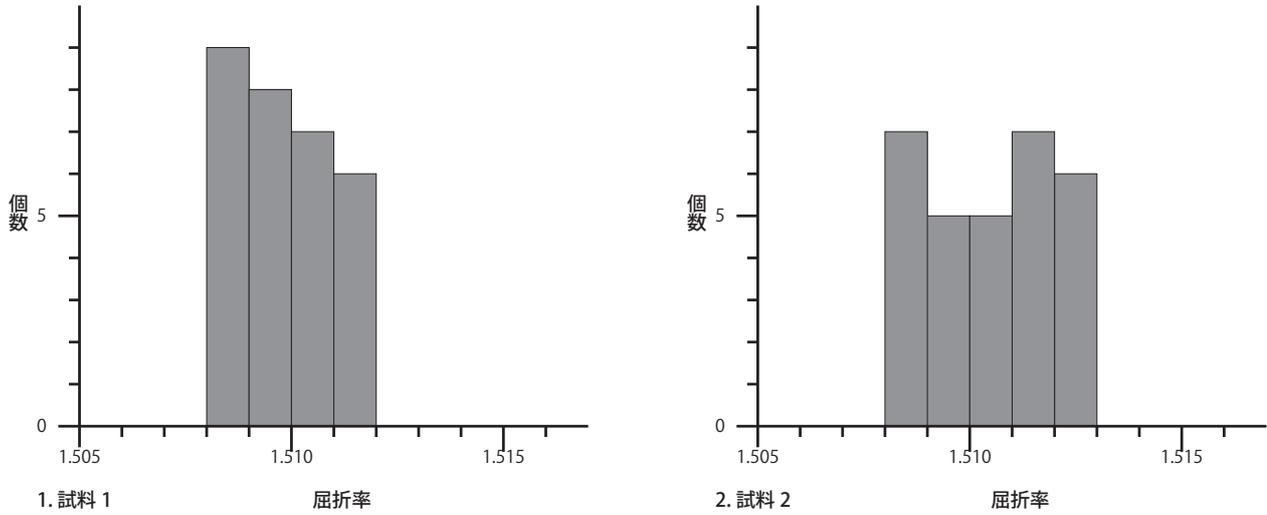
火山ガラスの屈折率測定結果を第62図に示す。両試料ともに屈折率のレンジは明瞭であり、試料1はn1.508-1.511、試料2はn1.508-1.512の値を示す。

E 考察

多量の火山ガラスからなる試料1と試料2が採取された、にぶい黄橙色を呈する砂質シルトは、いずれも火山ガラス質テフラの降下堆積物に由来すると判断される。今宿大谷地遺跡の地理的位置と上述した火山ガラスの形態およびその屈折率と、これまでに研究された東北地方におけるテフラの産状(町田ほか,1984;Arai et al.,1986;町田・新井,2003)との比較から、テフラは十和田中楢テフラ(To-Cu:Hayakawa,1985)であると考えられる。To-Cuは、縄文時代に十和田カルデラから噴出したテフラであり、分布の主軸は南東方向とされている(町田ほか,1984)が、山形県と福島県境の吾妻山周辺や山形県と新潟県境の飯豊山周辺でも確認されている(早田ほか,1988)。その噴出年代については、軽石中の炭化材や直下の土壌の放射性炭素年代測定などから工藤・佐々木(2007)は、暦年代でおよそ6,200年前としている。

この噴出年代は、小林編(2008)による編年表では縄文時代前期の中頃に相当する。発掘調査では、縄文時代中期とされる遺物集中部の出土層位中に試料1の採取されたテフラ層が確認されている。前述したように、発掘調査所見では、このテフラ層を2次堆積物としてい

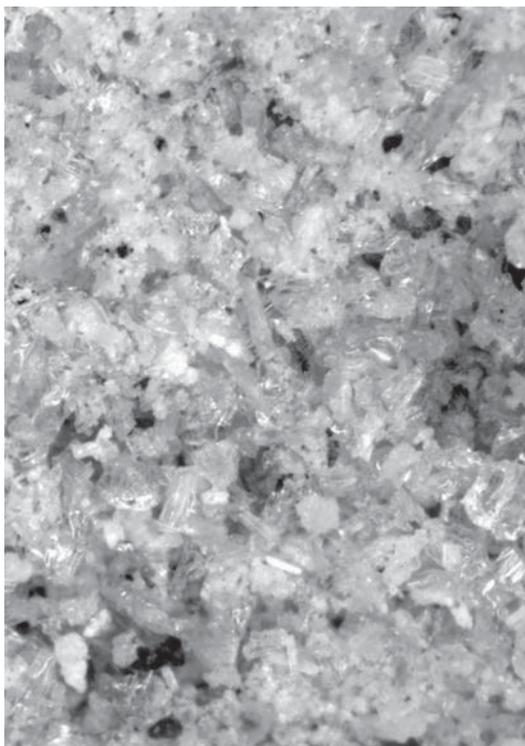
るが、上述した To-Cu の噴出年代と供伴する縄文土器の時期との関係は、その所見を支持していると言える。



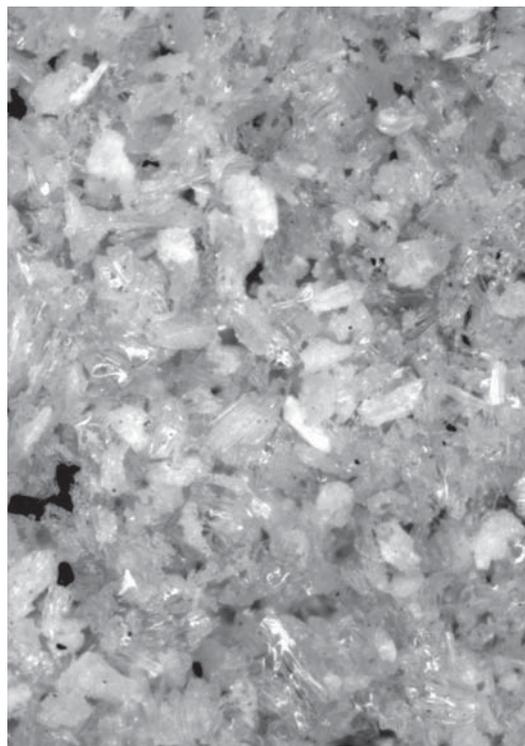
第 62 図 火山ガラスの屈折率

引用文献

Arai,F.・Machida,H.・Okumura,K.・Miyachi,T.・Soda,T.・Yamagata,K 1986 Catalog for late quaternary marker-tephras in Japan II - Tephras occurring in Northeast Honshu and Hokkaido -.Geographical reports of Tokyo Metropolitan University No.21,p.223-p.250.
 古澤明 1995 「火山ガラスの屈折率測定および形態分類とその統計的な解析に基づくテフラの識別」『地質学雑誌 101』 p.123～p.133
 Hayakawa,Y. 1985 Pyroclastic Geology of Towada Volcano. Bulletin of The Earthquake Reserch Institute University of Tokyo,vol.60 ,p.507-p.592.
 小林達雄編 2008 小林達雄先生古希記念企画『総覧 縄文土器』株式会社アム・プロモーション
 小池一之ほか 2005 『日本の地形 3 東北』 東京大学出版会
 工藤 崇ほか 2007 「十和田火山後カルデラ期噴出物の高精度噴火史編年」『地学雑誌 116』 p.653～p.663
 町田洋ほか 2003 『新編 火山灰アトラス』 東京大学出版会
 町田洋ほか 1984 「テフラと日本考古学—考古学研究と関連するテフラのカタログ—」『渡辺直経 (編) 古文化財に関する保存科学と人文・自然科学』 p.865～p.928 同朋舎
 早田 勉ほか 1988 「縄文時代の指標テフラ - 吾妻火山灰 (演旨)」『東北地理 40』 p.231



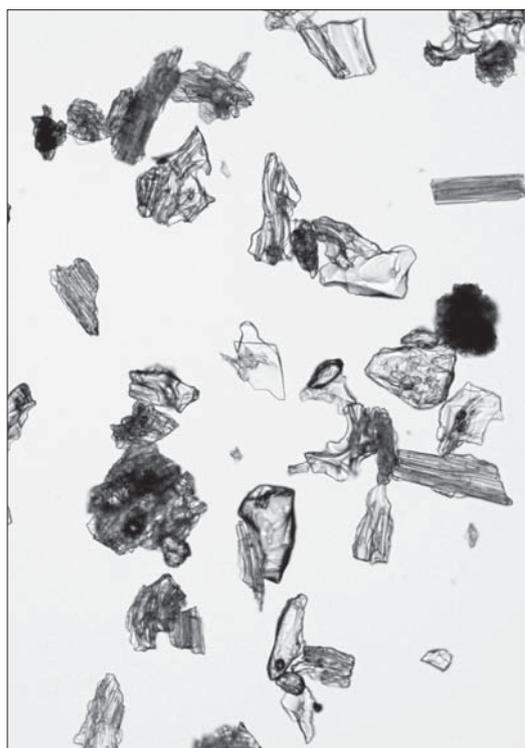
1.処理後の砂分(試料1)



2.処理後の砂分(試料2)



3.To-Cuの火山ガラス(試料1)



4.To-Cuの火山ガラス(試料2)

0.5mm 0.2mm
1,2 3,4

第 63 図 テフラ

VII 総 括

1 八合田遺跡

八合田遺跡は J R 袖崎駅の北西に位置している。調査前の遺跡周辺の地目は畑地であり、周辺には畑地と水田が広がっている。調査区西側には沢の目川が南から北へ流路を取っている。

調査では現地表が近現代の土地の改良により水平になるように形成されていることが確認された。調査区の東側は削平され、西側は盛土がなされていた。つまり、遺跡が存在した当時は西側が低く東側が高くなる地形の変換点にあっていた場所だったと考えられる。また、西側の遺構検出面は水の影響によるグライ化がみられた。これは西に流れる沢の目川の影響、もしくは調査区西側が水田として利用された可能性を示している。または東側から水が流れ込み湿地を形成していた可能性も推測される。

検出された遺構の特徴としては、全体として掘り込みの深さが浅いということが挙げられる。柱穴であっても 30 cm に満たない深さであり、遺構によっては 3 cm 程度掘り下げた段階で床面に達するものもあった。これらから削平を受けている可能性が見いだせるが、それらの削平が行われたのは近現代以前としかいえない。可能性を示すならば近世で、北壁の層序並びに遺構検出面を確認するための坪掘りで近世陶器と瓦質土器が出土していることによる。

調査区西側の検出面の標高は現水田の標高とほぼ同じである。推測でしかないが調査区西側は水田として一度開拓利用されていたのかもしれない。遺構は調査区中央から北及び北西側に集中している。特に北側が多い。一部は斜面にかかっているがほとんどは平坦面で検出されている。

遺物の出土地点も遺構の検出状況と同じ範囲で出土している。例外として、調査区南西グリッド 4803 - 2721 において土器がまとまって出土しているがこれらの土器は遺構に伴っていない。遺構検出面に押し付けられるようなかたちで出土している。出土した土器の一部

は表面が磨滅し、文様を読み取ることが出来なかった。

遺物は縄文時代早期から晩期までの土器が出土しているが、縄文時代後期の遺物は出土していない。また、石器や近世以降の陶磁器が数点出土している。全体としての出土数は少ない。多くは水の影響からか表面が磨滅している。比較的数量が多いのは早期の土器である。石器も出土しているが殆どが剥片であり、ツールは石鏃のみであった。遺構に伴って年代が判別できる遺物は溝跡 S D 72 から出土した縄文中期の土器のみである。

以上のことから、今回調査した場所は遺跡の縁辺部であると考えられる。遺物数の少なさから集落として中心をなしていた場所とは考えがたい。また、遺構や遺物が検出された場所は調査区の北側に偏っている。そのことから遺跡の中心は調査区の北側にあると考えられる。時代は縄文時代早期、もしくは中期が中心となる集落跡だと考えられる。なお、八合田遺跡の西側、最上川右岸に縄文時代中期の拠点集落と考えられる落合遺跡がある。今回出土した中期の土器と何らかの関係性が考えられる。

なお、今回の調査で少なくとも 2 回の土地改良を行った可能性を示した。最近の改良は現代であり、壁の層序からビニールが出土していることからいえる。そしてそれ以前の改良についてだが近世に行われたと考えられる。

2 森の原遺跡第 1・2 次

森の原遺跡は、山形県村山市大字土生田字^{ねづみだ}鼠田に所在する遺跡である。山形盆地の北端、遺跡西側を流れる最上川右岸の山麓斜面に広がる後背湿地に位置する。

調査は 2 年間に渡って行い、3 つに分けた調査区延べ 4430 m² を調査対象としている。

遺構は、性格不明遺構、溝跡、井戸跡、土坑、小柱穴などが見つかっている。

第 1 次調査で検出された遺構は溝跡、小柱穴のみである。主に西側の A 区で見つかっている。小柱穴には柱痕が確認できるものもあり、遺構としての残存状況は良好と言えるが、遺構内からの遺物の出土はほとんど無

く、時期の特定には至っていない。また、建物跡の痕跡も見受けられなかった。

第2次調査で当初遺構と確認出来たものは、調査区北東側にかけて広がる砂と粘土が交互に堆積した溝状遺構と小柱穴のみであった。そのため、遺構の可能性のある縄文土器片が集中して出土した部分にトレンチを設定し、下層の状況を確認することで再度遺構検出することとなった。

性格不明遺構と分類したものについては、遺物集中地点を掘り下げていく過程においてプランが確定したものである。その中で、SX005、SX007、SX009の3つに関しては、幅が3～5mの円形状を呈するところは共通している。

遺物については、第1・2次調査合わせて整理箱で9箱出土している。縄文土器片、石器、土師器、須恵器、近世陶磁器など多種にわたる。その中で大半を占めるのが縄文土器であり、特に縄文時代晩期の特徴を示すものが多く、三叉文が特徴の大洞式に属する土器片なども出土している。また、SX009からは凝灰岩製の有孔石製品が出土している。用途は不明であるが、石の中央に直径5mmほどの孔があいており、あけた際の加工痕跡もわかることから製作過程の一端がうかがえる。

遺構の中で遺物が出土しているのは、SK203とSK247の土坑である。SK247からは、縄文時代晩期に属する石鏃が見つっている。SK203は、SX001の遺物集中地点の掘り下げ後に多数のピットとともに検出された。その土坑の2層目から土師器甕が潰れた状態で発見されている。SX001出土遺物の残存状況が悪いため時期の特定には至っていないが、これにより縄文時代の堆積層の下から、より新しい時代の遺物が出土する年代の逆転が生まれることになる。

この年代の逆転は2次堆積の可能性を示している。確認を行うためSX001出土の炭化物をAMS年代測定にかけた。結果年代は1490年～1603年を示した。このことから近世に洪水もしくは土地の改変がなされたことが示される。

また、遺構内から検出された火山灰からも同じことが言える。この火山灰は肘折カルデラを給源とする肘折尾花沢テフラであるとされ、暦年は約1.1～1.2万年前と推定される。この火山灰はSX007やSD239の床面付

近から検出されているが、分析結果からテフラの降下堆積層が攪乱を受け、再堆積した状況が確認できた。この堆積物は遺跡周辺の段丘や丘陵部に薄く分布していることが分かっているため、調査区内で検出された火山灰は、周辺の丘陵部などから泥流などとともに流れ込んできたものと推測される。

以上のことから、調査区内に堆積する縄文土器出土層や遺構覆土は、水流や泥流により2次堆積を受けたのかもしれない。もしくは土地の改変によって他所から運びこまれたものと考えられる。

今回の調査では遺跡の性格や人間の営みの痕跡などが明確に分かるものは少なかった。だが、遺跡から多くの遺物が出土していることから、この土地で昔から人々が生きていたことは確かである。

なお、継続された第3次調査において十和田a火山灰がレンズ状に堆積した下層の河川跡から須恵器の坏が出土している。今回第2次調査でSK203から出土した土師器との関係が考えられ、平安時代には生活の場として利用されていたことが伺われる。

3 今宿大谷地遺跡

今宿大谷地遺跡は大石田ゴルフクラブの東側、国道13号沿いの丘陵に位置し、大石田町と尾花沢市との境に位置する。遺跡は南北の丘陵に挟まれた谷間の北側丘陵の中腹に位置する。谷間には1条の水路が形成され、周辺には沼地が存在していた。調査前、現場は段丘上になっていたがこれらは畑地を形成するために土地を改良したためで改良以前の地形は北から南へ傾斜する斜面であったことが調査によって確認された。段丘の形成を行うため遺跡周辺は大きく改良、改変されたとみられる。

調査区南側は盛土がなされた部分がみられ、調査区北側は削平を受けているとみられる。北側は急な斜面になっており黒ボク層が検出されずさらに表土が薄い。南側は表土が厚く、層間で重機の痕跡がみられた。恐らく北側を一部削平し、その土を南側に盛ったと考えられる。

検出面上面に残された火山灰を分析にかけたところ十和田中振テフラという結果が出ている。遺跡から出土している遺物は縄文時代中期の遺物が中心であり、あわせて検出面と遺構覆土に大きな土質の違いは見受けられなかった。検出面の年代に関する理化学分析を行って

ないため根拠に乏しいが、この火山灰は土地改変により調査区近辺から移動してきたものと考えられる。または調査区北側の丘陵上部より流れ込んできたとも考えられる。なお、検出された場所はトラックのタイヤ痕があり、そこに踏みつけられたようにして検出された。また、この火山灰は遺物集中地点であるグリッド 5406-1600 でも検出されている。この地点が盛り土によって築かれていることを支持する結果となっている。

遺構数は少なく、土坑と地床炉、柱穴 1 基のみが検出されている。地形からしても集落の中心とは考えがたく、集落の縁辺かキャンプサイトであったと考えられる。地形から推測するならば、調査区北側の丘陵上部に集落跡があり、そこで使用されていた土器などを斜面部分へ廃棄したと考えられる。だがこの場合、通常の集落から廃棄される遺物の量と比べると出土量が少なすぎる。土地が大きく改変されていることから、遺物の多くもその際

に削平され運び出されたとも考えられるが遺構の存在する理由も不明瞭になる。

キャンプサイトであった場合、一時的に当地に来て狩りなどを行う場所であったと推測される。遺物については持ち込んだものが破損し、その場に廃棄していったものが溜まったと考えることが出来る。または、狩りの場として頻繁に訪れる場所であったとすれば、備え付けとして放置していたとも考えることが出来る。地形的なところも含め、水の確保も可能で沼地には食糧となる水鳥や動物、魚などが集まってきていたであろう。

現状では土器の廃棄場所かキャンプサイト、もしくは時期を別にし、両方の使われ方をした場所であった可能性も考えられる。

いずれにしても当時の人々の生活の一端が垣間見える遺跡である。

参考文献

- 山形県企画調整部土地対策課 1979 『土地分類基本調査「尾花沢」』
 山形県教育委員会 1981 『熊の前遺跡来迎寺遺跡発掘調査報告書』 山形県埋蔵文化財調査報告書第 34 集
 山形県教育委員会 1981 『赤石遺跡北原遺跡発掘調査報告書』 山形県埋蔵文化財調査報告書第 35 集
 山形県教育委員会 1996 『山形県中世城館遺跡調査報告書第 2 集(村山地域)』
 山形県教育委員会 2012 『分布調査報告書(38)』 山形県埋蔵文化財調査報告書第 215 集
 山形県教育委員会 2012 『山形県内重要遺跡確認調査報告書(4)』 山形県埋蔵文化財調査報告書第 216 集
 山形県教育委員会 2013 『分布調査報告書(39)』 山形県埋蔵文化財調査報告書第 217 集
 財団法人山形県埋蔵文化財センター 1995 『宮の前遺跡第 2 次発掘調査報告書』 山形県埋蔵文化財センター第 19 集
 財団法人山形県埋蔵文化財センター 1996 『落合遺跡発掘調査報告書』 山形県埋蔵文化財センター調査報告書第 36 集
 財団法人山形県埋蔵文化財センター 1999 『宮の前遺跡第 3 次発掘調査報告書』 山形県埋蔵文化財センター調査報告書第 65 集
 財団法人山形県埋蔵文化財センター 2002 『北島遺跡発掘調査報告書』 山形県埋蔵文化財センター調査報告書第 108 集
 財団法人山形県埋蔵文化財センター 2009 『滝ノ沢山遺跡発掘調査報告書』 山形県埋蔵文化財センター調査報告書第 181 集
 財団法人山形県埋蔵文化財センター 2012 『作野遺跡第 3 次発掘調査報告書』 山形県埋蔵文化財センター調査報告書第 205 集
 公益財団法人山形県埋蔵文化財センター 2013 『北原 2 遺跡第 1・2 次北原 4 遺跡発掘調査報告書』 山形県埋蔵文化財センター調査報告書第 207 集
 宮城県教育委員会 1986 『七ヶ宿ダム関連遺跡発掘調査報告書Ⅱ 小梁川遺跡』 宮城県文化財調査報告書第 117 集
 宮城県教育委員会 1987 『七ヶ宿ダム関連遺跡発掘調査報告書Ⅲ 小梁川遺跡』 宮城県文化財調査報告書第 122 集
 青森市教育委員会 2003 『深沢(3)遺跡発掘調査報告書』 青森市埋蔵文化財調査報告書第 67 集
 米沢市教育委員会 1997 『台ノ上遺跡発掘調査報告書』 米沢市埋蔵文化財調査報告書第 55 集
 米沢市教育委員会 2006 『台ノ上遺跡発掘調査報告書』 米沢市埋蔵文化財調査報告書第 88 集
 村山市教育委員会 1989 『土生田桶遺跡発掘調査報告書』
 大石田町 1993 『大石田町史(通史編 下巻)』
 村山市史編さん委員会 1982 『村山市史別巻 1』 原始・古代編
 芹沢長介 1990 『日本陶磁体系 1 縄文』 平凡社
 九州近世陶磁学会 2000 『九州陶磁の編年 - 九州近世陶磁学会 10 周年記念 -』
 藤沢良佑 2002 『瀬戸・美濃大窯編年の再検討』 瀬戸市埋蔵文化財センター研究紀要第 10 号
 岩崎義信 2003 『右撚り・左撚り - 縄文の土器文様と紐の撚り -』 山形県長井市古代の丘資料館第 9 回企画展

写真図版



ピット SP 3 断面 (南東から)



柱穴 SP 9 断面 (西から)



柱穴 SP39 断面 (北から)



ピット SP41 断面 (西から)



ピット SP45 断面 (東から)



柱穴 SP47 断面 (西から)



ピット SP67 断面 (北から)



柱穴 SP71 断面 (西から)



柱穴 SP84 断面（西から）



柱穴 SP106 断面（南西から）



土坑 SK17 断面（北西から）



土坑 SK85 断面（東から）



土坑 SK32 断面（西から）



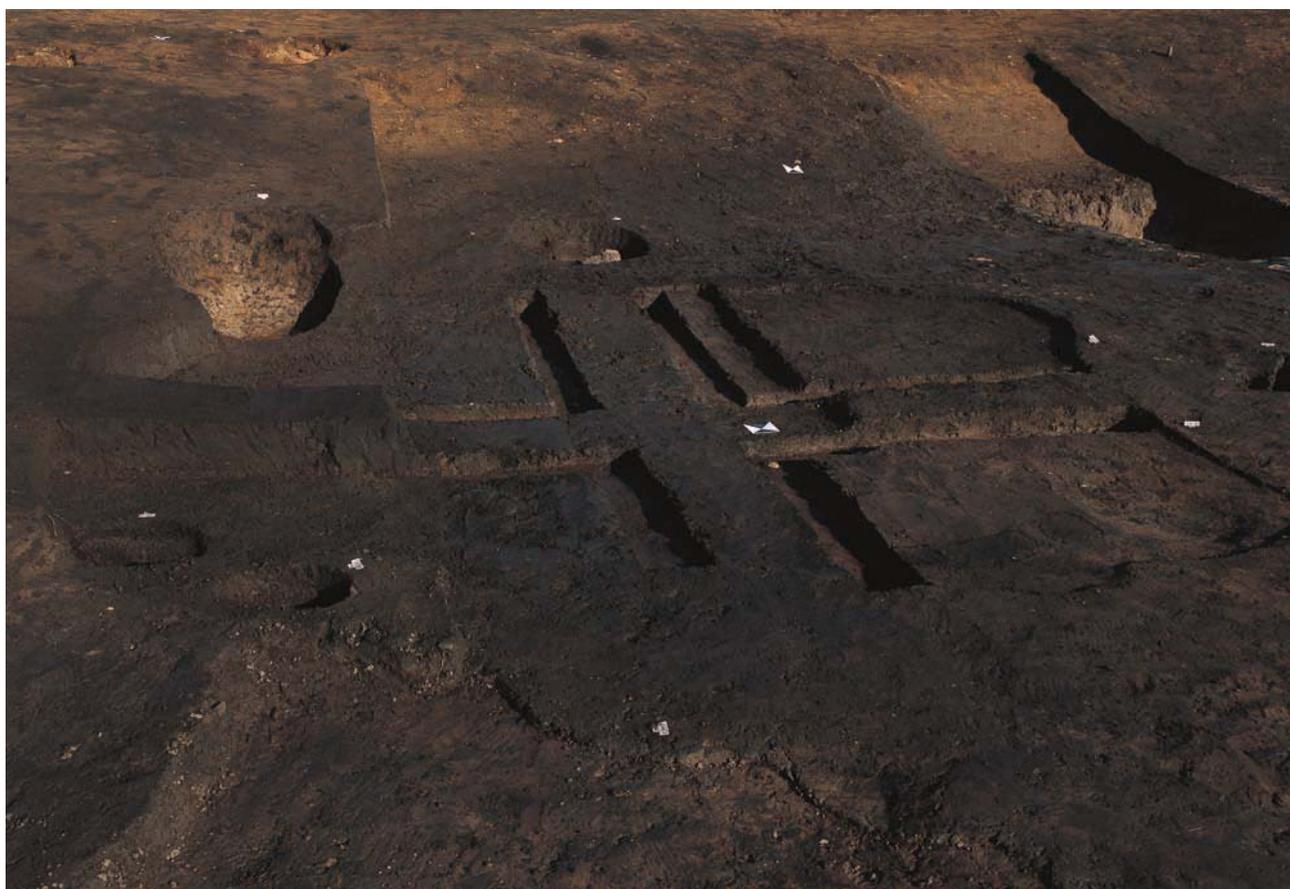
土坑 SK43 遺物出土状況 (南西から)



グリッド 4803-2721 遺物出土状況 (南東から)



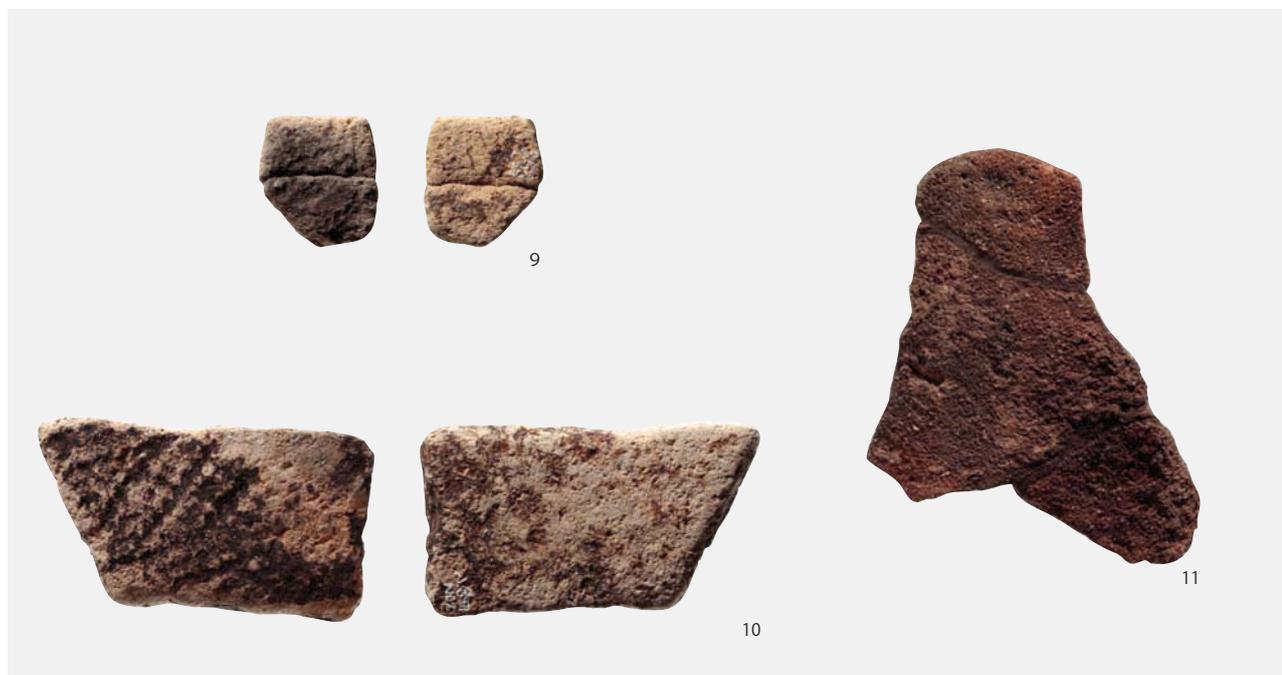
溝跡 SD72 断面 (北から)



性格不明遺構 SX66 断面 (西から)



縄文土器（1）



縄文土器（2）、陶器、瓦質土器、石器



A区 完掘状況（北西から）



B区 完掘状況（南西から）



C区 遺構検出状況（南から）



溝跡 SD39 断面 (西から)



ピット SP2 断面 (東から)



ピット SP23 断面 (南から)



ピット SP28 断面 (南から)



ピット SP29 断面 (南から)



ピット SP31 断面 (南から)



ピット SP34 断面 (西から)



ピット SP35 断面 (南から)



ピット SP43 断面 (南から)



ピット SP49 断面 (南から)



ピット SP51 断面 (東から)



性格不明遺構 SX1 断面 (南から)



A区南部サブトレンチ (南から)



石鍬出土状況 (南から)



A区基本層序 (西から)



B区基本層序 (東から)



C区 南部完掘状況（南西から）



G4901 火山灰検出状況（西から）



G3903 遺物出土状況（南から）



土坑 SK247 断面（南から）



RQ008 出土状況（東から）



溝跡 SD239 断面（南から）



井戸跡 SE137 完掘 (東から)



ピット SP188 断面 (東から)



ピット SP230 断面 (南から)



性格不明遺構 SX001 完掘 (西から)



土坑 SK203 遺物出土状況 (南から)



RP011 出土状況 (西から)



ピット SP193・194 断面 (南から)



ピット SP195 断面 (南から)



性格不明遺構 SX005 完掘（北から）



性格不明遺構 SX007 完掘（南から）



性格不明遺構 SX008 完掘（北西から）



性格不明遺構 SX009 調査状況（西から）



溝跡 SD237 断面 (東から)



ピット SP14 断面 (西から)



ピット SP172 断面 (南から)



ピット SP174 断面 (東から)



ピット SP175・176 断面 (南から)



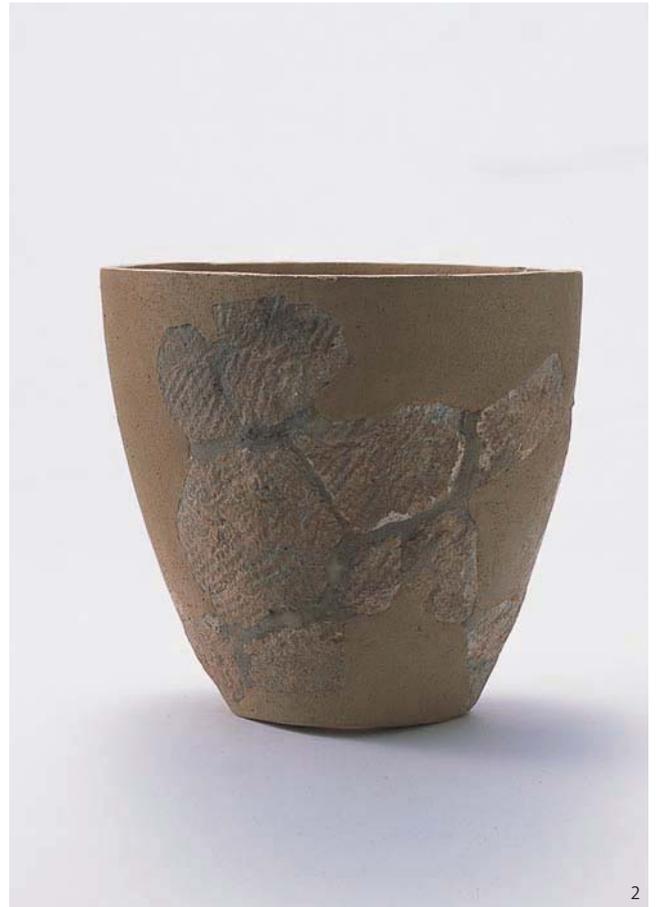
ピット SP221 断面 (西から)



ピット SP249 断面 (西から)



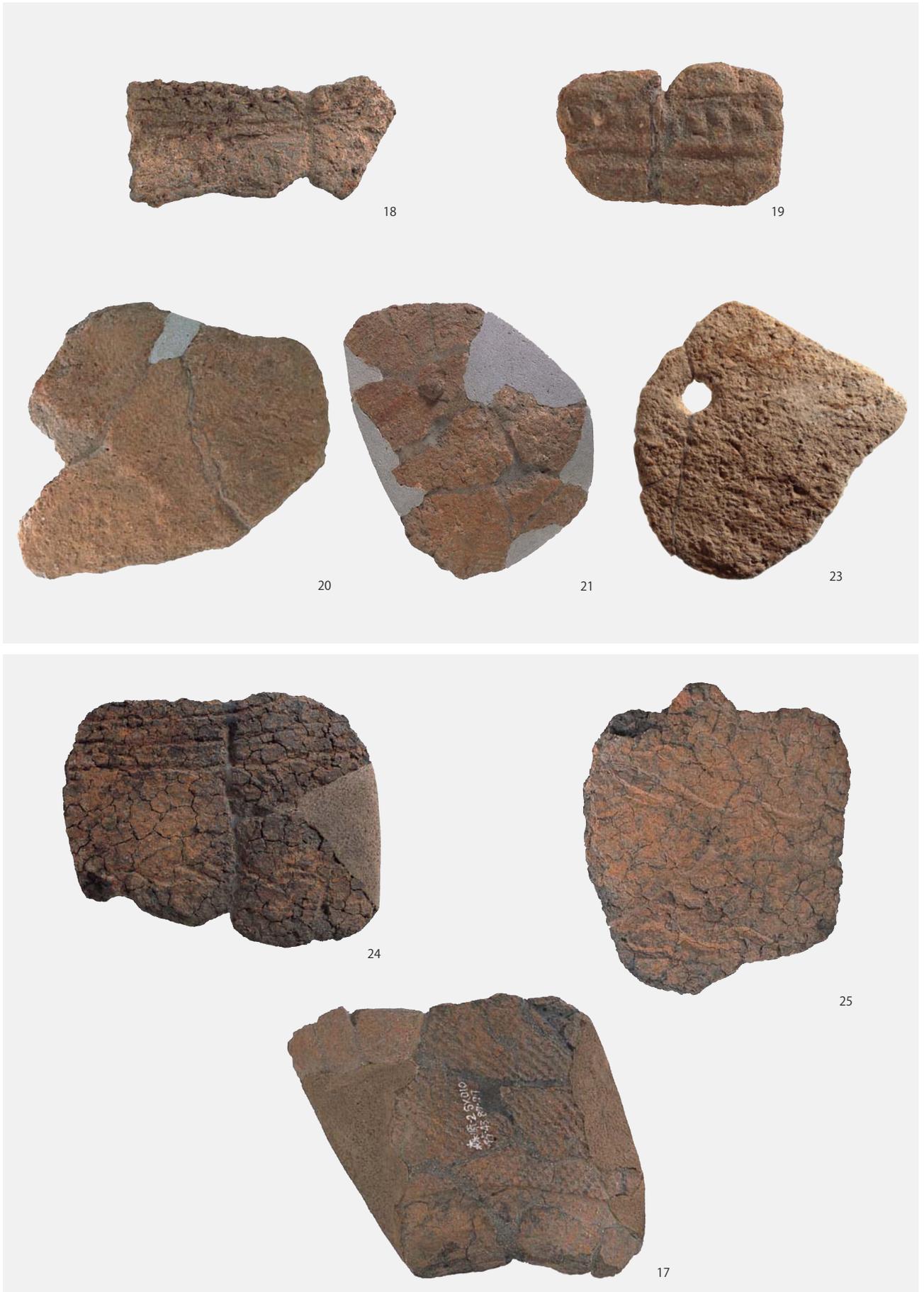
ピット SP278 断面 (西から)



縄文土器 (1)



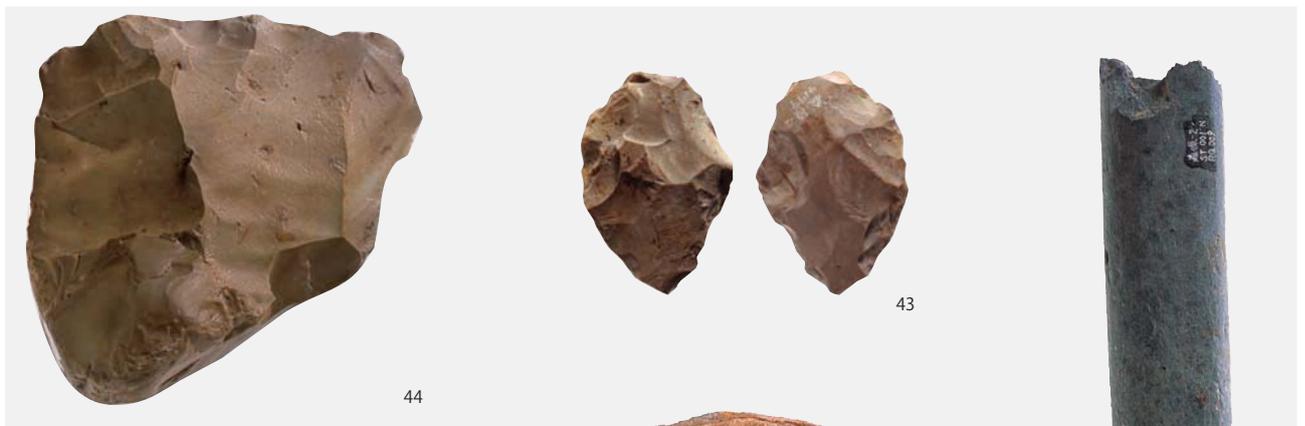
縄文土器 (2)



縄文土器 (3)



縄文土器 (4)



石器、石製品



48



49



50



51

52

53



56: 側面



56: 側面・底部



54: 内面と外面



55: 内面と外面

土師器、須恵器



63: 側面



63: 側面・底部



陶磁器、銭貨



遺跡全景（写真上が西）



調査区西壁断面（北から）



柱穴 SP2 断面（北西から）



土坑 SK11 断面（西から）



土坑 SK3 検出及び遺物出土状況（西から）



土坑 SK3 断面（北から）



土坑 SK3 遺物出土状況（北西から）



土坑 SK3 完掘（北から）



土坑 SK8 断面及び遺物出土状況 (東から)



土坑 SK8 完掘 (東から)



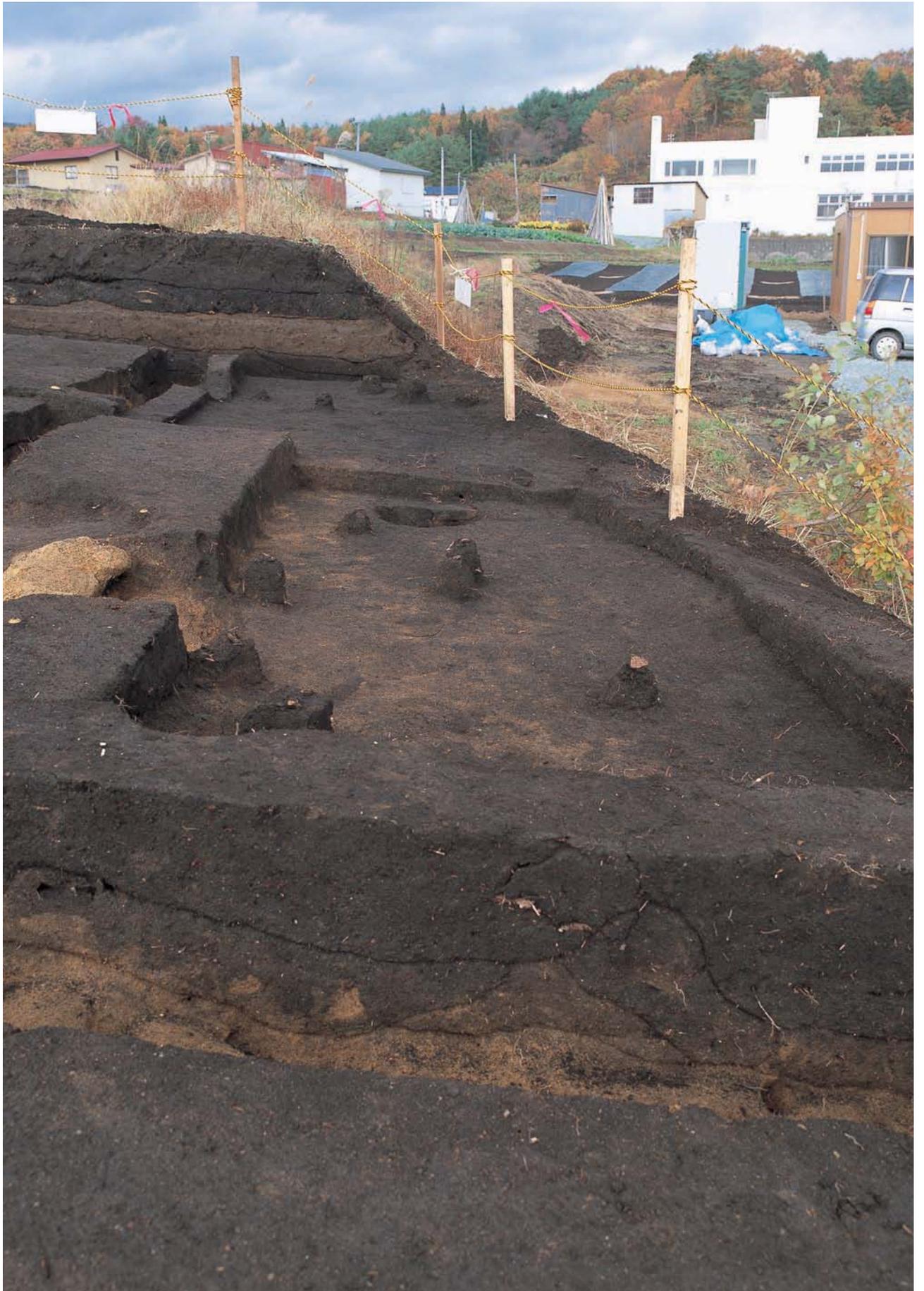
地床炉 SL19 検出 (北東から)



地床炉 SL19 断面 (北東から)



地床炉 SL19 焼土検出 (北東から)



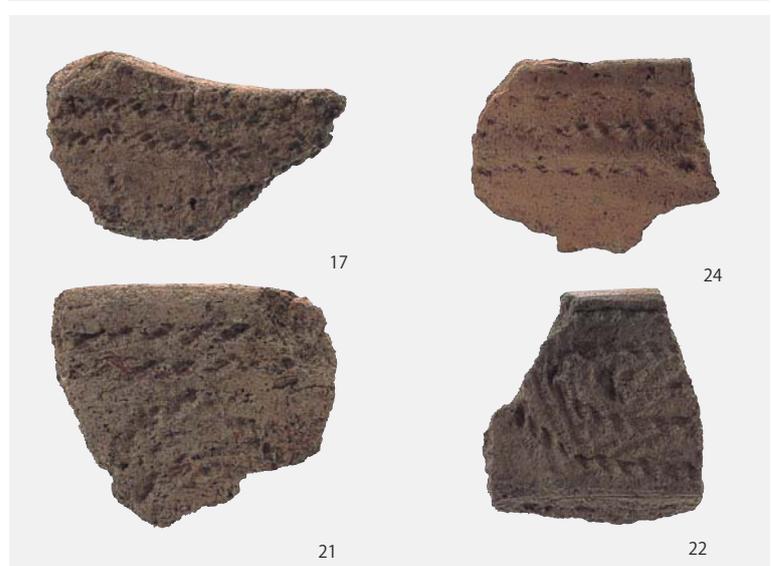
遺物包含層と遺物出土状況（西から）



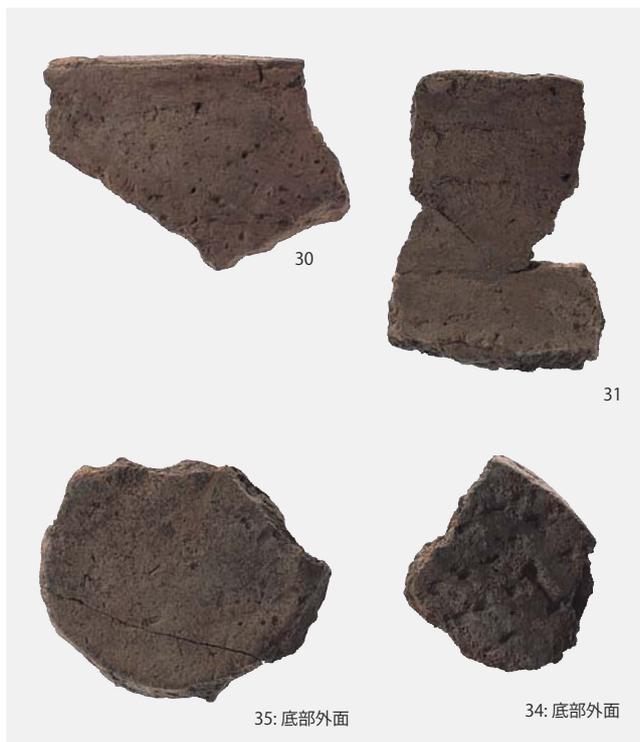
5: 外面と内面
縄文土器 (1)



15: 底部内面と外面
縄文土器 (2)



縄文土器 (3)



縄文土器（4）、石器



43



44



45



46



47

石製品、礫

報告書抄録

ふりがな	はちごうたいせき もりのはらいせき いましゆくおおやちいせきはつくつちようさほうこくしょ
書名	八合田遺跡 森の原遺跡第1・2次 今宿大谷地遺跡発掘調査報告書
副書名	
巻次	
シリーズ名	山形県埋蔵文化財センター調査報告書
シリーズ番号	第213集
編著者名	渡辺和行 伊藤大介 後藤枝里子 五十嵐萌
編集機関	公益財団法人山形県埋蔵文化財センター
所在地	〒999-3246 山形県上市市中山字壁屋敷 5608 番地 TEL 023-672-5301
発行年月日	2014年3月31日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯 ° ' "	東経 ° ' "	発掘期間	発掘面積 m ²	発掘原因	
		市町村	遺跡番号						
はちごうたいせき 八合田遺跡	やまがたけん 山形県 むらやまし 村山市 おおあざ 大字 とちうだあざ 土生田字 はちごうた 八合田	208	053	38° 33' 06"	140° 23' 21"	20100908 }	600	東北中央自動車道（東根～尾花沢）建設事業	
									20101126
もり 森の原遺跡第 1・2次	やまがたけん 山形県 むらやまし 村山市 おおあざ 大字 とちうだあざ 土生田字 ねずみだ 鼠田	208	048	38° 33' 37"	140° 23' 51"	20101004 }	780		
						20101130 20110517 }			3,650
						20110930			
いましゆくおおやち 今宿大谷地 いせき 遺跡	やまがたけん 山形県 きたむらやまぐん 北村山郡 おおいしまち 大石田町 おおあざいましゆく 大字今宿 あざおおやち 字大谷地	341	134	38° 57' 30"	140° 40' 18"	20111018 }	450		
						20111117			

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
八合田遺跡	集落	縄文	溝跡 柱穴 性格不明遺構	縄文土器 石器 陶器	(文化財認定箱数：1)
森の原遺跡第1・2次	集落	縄文 平安	溝跡 井戸跡 土坑 性格不明遺構	縄文土器 石器 石剣 須恵器 土師器	(文化財認定箱数：9)
今宿大谷地遺跡	集落	縄文中期	土坑 柱穴 地床炉	縄文土器 石器 石製品	(文化財認定箱数：6)

要約	八合田遺跡からは縄文時代早期及び晩期の遺物が出土し周辺に縄文時代早期の遺跡が存在する可能性を示すことが出来た。森の原遺跡では、水により浸食された状況が確認された。その中で二次堆積化で平安時代の遺物が出土したことは、今後この地域を調査する中で一つの指針となる。今宿大谷地遺跡からは縄文時代中期の土器がまとまって出土した。遺跡周辺は土地の改変を大きく受け削平されていたが地床炉などの遺構も検出された。キャンプサイトの可能性がある。
----	---

山形県埋蔵文化財センター調査報告書第 213 集

八合田遺跡・森の原遺跡第 1・2 次・今宿大谷地遺跡発掘調査報告書

2014 年 3 月 31 日発行

発行 公益財団法人 山形県埋蔵文化財センター
〒 999 - 3246 山形県上市市中山字壁屋敷 5608 番地
電話 023-672-5301
印刷 藤庄印刷株式会社
〒 990 - 0025 山形県山形市あこや町 3 丁目 18-30
電話 023-674-8181